◆昨今、北朝鮮の非核化をめぐり北朝鮮とその周辺国の交流が活発化しており、その中でも 中国は平和交流の鍵を握っている国であると言える。このことから我が国日本と中国の友 好関係は必要不可欠であり、日中友好大学生訪中団の意義はそこはかとなく大きい。

私が中国に対するイメージはこうであった。日本に最も近い社会主義国にひとつであり、未だに発展途上であるこの国では、政府によって厳しい検閲がされており、様々な自由の権利が制限されている。そんなイメージからか私は、この国を訪問することが少し怖くもあった。しかし、典型的な社会主義国のように見えていた、中国はめまぐるしい発展を遂げていることを実感した。今回現地に赴くことによって発見したことが3つあった。

まず、中国の電子マネーの普及率の高さである。中国のどこへ行ってもスマートフォンで支払いをすることが可能であり、人々が Wechat Pay や、ALIPAY で支払いをする様子を数多く見た。なかには電子マネーでないと支払いできないところも多々あり、改めて普及率の高さに驚かされた。すべての面で日本は中国よりも発展していると誤解していたが、未だ現金社会である日本が見習わなければならない部分であると感じた。

次に、北京大学の学生との交流から彼らの中国政府に対する感情である。言論の自由が制限されているイメージからか、彼らは保守的な意見を持つ傾向があるのではないかとわたしは勝手に思っていた。しかし、彼らはとてもリベラルな視点を持っており、政府の動向について常にアンテナを張っていた。その芯の強さに私は感銘を受けた。また、政府の検閲の件について質問すると、意外な答えが返ってきた。中国の大学では外部のインターネットにアクセスできる場所があり、そこから情報を得ることができるというのだ。もはや、今の中国に厳粛な社会主義国家の面影を垣間見ることはなくなってきたとこの交流から強く感じることができた。

最後は中国の学生が日本との友好関係をどのように考えているかである。今年日中友好 40 周年になるが、まだまだ両国の間には解決しなければならない問題、歴史認識や領土問題などが山積みである。両国の学生はこの友好関係の重要さについて自覚している。北京大学の学生に聞いたところ、青年同士の交流が日中友好に繋がると答えた。青年同士がお互いの文化や歴史認識の違いについて理解し合うことで誤解を防ぐことができるという考え方だ。私も彼らと同じくこの青年交流が私たちに新しい価値観や偏見のない視点をもたらしてくれることを信じている。

今回の日中友好大学生訪中団で私はメディアでは報道されることない真実の中国の姿、 人々を実際に感じ、体験することができた。もしこの機会がなければ日中友好に真正面から 向き合うことはなかったように思う。私たち青年同士が互いのことを理解し合い強調して ゆく。これは日中間だけではく、外交問題すべてに活かせることであると思う。今回このよ うな貴重な機会を与えてくださった日中友好協会の皆様、学校関係者の皆さんに感謝した い。また、これからも日中間の動向を常に注視し、またこのような機会がればぜひ、活用し ていきたい。 私は、今回日中友好大学生訪中団に参加することができて心から幸せに思います。このように貴重な経験をさせていただいて、嬉しく思うと同時に、これからの生活に今回学んだことを生かしていかなくてはならないと思っています。

私が中国に訪中する前は、中国という国に対してマイナスイメージしかありませんでした。世間的に言われているマナーが悪い、イメージが悪いという印象をしか持っていませんでした。しかし、実際に訪中し、現地の学生と交流することによってそれも1つの文化であると思うことができました。例えば、食事の際、私たち日本人は口を閉じて静かに食べるということがマナーであったり、食事を食べる前や食べた後には、「いただきます」「ごちそうさま」と言うというマナーがありますが、中国は日本にあるマナーがなかったりすることがあるので、自分だけの国を見て世界のマナーも決めてはいけないことを自分の目で見て感じることができました。今では、日本人が中国や、中国人に対して偏見の目を持っていることを不思議に感じています。日本の中では、中国のことを悪く言う機会が多いと思います。確かに、日中間の関係を見て中国を悪く言う人はいますが、実際に中国に足を運んでいないのにも関わらず、中国人を悪く言うのは違うと思います。今後の大学生活において何かの機会で中国の良いところ、中国の魅力について伝えたいなと思いました。中国に行かなくては分からない中国の魅力があるので、まずは家族や友人などの身近な人から伝えていきたいと思います。

また、それ以上に私が感動したこととして、現地の学生は向上心があり、日本に対しても 興味を持ってくれていて、英語を話せることはもちろん日本語も話すことができていて私 は感動しました。私は大学で教育系を学んでいるので、中国の教育にも興味があります。私 が関わったほとんどの学生が英語を喋ることができているので、いつから英語を勉強をし 始めたか質問したところ、中国では小学生、早くて幼稚園から英語教育が教育の一環として 行われているそうです。この点は日本とは違うところだなと思いました。日本も小学校の高 学年から英語教育をやっていますが、中国は、学歴社会なので教育には特に力を入れている のだなと改めて感じた部分でした。また、就職の話になった際には、中国では大学院に行く 人がほとんどだという意見を聞いて私は驚きました。日本では、確実に就職したい場合は大 学院に進むのではなく、大学を出てすぐに就職するのが一般的です。日本と中国は育つ環境、 教育環境が全く違うことを感じた一面でした。私は大学院の進学を考えているので、他の国 の同世代の人の話を聞いて大変勉強なりました。また、ディスカッショディスカッションを した際には、東京大学、東京外語大学と同じグループでした。両者の学校は、英語、中国語 で会話をすることができていて、ただ相槌を打つだけの自分を情けなく思いました。同世代 の仲間から得た刺激を無駄にせず、今後の生活にも生かしていきたいと思います。普段の生 活で得ることをできないことを得ることができたので、感謝したいと思います。

メディアや本などで中国の批判などを耳にしますが、「百聞は一見にしかず」のように、 自分の目で見たことを信じ、中国の良いところを自らも発信していきたいと思います。日中 の関係は、まず学生の力でよくしていくべきだと思います。学生から日本と中国の友好を築 き、政治などの緩和になれれば良いと思います。今回貴重な経験をさせていただきましたこ とに感謝致します。事務局の皆様本当にありがとうございました。今後もお世話になる機会 があります際にはどうぞよろしくお願い致します。

◆今回の訪中を通し、私は学んだことが3つある。1つ目は、リアルな中国・中国人の姿だ。 訪中前、正直私の中での中国に対するイメージは良くなかった。アルバイト先の飲食店で接 する中国人の多くは傲慢で、不愛想。ニュースや新聞を通して知る中国は日本の真似ばかり していて、PM 2.5 などの環境問題への配慮もない。日中間におけるいくつもの政治的、歴 史的な問題。中国に対して、決して良いとは言えない印象を持っていた。だからこそ、私は 本当の中国の姿が知りたいと思い、今回訪中団に参加すると決めた。そして、そこには想像 以上にたくさんの新しい中国の姿があった。中国人は決して傲慢なわけではなく、陽気で大 らかだった。アルバイト先で中国人客のテーブルに料理を運ぶたびに不愛想だと感じたの は、中華料理店ではテーブルまで何度も食事が運ばれてくるため、ウェイターが料理を運ぶ 行為は彼らにとって普通だったからだ。また、上海では環境を改善するために自然増加の計 画が実行されていた。さらに、学生との交流を通して、彼らが中国政府に感じているリアル な想いや将来への不安を知り、同じ年代の同じ人間であることを実感した。中国に対して良 いイメージを持っていなかったのは、中国人や中国の文化を知ろうともせずに、固定概念や メディアの噂だけで勝手に中国を決めつけていたからだった。リアルな中国・中国人の姿を 知って、隣国であっても日本も中国もそれぞれ全く異なる文化や習慣があるという当たり 前なことに気づいた、そして、だからこそ私たちはもっとコミュニケーションをとる機会を 増やし、互いにその違いを知ることが、日中関係改善のベストな方法だと思う。

2つ目は、中国の「美しさ」を学んだ。正直これまで中国に対して「美しい」というイメージがあまりなかった。しかし、街中には多くのしだれ柳があり、どこの飲食店にもアンスリウムの花が咲いていた。また、訪れた寺院や観光名所はどこも歴史深く華やかで、夜になるとあちらこちらでライトアップされていた。さらに、日常的に花茶を飲む習慣があることは美しい文化だと感じた。今まで知らなかった中国の美しさは、私の中で中国に対するイメージをガラッと変えた。

3つ目は、「日中友好」は決して日本政府と中国政府における関係を意味しているのではなく、私たち国民同士の心の繋がりや相互理解を意味していると学んだ。今回の訪中の中で一番学びが多かった場面は、現地の学生や翻訳のボランティアスタッフと話している時だった。彼らとの交流はたった数時間、たった数日間だったが、社会に対して同じような想いを抱いていたり、将来に対して同じような不安を抱いていたり、心と心が繋がったと感じる瞬間が何度もあり、一生の友達になれた。特に印象に残っているのは、日本語を勉強している中国の学生と話していた時、彼女が「私の祖父母・両親は日本が嫌いで、日本語を勉強する私のことを否定する。でも私は日本人も日本の文化も大好きだし、祖父母と両親の日本に対するイメージを変えることが私の夢なんだ。」と言っていたことだ。彼女の発言は私の心に深く刺さった。日中間には政治的・歴史的な問題がいくつもあり、日本を良く思わない中

国人がたくさんいることは分かっているし、同じように中国をよく思わない日本人もたくさんいる。しかし、実際にコミュニケーションをとることで人と人は繋がることができるし、私たちは将来日中関係を変えていけると感じた。今回の訪中を通し、中国が好きになったことはもちろん、もっと中国を知りたいと思った。また、訪中団に参加したからこそ、私たち訪中団員はこれからも中国との友好な関係を築くために努めていくべきだと思った。私自身も、何らかの形でこれからも中国に関わっていきたいと思う。

◆この度日中友好大学生訪中団に参加させていただき、私の中国に対するイメージは大き く変わりました。

日本と中国は今から 40 年前の 1972 年、国交を正常化させました。しかし依然として尖閣諸島の領土問題や、南京大虐殺などの歴史認識について問題を抱えています。こうした状況の中で、実際に訪れたこともない中国とそこに住む中国人を、どこか敵視してしまう日本人は私だけではなかったように感じます。また反対に、中国人の多くは日本人のことが好きでないのではないかとも思っていました。

しかしながら、団員として中国に滞在している間、私が現地の方々の敵意や悪意を感じることはみじんもありませんでした。交流させていただいた中国の学生さんたちは、皆さんとても優しく、温かく、明るい方々ばかりでした。好きな芸能人の話をして盛り上がったり、将来の夢を語り合ったり、その時の場の雰囲気や感覚、楽しさは日本の友人同士で話しているときと、何の違いもありませんでした。誰しも悩んだり迷ったりしながら、今生きている時間を目一杯楽しんでいる、普通の学生でした。日本のアニメなどをきっかけに、日本に興味を持って、大変な努力をして、驚くほど流暢な日本語を話す学生さんの存在を知って、私はとても嬉しかったです。私も中国語を勉強してみたいと思いました。

一週間の滞在期間に中国で関わった方は、学生さんたちだけではありませんでした。地下鉄の切符を買うところで戸惑っていると、進んで助けてくださった方がありました。その後、ご親切に街の案内までしてくださって、とても有り難かったです。北京から杭州までの国内線で隣に座った方もたくさんお話しをしてくださいました。印象的だったのは、その方が第二次世界大戦について訊ねられたことです。私ともう一人の団員は、日本政府の歴史認識はあまり良くないと思うと答えました。するとその彼は、当時日本は強く、中国は弱かったから仕方がなかったと言いました。私は意外な言葉を聞いた思いがして、心底驚きました。それと同時に少しホッとしました。このような話は決してタブーではないのだと気づきました。私はそれまで中国で、戦争の話題は怖くて切り出すことができませんでしたが、暗い過去から目を背けるのではなく、こうした穏やかな話し合いによる意見のすり合わせを行っていくことが大切なのだと思います。政治も人と人との関わりであることに間違いはないのではないでしょうか。

北京で訪れた創業公社は国と連携して、若者の起業支援を行っています。2013年に設立されましたが、わずか5年で大きな企業へと成長しました。そこは中国版シリコンバレー

と呼ばれていて、様々な技術を応用して発明された、これまで見たことのない製品がたく さん展示されており、先進的で、洗練された印象を受けました。別の都市上海は東京がい くつもあるように広く栄えた街で、特にそこで見た夜景は圧巻でした。

けれどもガイドさんのお話によると、私たちが見たのは中国の一つの側面に過ぎないそうです。中国の中でもいわゆる田舎の方には、深刻な貧困問題があります。一方都市では大気汚染は緩和されたものの、環境問題を完全にクリアする日はまだ遠い先のことでしょう。この問題は世界共通です。そして日本が対処しなければならない問題といえば、まず少子高齢化があります。さらにエネルギー問題や食糧問題、国の抱える借金などがあり、残念ながら私たちの行く先には暗雲が立ちこめています。

ですから、こんな時代だからこそ、私たち日本と中国は、文化の違いを認め合いつつも協力し、助け合い、目先の利益を追求するのではなく、両国を含めたアジアと世界の平和のために力を尽くすべきだと考えます。それは不可能なことではないはずです。なぜなら、私たちは顔を合わせて、互いを尊重したコミュニケーションをとれば、必ず打ち解けることができるからです。私はその喜ばしい事実を、今回の訪中で身をもって知り、確信しています。今後の日本と中国のさらなる強固な信頼関係構築の一助となれるような人材となるべく、私自身学びを深めて参ります。この度は、貴重な経験をさせていただき、誠にありがとうございました。

◆初めての中国。北京、杭州、上海と長いようで短かった 1 週間。私は日中友好大学生訪中団に参加し、現地での交流や視察を通してとても多くのことを学ぶことができました。今回の訪中によって過去から現在、そして未来において日本と切っても切れない関係にある中国の全く知らない一面を知り、訪中前に勝手に抱いていたイメージは崩れました。訪中前まではメディアのごく一部の情報から中国を判断していたことを痛感しました。メディアの裏側にある実際の中国を五感で感じることができたので、今回日中友好協会の訪中団員となれたことは大変幸運なことであったと、帰国後の今、とても感じています。

訪中前に抱いていた私の中国への印象は、主に4つあります。1つ目は急激な経済成長によってもたらされる大気汚染の問題。2つ目は中国人の日常生活におけるマナーの悪さ。3つ目は中国の知的財産権の侵害問題の多さ。4つ目は中国人が日本に対して、悪いイメージを持っていることです。このようにネガティブなイメージを持って訪れた中国でしたが、実際に自分の目で見てみると、それらの多くは広い中国のたった一部なのだと気付かされました。1つ目の大気汚染に関して、日本からマスクを持っていったものの、一度も使うことはありませんでした。しかし、中国にいた1週間、一度も星をきれいに見ることはできませんでした。空が曇っていた、町が明るすぎる等の理由は考えられるとは思いますが、空気がすんでいるとは言えないと思いました。2つ目の中国人のマナーの悪さは訪中の間は特に感じることはありませんでした。携帯を操作しながら車の運転をする人が多い、歩きたばこが多いと感じましたが、それは文化の違いだと感じたので、マナーが悪いとは思いませんでし

た。日本人が、訪日中国人の行動に対してマナーが悪いと感じることはあるかと思いますが、その行動は中国にくると、中国人の方みんながする行動だとわかったので、マナーの悪さによってもたらされる考えというより文化の違いによってもたらされる考えだと思いました。3つ目の中国の知的財産権の侵害問題は、豫園(上海)を訪れた際に感じました。豫園ではたくさんの某有名ブランドの偽物商品が多く販売されていました。模倣品・海賊版が中国で多く出回っているこのような現状を見過ごせば、日本企業への影響は計り知れないと改めて感じました。4つ目の中国人が日本に対して、悪いイメージを持っていることは訪中の間は感じませんでした。一方で訪中したことで日本に対してポジティブなイメージを持っている中国人の多さに驚き、とても嬉しく感じました。北京大学の学生も浙江大学の学生も「日本が大好きです。」と言ってくれました。日本にいた時は、日本のアニメやドラマの素晴らしさに気付いていませんでした。しかし、訪中して日本のアニメ、ドラマや歌が中国でとても人気だと知って、改めて日本文化の素晴らしさを実感しました。

今回の訪中を通して私は、日本は今後も中国と信頼のもと衝突をしながらも建設的な友好関係を深めていくべきだと思いました。千人交流会で日本学生代表中島さんの挨拶に合った通り、衝突と友好は両立できるものだと私も思うからです。異文化理解のために、私は実際に足を運び、物事を多面的にとらえ、その国の人と交流することの重要性を痛感しました。今回の訪中で中国との関わりが終わるのではなく、今回の訪中がスタートだと感じています。日中の懸け橋として頑張りたいです。最後に、今回「日中双方」の多くの方と出会い交流したこと、このような大変貴重な機会を設けてくださった協会・政府の方々、訪中を企画運営してくださった方々、すべての関係者の方々に感謝しています。ありがとうございました。

◆訪中前の中国、中国の方のイメージは正直あまり良いものではありませんでした。中国での日本や日本人に対する印象や、逆に日本の中国に対する印象はお互いネガティブなものであると考えていました。私にとってメディアの影響は大変大きく、また家族からうける中国のイメージを持ったまま二十年間生きてきました。実際に多くの人が聞いたことのみで判断しているのが現状だと思います。しかし、この考えを変えたのが今回のプログラムでした。プログラムの中にあった"現地の同世代の学生"との交流会は、一番大きなターニングポイントとなりました。特に北京大学の学生との交流会が印象的です。私が話した学生は国際関係の学部の方で、同じ学科ということもありすぐに打ち解けることができました。アイスブレイクとして共通の話題であった将来の職業や、今持つ就職に関する悩みを話し、またアニメや漫画の話をすることで距離を縮めることができました。そして私が一番気になっていた、中国人・日本人のお互いが持つ実際のイメージや関係性を聞くことができました。私が考えていたよりも好印象でした。むしろ日本のことを好きだという人が多くいたことに驚きました。アニメや漫画はもちろん、日本のドラマや映画から女優や俳優の影響も大きく、そこから日本語を学び、日本に興味を持つ学生が多かったように思います。ある学生の

両親は、日本に対してあまり良いイメージを持っていなかったけれど、その学生の影響から 日本に理解を示すようになったという話もしてくれました。中国では規制が厳しく日本の ドラマや文化に触れる機会が多くない中で、興味をもってくれたりそれが世代を超えて広 がっていることに大変嬉しさを感じました。

百聞は一見に如かずという言葉をよく耳にしますが、今回このプログラムで特に実感しています。先入観からネガティブなイメージを持ったままその国を見ることによって、実際は良い面悪い面両面ある物事の悪い面ばかり見てしまっていたことに気づきました。現地に行くことで自分の目で、耳で、肌で感じることで中国に対する気持ちは大きく変化しました。当たり前のことではありますが、同じ人間であって、その国の文化や違う面をお互いに受け入れることで気持ち・考えは変化すると同時に、今までの考えやイメージを持つ周りの人にも広めたいと強く思います。実際帰国してからすぐ、家族にこの話をしました。すぐに変えることは困難ですが、それでも興味をもつところから徐々に理解を深める一歩になればと思います。この密度の濃い中国での七日間は、私にとって大きなターニングポイントとなりました。物事を見るうえで、実際にその地に赴くことの重要さや、互いを理解するのに必要なことは言葉だけではない。共通の話題や興味を少しでも持つことで人の気持ち・考えは変わっていく。そして、今後の日中関係を考える際に今回感じた気持ちや考えを忘れてはいけないと強く思いました。これからは身近にできることとしてもっと多くの人に広め、理解を深められたらと考えます。

◆私にとって、今回は初めての海外でした。訪中団への参加を通して、実際に足を運び、現地で見て学ぶことの大切さを知ることができました。

今回の訪中には、北京第二外国語学院で日本語を専攻している学生の皆さんが、ボランティアとして同行してくださいました。一緒に万里の長城に登ったり、北京大学の学生の皆さんとの交流の時に通訳をしてくださったりしました。空いている時間や一緒に食事をする時にボランティアの皆さんと大学での生活や余暇の過ごし方について話しました。中国における政治やインターネット環境が日本と異なることについては事前に知っていたので、私たちと中国の学生には感覚に隔たりがあるのではと思っていましたが、そうではないことが分かりました。好きな芸能人や日本のアニメについて話し、楽しい時間を過ごしました。中には、寿司や納豆などの日本食が好きな学生もいて、驚きましたがとても嬉しかったです。また、今回の訪中団に参加するにあたり、私たちの大学では各自リサーチクエスチョンを立て、中国の学生との交流を通して検討することが課題として設定されていました。私は「ワークライフバランスの現状は、日中間でどのように異なるのか」というリサーチクエスチョンを選びました。大学の授業で日本における働き方の現状について学んだことをきっかけにワークライフバランスに興味を持つようになりました。働き方の柔軟化を進める欧米諸国と日本の比較検討が行なわれることは多くありますが、アジアの中で比較されることが少ないと感じていたので、訪中団参加を通して、大学生の視点から検討したいと思いました。

今回の訪中全体を通しては、複数の大学との交流がありましたが、リサーチクエスチョンについては、北京第二外国語学院の皆さんに話を伺うことができました。「ワークライフバランス」という言葉自体は知られていないものの、仕事と生活のバランスについての話題が上がることはあるようです。中国の女性は両親や夫の協力を得て、仕事と家事の両立をしているそうです。また、学生に関しても学業と生活のバランスが議論されることがよくあるのだと伺い、とても勉強になりました。

今回の訪中では、大学訪問や企業訪問、千人交流大会への参加など非常に内容の濃いスケジュールでしたが、合間の自由時間に同じ大学の仲間と王府井に散策に行きました。滞在していたホテルから地下鉄で移動しようとしましたが、切符の買い方が分からず、駅に設置された機械の前で困っていました。その時、近くにいた一般の方に声をかけて頂き、地下鉄の利用の仕方を教えてくださいました。その方は北京に住んでいる方で、仕事で日本人と関わることがあるそうです。その方は地下鉄を降りた後も、私たちのために王府井を案内してくださいました。日本にいても、ここまで親切にして下さる方には会ったことがなかったので、とても感動しました。現地の方の優しさに触れることができ、嬉しかったです。

訪中団への参加を通して、テレビやインターネットでは分からないことが多くあることが分かりました。中国に住む方々は日本に住む私たちと近い感覚を持って生活し、中にはとても親切な方もいることを実感しました。大変貴重な経験になりました。今後、学生生活や仕事をする中で、積極的に中国に関わりたいと思うようになりました。今回の訪中でお世話になったことへの感謝を伝えられるような活動をしていきたいです。

◆私が訪中前に中国に対して抱いていたイメージは、決して良いとは言えないものでした。 そのイメージとは、スリや置き引きが多く治安が悪いこと、食の安全性が低いこと、急激な 経済成長により大気汚染がひどいこと、日本人に対し敵対心を持っている中国人が多いこ となどでした。これらのイメージはマスメディアや他者から大きく影響を受けているもの であるという自覚はありましたが、なかなか実際に中国人と接する機会がなく、そのイメー ジを払拭することができずにいました。そのため、実際に中国に行き自分の目で中国を知り たいと思い、日中友好大学生訪中団に参加させて頂きました。今回の訪中で、特に印象的だ った出来事を2つご紹介致します。

1つ目は、北京第二外国語大学からボランティアとして来てくださった中国人の大学生との交流や、北京大学と浙江大学でのディスカッションです。大学生活や、日本語を学ぼうと思ったきっかけ、さらにはプライベートな話まですることができ、とても密度の濃い時間となりました。今回交流した学生は日本語を学んでいる学生が多かったため、ディスカッションはほとんど日本語で行われましたが、彼らの話す日本語の流暢さに驚きました。私が彼らと交流して感じたことは、中国人の大学生は一人一人将来の目標を持っていて、それを実現するためにたゆまず努力しているということです。日本語を話す学生の多くが半年から1年ほどで日本語を習得したと言っていたことから、中国の大学生がいかに真剣に日本語に取

り組んでいるのかが感じられました。また、大学卒業後に就職する学生が多い日本とは違い、 中国では大学院に進学し、興味のある学問の専門的な知識を学んでから就職する学生が多いということを初めて知ることができました。

2つ目は、自由時間に訪れた王府井での現地の人とのふれあいです。夜、班の仲間と王府井へ移動しようとした時に切符の買い方が分からず戸惑っていた私達に声をかけ、自動券売機の使い方を教え、電車まで案内してくれた方がいました。それだけで十分すぎるほどにありがたい事でしたが、その方はさらに王府井まで一緒に来てくださり、街を案内してくださいました。なかなか会話は難しかったものの、私達が聞き取れるよう英語と中国語を使って説明してくださったことに感銘を受けました。同じ日本人でもここまでしてくれる人はいないのではないかと思うほどに温かく接してくださり、一生忘れられない貴重な体験となりました。

この2つの体験以外にも、この7日間で接した方々は友好的で、親切にしてくださいました。心配していた大気汚染も全く気にならず、訪中前に抱いていたイメージが非常に偏ったものであったことに気付かされ、中国に対するイメージはガラリと良いものに変わりました。百聞は一見に如かずということわざがありますが、実際にその土地に足を運ばなければ分からなかった人の優しさに触れることができ、マスメディアや他者から与えられる情報を鵜呑みにするのではなく、自分で体験することの大切さを学びました。今回の訪中では北京・杭州・上海を訪問し、現地の人との交流や現地の料理、空気を知り、多くのことを学ぶことができたと思います。しかしそれは広い中国の一部に過ぎないと思うので、ぜひまた中国を訪れたいと考えております。まだまだ日本人の中にも訪中前の自分のように中国に対しあまり良いイメージを持っていない人もいると思うので、今回の訪中で気付いた中国の良さを伝えていきたいと思います。

最後になりましたが、このような機会に恵まれ、日中双方の多くの方と出会えたことを嬉しく思います。訪中団を通じてお世話になったすべての関係者の皆様に感謝申し上げます。 本当にありがとうございました。

◆今回の日中友好大学生訪中団に参加し、私は今までの自分がいかに安易な考え方をしていたのか、改めて気がつくことができたように思います。まず、中国に旅立つ前の私は、正直なところ中国に対して良くないイメージを抱いていました。中国というと、「爆買い」や「パクリ」といった品のない言葉がすぐに連想されたからです。実際に、買い物カゴの中へ山のように化粧品を放り込んでいたり、電車内にもかかわらず大きな笑い声を立てて話していたりする中国人観光客の方々を自分の目で見たことがありました。そのような中国人観光客の姿を目にし、私の中では、「日本では恥のように感じられる行動も、中国ではむしろ普通の行動なのだ、マナーというものがあまりないのだ。」という偏見が生まれていました。そのような考えがあったため、日中友好大学生訪中団の参加のお話をいただいたときもあまり乗り気ではなかったのですが、「この機会を逃したら、おそらく今後の人生で中国に

行くことはないだろうし、ほかの学校の大学生らと団体で行くのなら安全だろう。」という 気持ちから、思い切って参加することにしました。

そして実際に中国に到着し、中国の学生の方々との交流を繰り返していくうちに、彼らは 私たち日本の学生と何ら変わりなく学校生活を送り、ドラマやアニメの感想を言い合って 楽しむような日常を送っていることが分かってきました。それら日本のカルチャーは中国 の若者たちの日常に溶け込んでおり、「日本のあるアイドルが本当に好きで、もうずっと応 援しているんだ。」と目を輝かせながら嬉しそうに話す学生の姿はとても印象的でした。ま た交流の中でとても気の合う中国人の友人が 2 人もできたことは、私にとって大変良い思 い出となりました。 彼女らとは今も連絡を取り合っていて、お互いの文化について質問し 合ったり、今日あった出来事を報告し合ったりしています。

このような心温まる体験がたくさんあった一方で、「やはり」と感じる場面もいくつかありました。街中でたびたび見かける「愛国」、「平等」といった言葉が書かれた看板は、本来自由なものが国によって強制されているようで、私にとっては異様なものに映りました。また、バスを降りるなり有料の傘を手渡そうとする中国人の方には、文化の違いだとは言えない、貧困層の生き方を見たような気がしました。

今回中国で学んだことは、日本で暮らしていては気がつかなかったことばかりだったと感じます。日本で中国に関するニュースは日々発信されています。しかしそれは誰かの目を通した中国を見ているのであり、それを見て下した判断は必ずしも正しいものではありませんでした。また同時に、自分の目で見た上の判断であったとしても、文化や歴史などの知識が備わっていなければ、その判断は独りよがりなものになりやすいとも感じました。もちろん、入ってくる情報の全てを自分の目で確かめるということは不可能です。しかしそれでも、出来る限り自分の目で確かめる努力をしていきたいと思いました。

この7日間での経験は、間違いなく私の今後の考え方、生き方を大きく変え、また視野を 広げました。この出会いや思い出をいつまでも忘れずに、また機会があればぜひ、中国を訪 問したいと思います。

◆訪中する前から中国は私にとって興味深い国でした。大学で国際政治を学ぶにつれ、今後 友好的な日中関係を結ぶことが不可欠であると実感していると同時に、この関係には歴史 認識の相違等の問題を抱えているからです。私は、これから日本と中国が将来的に良好な関 係を築いていくためにはどのような方法を私たちがとるべきであるのかを現地を直接赴き ながら考えたいと思い、今回の訪中団に臨みました。私は、中国人学生の意見、そして、学 生交流、中国視察を通じ実際に見て感じたものをもとに以下の考えに至りました。日本と中 国の2か国が友好的な関係をより築くためには2つのことが今後カギとなりそうです。

1つは、二か国間の文化的交流を増やすことです。私は今回この訪中団のおかげで相互理解 のためのコミュニケーションがとれたことを深く実感しました。例えば、私たち日本人が誇 りとするおもてなし精神。交流をしたある中国人学生は日本への旅行中、日本人の絶え間な く続く笑顔での接客に若干の違和感と恐怖心を抱いたそうです。私たち旅行客を騙そうとしているのではないかと思ってしまったと答えてしまいました。私たちは反対に中国のレストランの店員さんは不愛想で冷たいと感じる場面がありました。しかし、中国人から日本の接客に対する意見を聞いた後だったので、その行動模様の経緯が理解でき、コミュニケーションの重要性を体感しました。また、文化の一つである言語。互いの言語学習をすることもより一層とした相互理解につながることがわかりました。私は中国を訪問して驚いたことは中国人学生の日本語の流暢さ、そして日本文化の理解です。日本の最新ドラマから政治問題まで幅広い知識を持った中国人学生にたくさん出会いました。その国の言語を学ぶと文化を理解するだけでなく、母国語だけでは見えてこない多角的なとらえ方が身につきます。私は中国についてより知るためにはその言語を通じて学ぶことであると再認識できたので、勉強しようという意欲がわきました。このように、日中の歴史観の違いや社会問題の認識の差といった問題は、お互いの言語学習、そして交換留学生を増やすことなどによって改善されるのでなないでしょうか。

2つめに今後の日中関係に必要なことは経済に結びつきを強めることです。中国を訪問し、中国の経済発展を目の当たりにしました。買い物の際に現金を使わないw chat pay や、若者が企業した多くの会社、電車には投資を促進する多くの広告、そして上海の国際的かつ持続可能な都市を目指す具体的な計画を展示する展示館。私が思っている以上に聞いていた以上に発展し、将来が明るい国であることを実感しました。特に北京の小さな中華街の中の小さな屋台の店までもがw chat pay のインフラが整っていたことには大変驚きました。今後日本に必要なことは政治的な対立ではなく経済的な協力であり、それは中国にとっても利益があることです。この経済的な協力を推し進めることができるのは政治ではなく私たち民間です。交流した学生は日本で働きたい、あるいは中国にある日本企業で働きたいと言っていました。また、私は将来中国の若者が積極的に行っている起業活動等のビジネスストラテジーを学ぶことも大切だと思います。このように同じ東アジアの仲間として互いに協力し経済発展することが友好的な日中関係を国レベルで築くことを可能にすると思います。

日本と中国は歴史的に深いかかわりを持っている国です。戦争をしていたのはごく最近のことでそれまでの歴史を振り返ってみると遺隋使をはじめとし、幾度となく多岐にわたって交流をしています。私はこの兄弟のような関係である中国と日本が、将来、文化交流や経済協力を通じて友好的な関係強めることができる、と訪中団を経験し実感しました。この思いを胸に、中国への関心を持ち続けようと思います。

◆訪中前に抱いていた中国に対するイメージはマイナスなことが多かった。訪中後そのイメージが完全に払拭されたかと聞かれれば、払拭されてはいない。正直、衛生面と交通面は想像より厳しいものがあった。しかし、訪中してみてよい印象を抱いたのは間違いない。私が驚いた車の渋滞もバスガイドの方が「この渋滞は将来世界遺産になるだろう」とおっしゃ

っていた。この言葉の真意はわからないが見る人によってはその土地の名物にもなりうる。 そもそもマイナスと感じるのは主観だ。私の価値観でしかなく他人もそう思っているとは 限らない。マイナスの面ばかり気にしていては何も変わらない。自分がマイナスだと感じる 理由、そうなった中国の背景を知ることが重要なのではないかと考える。

訪中前は「中国人は…」とひとくくりにしたような言い方をしていた。だが国は異なってもみな人間である。我が強い人間もいればとても内気な人間もいる。そう気づけた。日本と何も変わらないと思った。極端な話、中国人はみな日本人が嫌いだと思っていた。しかし訪中して気づけたことは両国間にそこまで分厚い壁は存在しないということだ。それでも疑心暗鬼だった私は北京第二外国語大学のボランティアの方にも話を聞いた。お友達は日本のことをどう思っているのかと。返ってきた答えは日本が好きな人が多いということだった。やはり日本のアニメはとても人気で日本に興味を持ってくれている人が多いらしい。日本に行ってみたいお友達が多いそうだ。それを聞いてとても嬉しくなった。こんなにも若者間で文化を通して交流があったのかと驚いた。

また、文化以外でも日本と中国はつながりがあることに気づいた。杭州のある都市は静岡県と姉妹都市であるのだ。茶とみかんでつながりがあるということだった。民間レベルを超えて交流があったことは驚きだった。

私たちの交流は、振り返ってみるととても有意義な時間だったと思う。北京大学と浙江大学の学生との交流は短い時間だったため深い話をすることはできなかった。それでも仲良くなったと思う。進んで話しかけてくれた学生もいたのでとても楽しくお話しすることができた。北京で共に行動してくれた北京第二外国語大学の学生とはそれぞれの国の若者がどのような考えを持っているのかなどたくさん話せた。話したボランティアの方の多くは、日本に一回ほどしか行ったことがないらしい。さらにその訪日も留学ではなく今回の私たちのように交流だったそうだ。中国での勉強だけで、これほどまで日本語が上達したのかと思うと驚愕だった。そのことをボランティアの方に言うとそんなことないと謙虚だった。自分も英語や中国語の勉強を頑張ろうと思った。また彼女たちと会ってお話がしたい。

訪中で学んだことは交流だけではない。飛行機やバスの中、ホテルでの宿泊、自由時間でのまち観光、どれもが勉強になった。まちで知り合った中国人とは、言葉が通じなくても仲良くなれたことからコミュニケーションの楽しさを学んだ。また、中国を訪問したからこそ日本を見つめ直すきっかけになった。日本にいたら気づけないことも訪中したからこそ気づけた。例えば中国の公共施設では入り口付近に手荷物検査があった。これは日本ではなかなか見ない光景だった。中国の方が日本より人口が多いのに、駅や施設内に荷物検査があっても混雑しないのはなぜだろうと疑問だった。このように当たり前が国によって違うということに改めて気づけた。

両国に歴史的な壁はあるが、良い交流があることも事実だ。今回の交流が日中関係の良い将来につながってほしいと考える。また、次世代を担う若者たちがお互いのことを知るということは世界の将来にもつながっていくだろう。この訪中が私の人生によい影響をもたらしたのは間違いない。この経験をもっと人生にいかせるようこれからも精進していきたい。

今回の訪中の機会を作ってくださった中国、また盛大に歓迎してくれた中国の関係者と大学生、そして訪中前からも支えてくださった日中友好協会の皆さまに心から感謝申し上げたい。

◆「中国?韓国と似たような感じかな。」もともと韓国や中国のアイドル文化に興味があり、 大学でも中国語を学び、日頃から中国について興味を持っていた私は、ほかの大学の参加者 よりも中国を、中国人を知ったつもりになっていました。しかし、今回の訪中を通して、自 分のイメージと似ている部分、異なる部分を自分の目で見て、中国の人と交流することで、 実際に何かを体験してみることの大切さを改めて感じるとともに、これからの日中交流の 方向性について考えることができました。私が見てきた「中国」は、想像していたより空気 が綺麗で、人も優しく、楽しいところでした。王府井に遊びに行ったとき、地下鉄の切符の 買い方にてこずっていた時、買い方を教えてくれたり、わざわざ買ってくれた人もいました。 交流した学生たちも、勉強重視の堅いイメージとは違い、人気の俳優や、ドラマの主題歌、 人気のアイドルの話で盛り上がったり、インターネットゲームが大好きという学生もいて、 日本の学生と変わらず、個性豊かな印象を受けました。仲良くなった大学生とは、帰国後も Wechat を使って交流が続いています。道路のや、公共のごみ箱の使い方など、日本と比べ ると汚いと感じることもありましたが、それも含めて、SNS の情報やテレビのニュースだけ では知ることができない中国を体験できたと思います。「百聞は一見に如かず」という言葉 の通り、聞いたことだけでなく自分で見て、感じたことを信じることで、マイナスなイメー ジも解消され、日中交流がより進むのではないかと思います。北京大学や浙江大学での学生 との交流を通して、日中の学生共通の興味の対象としてドラマやアイドル、ゲーム、アニメ などがあるとわかったので、難しい政治や国同士の関係と捉えられ、難しく考えられてしま う日中交流も、それらの共通の話題を使ってより身近に、「人」同士のつながりをつくる場 として若い人たちに呼びかければ、もっと進むのではないかと思いました。日中交流を経て 私が影響を受けたのは、中国の学生だけではありません。日本側のほかの大学からの訪中団 参加者とも、1週間ともに過ごして、いろいろな話をすることができました。それぞれがこ れまでどういう活動をしてきたのか。中国に対してどうして興味を抱いているのか、大学で 何を学んでいるのか、訪中団を通してどのようなことを感じたのか、どんな目標があってこ れからどのような活動をするつもりなのか等々、本当に様々な話を聞くことができました。 日中友好協会の方からも、日中交流に関わる仕事がどのようなもので、どういう経緯でその 仕事をするようになったのか、何が求められるのか等、自分の将来に役立つお話をたくさん 聞くことができました。同じ大学生という立場の人たちが様々な中国観、目標を持っている ことを知り、一緒に考えを共有することや実際に日中交流に関わって仕事をしている大人 の方の話を聞くことができるというのは、自分にとってとても大きな意味があることでし た。この文章を書きながら、大学一年生の夏というだらけてしまいやすい時期にこうした経 験ができるのは素晴らしいことで、この訪中団は、日中交流だけでなく、自分自身が成長す

るためのチャンスでもあったのだと改めて実感しています。今回の日中友好大学生訪中団の活動を通じて得た、経験に基づく自分だけの中国観、日本でのつながり、中国の学生とのつながり、中国語を実際に使うという経験等を大切にして、これからも日中交流に関わる活動にたくさん参加していきたいと思います。

◆「日本人は冷たい。日本に住み続けたいとは思わない。」中国人留学生、しんちゃんの言葉は私を大いに驚かせた。私の中国のイメージは、汚い、空気が悪い、図々しくてうるさいひとが多いというものだった。日本人が中国に抱くごく一般的なイメージだろう。だから、日本に来た中国人は皆、日本の環境の良さや日本人の礼儀正しさに心を打たれ、日本に居続けたいと思うと考えていた。そんな私にとって、しんちゃんの言葉は聞き捨てならなかった。自分の目で中国という国を見てみたいと思うようになった。

こうして訪中団への参加を決めた私だったが、中国に着いた当初はイライラと戸惑いば かり感じていたように思う。まず、入国するときに入国審査官の態度に悪い意味で驚かされた。中々指紋認証ができない私に対し、入国審査官は苛立ちを隠さずふてぶてしい顔で机を 叩いた。レストランでも不愛想な店員が無言で大皿を机にのせていく。日本の丁寧なお客様 対応に慣れきっていた私は、これらの出来事に恐怖さえ感じた。嫌な気分になったのは、従 業員に対してだけではない。モーニングの受付で、さりげなく列に割り込んできた中国人に は心底呆れたし、あちこちで鳴るクラクションに何度も腹が立った。

中国のいいところが、ほとんど見つけられなかった私の考えが変わり始めたのは、北京最後の夜に王府井に行った時だった。切符の買い方が分からず、友達と券売機の前で困り果てていた。すると、横から急におじさんが、中国語でワーワー何か話し始めた。どうやら私たちに、切符の買い方を教えてくれているようだった。私たちが中国語のまるで分からない日本人だと気付くと、お金を私たちから受け取り両替してくれた後、6人分の切符を買ってくれた。中国に来るのが初めてだということ、通訳してくれる人が誰もいないということを伝えると、王府井を案内してくれた。(今思うと、外国で知らない人に着いていくなど、無用心にも程があるが)

また次の日、北京から杭州に向かう時、空港のトイレで興味深い光景に遭遇した。私が手を洗っていると、個室から 4 歳くらいの女の子が出てきた。その子に向かって横で掃除していたおばさんが、何か大きな声で話しかけた。子ども相手に怒るなんて大人気ないと私が見ていると、そのおばさんは女の子を洗面台に担ぎ上げた。おばさんは女の子に手を洗わせると、そのまま手を拭く紙をとらせて、地面に降ろしてあげた。

これらの出来事が本当に印象的だった。他人と程よい距離を保つことがよしとされる日本で、見ず知らずの人間にここまで世話を焼く人は中々いないと思う。日本にはない、他人であっても御構い無しに助けてくれる文化が、中国には根付いている気がした。それは中国特有の暖かさであり、しんちゃんが中国で過ごし続けたいと感じる所以なのだろう。それ以降は、日本との違いに敏感になりすぎることもなく、中国観光を満喫することができた。

とはいえ、この1週間だけで中国の文化に順応しきることはできなかった。多分中国人に 割り込みされたり、大きな声で公共の場で話されたら、未だにびっくりしてしまうと思う。 しかし、今回の訪中団で中国の暖かい文化を知ることができ、中国の人々とうまくやってい ける自信が着いた。今後はより積極的に中国と関わり、中国の良い部分をもっと気づくこと ができたらいいと思う。

◆人生で一番時が過ぎるのを速く感じた八日間であった。私は中国と日本の類似点や相違点に面白さを感じて中国語を学び始めたということもあり、中国に対する嫌悪感や敵対心は元々無かったのだが、訪中前と訪中後とでは少し気持ちが変わったのを感じる。いくら中国に魅力を感じるからといって、中国人まで魅力的だとは限らないと思っていたのだ。実際そういう中国人もいるにはいるだろうが、訪中を終えた今冷静に考えてみると本当に失礼で恥ずかしくなるような考えだ。私達に関わってくれた中国人達は本当に優しかった。訪中団に随行してくれた中国人の方々も、北京大学・浙江大学で出会った中国人学生も、日本人への信頼を行動で示してくれた従業員も、困っていた私達をスマートに助けてくれた青年も、皆優しかった。彼らの優しさに触れるたびに、中国と中国人のことがどんどん好きになった。

中国を感じる瞬間というのがあった。勿論豫園など中華風の建築物や天安門を見た時にもそれを感じたが、自分でも予想しえなかった「中国」に幾度となく出会ったという話をしたい。巨大なビルの合間から、荒廃しきった通りや全く同じ形をしたマンションが何棟も建っていたりするのが見える瞬間である。日本ではなかなかお目にかかれない光景で、非常にわくわくした。周りに常に日本人がいる状態での訪中だったためあまり海外にいる感じがしなかったので、こういう瞬間に出会うと胸が高鳴った。隣国なのに、同じ都会でもこうも違うものかと見入ってしまった。だが日中どちらの街も清潔で洗練されているなど共通点も多かった。

交流会や施設見学は一生忘れられない思い出になった。北京大学や浙江大学での交流は短かったが濃厚な時間だった。私の話し相手になってくれた中国人学生達の意識や学習意欲の高さが眩しかった。ほとんどの中国人大学生がアルバイトをしないというのには驚いたが、中国人学生は「学生」の文字通り生きているのだなと思い妙に納得した。日本の学生の在り方が間違っているとも思わない。ただ面白い差だと思う。そしてそう思ったと同時に、物心ついてこのかたグローバリゼーションの風潮の中で生きてきた私達でさえこんなに違う価値観を持っているのに、私が今まで当たり前のようにアジアとして括ってきたものは何だったのだろうかと考え始めた。その完全な答えはきっと死ぬまで見つけられないだろうが、少なくとも私が今までアジア的だと思っていたのはオリエンタルな雰囲気だとか人種としてのモンゴロイドだとかの上辺だけのアジアだったようだ。見れば見るほど、ふれあえばふれあうほど自分という人間の浅さが露呈するのは恥ずかしいながらもラッキーな体験であった。でも中国人学生のように勤勉に考え続けていたら、いつかは自分なりの「中国

と日本の共通点」や「(東)アジアらしさ」を見つけることができるような気がする。

この訪中で人生が変わったか、という問いに答えるには時期尚早かと思われますが、学生 としての自分の生き方は確実にいい意味で変わったように思います。この訪中でお世話に なった全ての方に感謝申し上げます。

◆今回、私が日中友好大学生訪中団に参加させていただくことが決まった時、この訪中をより意義あるものにするため自分の中である三つの目標を立てた。

一つ目は中国の経済、政治、文化の現状を知ることだ。私は現在大学で中国語を専攻しており、授業では言語以外にも歴史や経済、政治についても学んでいる。そこから中国という国に興味を抱くようになり、実際に中国を訪れこの目で中国の現状を見たいという思いがあった。そのため今回の訪中への参加が決まった際に最初に立てた目標であった。実際に中国を訪れると、中国企業の訪問で経済成長の勢いを垣間見ることができたり、高いビルが立ち並んでいる町中で人々が路上に座り込んでいるのを見て貧富の差を強く感じたりと、たった一週間で授業では学ぶことができないような中国の現状を肌で感じることができた。

二つ目に立てた目標は中国人の友達をつくることである。中国に行くからにはやはり現地の人とコミュニケーションを沢山とりたいという思いがあった。これは現地大学の学生との交流会や食事で達成することができた。その際に現地学生が話してくれた日本語を学んでいる理由や日本語を学ぶモチベーションなどの話は大変興味深かった。更に多くの学生が既に将来に対する目標を持っており、自分とほとんど年齢の変わらない学生が自分のやりたいことをはっきり話す様子には刺激され、自分の将来を見直すきっかけにもなった。

そして三つ目の目標は留学についての見通しをたてることである。私は大学三年生の時期に長期留学をして中国語を勉強したいと考えている。今年の三月には、一か月間台湾へ短期留学へ行き、留学に対する決意を改めたが、まだどの地域どの大学に留学するかということまでは決められないでいた。しかし今回の訪中で中国の大学を見学することで、それぞれの大学のイメージをつかむことができ、留学に対する明確なビジョンや目標を思い描くことができた。そういったうえでも今回の訪中団は意義あるものであったと思っている。また二つ目の目標で挙げた中国の学生と友達を作ることは、図らずも留学について見通しを立てることにも繋がった。留学の相談に親身にのってくれたり、また現地の学生から大学の話を直接聞くことができたことは大きいと思っている。

また目標には掲げてはいなかったが、思いがけない収穫として日本の他大生との交流があった。目標でも立てたように当初は中国の学生との交流だけを重視していたが、中国に興味・関心を持つ同世代の学生とこれだけ多く話す機会は大変貴重であり、私の糧となったと感じている。様々な大学の方から、将来の夢や留学に対する目標などを聞いていると多種多様な考え方があり、興味深かった。また今回の訪中団で知り合った日本の学生の方から台湾の知人を紹介してもらったりする機会もあり、訪中団をきっかけに様々な人との交流の輪を広げることもできた。

更に私は今回の訪中団で日中友好協会の活動に興味を抱くようになった。団長の西堀さんのお話や駐日本国大使館の王婉さんのお話を聞いていると、私たち学生は未来の日中関係を担う若手として期待されており、大変多くの人がこの活動を支えてくださっているということに気づかされ、この訪中を通してその期待に応えたいという気持ちを持つようになった。そのためには私自身が中国との架け橋になれるような存在になることはもちろん、さらに私が訪中団でしていただいたように中国に興味のある若者を支援したいとも考えるようになった。日本と中国との関係がますます注目される今、中国に興味・関心を持った若者はこれからも多く現れるだろう。そんな彼らに対して、今回の恩返しするような形で、また今回受け取った襷を未来の若者に繋げるという意味でも、何らかの形で日中友好協会の活動に貢献したいと思う。

◆まず、東京外国語大学の中国語専攻ということで今回の訪中団に参加させていただき、東京外国語大学中国語科の教授の方々並びに日中友好協会の方々には大変感謝しております。 そもそも僕は中国の諸々の文化や民族、歴史が好きで中国語を専攻しようと考え、また、中国という大きな大陸は僕にとっては夢の場所でした。大学に入学して半年も経たないうちに中国渡航という一つの夢が叶って嬉しいです。

この旅で訪れた北京、杭州、上海はどれも中国の魅力が十二分に感じられる場所でした。 予想以上にインフラ整備が進み、道にはゴミが沢山落ちているというような場所はなく、む しろ綺麗でした。屋台が並ぶ商店街は活気に満ち溢れ、経済大国中国ここにありと断言でき るほどの勢いすら感じられました。

さて、この訪中団の大義の一つには、日中の若者が直に交流することで文化の差異を認識、 享受し、自分の目でお互いの国の本当の姿を発見することにあると僕は思います。その実、 僕は知人から中国人は優しいと何度も聞いたことがあったし、僕自身も中国には好感を持 っていました。今回の訪中で様々な学生や一般の中国人の方々と触れ合いましたが、彼らに 対するイメージは今も変わっていないどころか、より好感を持つようになりました。北京大 学と浙江大学では、同伴していた中国人学生の方々は少し緊張しつつも質問をしてくれた り、中国語を沢山教えてくれたりもしました。そこには、日本メディアが日常的に放送して いる険悪ムードはどこにもありませんでした。しかし、お互いが好感ばかりを持っている訳 ではありませんでした。早稲田大学に 1 年間留学していた香港出身のチャールズは日本で も会社では外国人が冷遇されていることを不思議に思っていました。他の国でも良く見ら れる傾向ではありますが、日本はおもてなしや思いやりの精神で広く知られている分、そう いった差別は意外なものとして見られるようです。また、彼らに将来の夢を尋ねたところ、 多くの学生がお金持ちになることと答えていました。日本では金持ちになるという夢はし ばしば卑しく感じられることがありますが、彼ら中国人は堂々と述べていました。お金が無 ければ何もできないのは最もなことで、彼らの旺盛な上昇志向感じました。このように、中 国で見聞きした全てのものを日本と比較して考えることが多々ありました。中国は平坦な 大陸が広大に広がっているため、北京や上海はあれほどのインフラを発展させることができたのでしょう。正直に言うと、上海や北京は日本の東京をはるかに凌ぐ超巨大都市だと感じました。一方で日本は細長い上に山がちな土地であるにも関わらず、戦後の急成長によってアメリカ中国と張り合えるほどの経済大国に発展しています。そう考えると日本も非常に優れた経済国であると改めて感じます。

僕は中国語選考であり、将来中国語を使って仕事をしたいと考えているので、今回はできるだけ中国語を使おうと決めていました。英語が通じるといえど、やはりその国の言葉を話すだけで自分に対する対応が大きく変わると今回確信しました。しかし僕の中国語もまだまだ未熟であることを痛感しました。今回の訪中で、中国語学習や中国に関する勉強への意欲が更に湧いてきました。

今回の訪中で日本と中国の未来の関係をよくよく考えることができました。過去に凄惨なことがあったのは変えられない事実ではあるし、現在になってもお互い譲れない点があるようですが、僕達訪中団のような若者はそれらのことに向き合い、未来志向で良好な関係を模索していくべきだと思います。メディアの情報に左右されがちな日本人ですが、謝った認識を持つ彼らに真実を諭すことも僕達の責務でしょう。しかし、真実が全て美談であることはありません。僕が見た中国には良いところも悪いところもありました。盲目的に中国を好意的に見るのではなく、そうした双方の視点を持つことこそが真のメディアリテラシーだと思います。その先にアジアの平和があると信じています。今回のたくさんの出会いに感謝して、また中国の友達に会える日を楽しみにしています。最後に、日中友好協会のスタッフの皆様、本当にありがとうございました。

◆「夢の国、中国」―研修会の冒頭で団長が放った言葉が訪中の間、そして今もずっと頭の中で漂っている。夢の国、まさしく私にとっての中国は夢の国だったのだ。以前から鉄道が好きだった私は、ある時(当時はまだ高校2年生くらいであったように記憶している)ふっと書店の本棚で手に取った中国鉄道の本に魅せられて以来、中国渡航に対してずっと憧れを抱いていた。モンゴルの大草原、新疆の砂漠、雄大な黄河長江、そして北京や上海の摩天楼―そんな目まぐるしく変わるような景色を体感してみたい。しかしながら受験期が近づく中で渡航が叶わなかった私は、少しでも中国の雰囲気を感じるために華人街へと通い詰めた。学校帰りに中国語の飛び交う空間で羊肉串、麻辣湯、蘭州牛肉麺などを味わう気分は格別であったし、中国渡航の夢は膨らむばかりであった。大学受験も「中国語、そして中国を学びたい」という一心で乗り切り、晴れて中国語専攻の大学生となった。だからこそ、訪中団員募集の話を大学の先生から伺った時には迷わず即座に応募したのだった。

だが、その理由は単に夢を叶えるためではない。本当の中国に少しでも触れたかったのだ。いくら夢を語っても、それはあくまでも自分が他人から聞いた中国の姿。実際に中国に行かねば、触れねば、中国を語ることは許されない。たった1週間の団体旅行で何が分

かるのかと言われたらそれまでだが、行かないよりはよっぽどマシだ。実際に、思いもしなかったこと、想像以上であったことには数多くであった。そのことについて以下に記そうと思う。

まずは接客だ。これについては話には聞いていたが、いざ実際に目の前でやられてしまうとかなり驚いてしまった。まず入国審査からして極めて無愛想だ。今朝は奥さんと喧嘩でもしたのだろうか、それとも常にこんな感じなのだろうか、係官のおじさまは口をへの字にして無言で私にカメラを向けパスポートにスタンプを叩きつける。初っ端から「洗礼」を受けた気分だ。その後も本屋に行けばスマホを弄りながら、土産物屋に行けば電話をしながらお会計ときた。まだまともに会計をしてくれてもコンビニの店員は私服と制服が混じっているし、どれもこれもまず日本ではありえないことだった。しかしそれは間違ったことなのだろうか?私は決してそうは思えない。入国審査だって入国できれば良いのだし、店では物が買えたらそれで良いのだ。店員が何をしていようが客として一番大事なことは求めているものが手に入るかどうかであり、着ている服など(流石に全裸は困るが)尚更どうでも良いことだ。むしろ日本のように下手にサービスを求めすぎたがために奇妙なクレーマーが発生するという事態が減りそうだとさえ思う。

さらに、人自体が無愛想であるというわけではないのだ。北京や杭州で出会った学生たちは皆日本語専攻や国際関係学部生であったということも考えても、皆とてもフレンドリーであった。また北京の街で出会ったお茶屋さんでは、私たちが日本人であることが分かると「日本人!乌龙茶!」というや否やとても美味しい烏龍茶を試飲させてくれ、その後もにこやかに話してくれた。お茶屋さんのおじさまは全て中国語で話してくるので私も言っている意味は半分くらいしか分からなかったが、とても友好的な雰囲気は充分に伝わってきた。

「日中関係の悪化」ということが囁かれる昨今、特にインターネット上では様々な反中国的な意見が見られる。その多くは領土・歴史問題や、訪日中国人のマナーの悪さが火種となっている。だがそれらのことは決して中国人を差別していい理由には絶対にならない。確かにマナー問題については改善されるべきだとは思うが、そこには間違いなく文化の違いが存在するはずだ。日本人と中国人、その相互の理解なくしてこの問題は解決できないだろう。何より中国人はフレンドリーな人が多いのだ。それは日本国内の華人街でも、中国本土でも感じたことだ。やたらと台湾が「親日」であると語られるが、台湾中国含めて中華系の人々は単にフレンドリーな性格なのではないのだろうかと私は思う。そのことを知らずして無差別な中国批判が進行してしまうのは悲しい限りだ。

もちろん中国で不満を感じることもあった。トイレが何より不便だった。紙がない、流せないなどとにかく日本式に慣れていると不便だ。また安全検査が多すぎるのも不便だ。博物館に入るにも、列車に乗るにも、人民鉄路に至っては切符売り場に入るのにも安全検査が必要なのだ。街中には社会主義核心価値観などといったプロパガンダが溢れ、奇妙な息苦しささえ感じられた。

それでもその中で生きる人に対する感情が下がることはなく、この7日間で中国に対す

る憧れは一層強まったと言える。どうにか「国と国」ではなく「人と人」単位での友好を 築くことは出来ないか、と思う限りだ。中国語専攻の学生としても、どうにかその一助と なることをしたいものである。

◆まず初めに、現地学生との交流をはじめこのような貴重な経験をさせていただき充実した一週間を送ることができたこと、関係者の皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

そもそも、私が中国に興味を持ったのは以前旅先で出会った同年代の中国人が、みな日本が好きでいつか行ってみたいと言ってくれたことがきっかけでした。当時尖閣問題などで日中関係が悪化しており半日運動の様子を幼いころからメディアで見聞きしていた私はこの時深く感動し、それからは実際に足を運び自らの目で中国を見て日中友好に携わりたいと思っていました。また、大学でも中国について学んでおり、中国に対するイメージは訪中前からほかの参加者よりも少なからず良かったのではないかと思います。その点で、若者同士の友好の可能性はもとより、他の視点からも今回の訪中を考える余裕がありました。

まず、中国で過ごした七日間を通じて感じたのは、私たち日本人がいかに素晴らしい環境で暮らしているのかということです。お店の接客については特にそれを実感しました。例えばレジの店員は愛想がいいどころかにこりともせず単純作業のような接客でした。両手を前で重ねてお辞儀をしながらありがとうございましたと客を見送るのが当然のようになっている「おもてなしの国ニッポン」で育ってきた私にとって、中国の店員の態度は正直気持ちの良いものではありませんでした。また、中国では日本ほど下水環境が整っておらず、どんな立派なところでもトイレットペーパーは流さずに横のごみ箱に捨てるのが基本でした。日本ならば衛生的にも考えられないことかと思います。今回国外から日本を客観的に見て、私たちにとっては当たり前でも世界に誇れる要素を日本はたくさん持っていることを痛感し、東京オリンピックに向けて自分の国をもっと知ろうと思う良いきっかけとなりました。

一方で中国の著しい発展に驚かされる場面もたびたびありました。中国では電子マネーが一般的になっていて、私が買い物をした店ではどんなに小規模な店でも電子マネーで支払える環境が整っていました。私はせっかくの機会だからとWechat Pay を利用しましたがバーコードをかざすだけで支払いを済ませることができ、大変便利でした。また、北京や上海には東京を思わせるほどの多くのビルが立ち並んでおり、かつて発展途上国とよばれていたのがうそのようでした。

そして今回の訪中において私が最も感じたのは、百聞は一見に如かずということです。中国に興味を持って以来、変わりゆく「日中関係」に関する情報には積極的に触れるようにしていました。日中関係は改善傾向にある、中国の若い世代は比較的日本に友好的だ、などというものを数多く見てきましたが日本にいてそれを実感できるはずもなく、頭でっかちになるばかりでした。今回実際に中国に足を運び、現地の大学生との交流や街での人々との出会いを通して初めてそういった情報の核心に触れることができたような気がします。また、

はじめに若者同士の日中友好には以前から可能性を感じていたと述べましたが、その可能性は決して若者だけにとどまらないのだということに気づきました。私たちが日本人だと知ったうえで、飛行機で隣に座った年配の中国人女性は熱心に話しかけてくれ、エレベーターの中で少し話した男性は楽しんでね、と言ってくれました。とても小さなことですが、その一つ一つの出来事が心に残っています。実際に現地に足を運んでみないと気づくことができなかったに違いありません。

たった一週間の滞在でしたが、その間に私は中国人の温かさにたくさん触れました。日本にいると、「中国人は~」とネガティブな表現をされることが多いですが、彼らの温かさを知った今ではこの言葉に違和感と怒りを覚えます。「国」というものは概念でしかなく、それを構成しているのはそれぞれが多様な考えを持った「人」です。老若男女、親日家もいれば反日の人もいる。友好関係を築くならば、国ではなくその人々に目を向けるべきだと訪中を通じて感じました。

私は将来日中友好に携わるならば、力のある中国政府に政治面から働きかける仕事がしたいと考えていましたが、政府や国よりも国民に目を向け、彼らと関わっていくことで日中関係も次のステップに進めるのではないかと考えるようになりました。今回の訪中は私にとって、今後どのように日中友好に携わっていきたいのか、進路を決めるうえでの転換点になったのではないかと思います。

◆私は東京外国語大学で中国語を専攻しています。今回の訪中には自分が専攻している中国という国を自分の目で見て、今まで学んできた中国語を実際に使ってみるいい機会だと思い参加しました。

中国に到着して最初に訪れた北京。空港から北京市内にあるホテルに向かうバスの中から北京の高層ビルが整然と立ち並ぶ街並みを見て、想像以上の中国の都市の開発具合に驚きました。近年の中国の都市化のスピードはとても速いと聞いてはいましたが、ここまで新しくてきれいな高層ビルが並んでいるような街並みは想定していませんでした。また、もう一つ私が驚いたのが、きっちりと碁盤の目状にビルが並んでいるような計画的な街の開発具合でした。私が今まで訪れたどの街とも違う整然とした雰囲気や、外を歩く人の少なさからくる静けさ、あちらこちらにある社会主義革新価値観の標語など非常に独特な雰囲気を感じました。後に北京第二外国語大学の学生から聞いた「北京は歴史が古く、(街が)ずっしり、かっちりした雰囲気。」という表現がぴったり当てはまるような街でした。また、北京滞在の最終日には王府井という繁華街へ行きましたが、そこは先ほど述べたような北京の雰囲気とは打って変わって人が多く集まり活気のある街でした。

次に訪れた杭州は、北京や上海とくらべて落ち着いた雰囲気の、昔ながらの街並みと近代的な街並みが融合したような街でした。派手なライトアップの高層ビルや大きな液晶看板などが上海のような華やかさを醸し出しつつ、西湖のほとりや寺院には伝統的な中国の風景が残り、それに町全体の緑の多さが加わって、非常に居心地の良い場所だと思いました。

高層ビル以外の建物もグレーを基調としたレンガ造りの建物など落ち着いたものが多く、 街全体が同じコンセプトに基づいて開発されているような印象を受けました。このような 計画性の高さは北京と共通しているかもしれません。

最後に訪れた上海はそれまでに訪れた二つの街よりも群を抜いて自由で雑多な雰囲気の街でした。豫園のような伝統的な様式の建物が密集する地域もあれば外灘のようなヨーロッパ風の建物が並ぶ地域もあり、北京や杭州の統一感のある街並みとは真逆ともいえる様子でした。夜景の派手さも段違いで、ビルは様々なライティングで色とりどりに輝いていました。

以上が中国の各街の印象です。次に中国の大学生や町の人とふれあって感じたことをまとめたいと思います。北京大学や浙江大学の学生とはそれぞれの大学生活などについて話し、大学での過ごし方は似ているところが多いと感じました。一緒に開会式の話が長いと文句を言い合ったり漫画や音楽の話をするうちに、生まれた場所は違っても同じ若者なのだと、親近感を抱くようになりました。また、北京大学の学生からは北京の大気汚染の改善具合なども聞くことができ実際の現地の情報を知ることができました。街を歩く中では、地下鉄の切符の買い方に困ったり道に迷ったりしているとすぐに近くにいた方が声をかけてくれ、非常にありがたかったです。また、中国は英語教育が盛んなので街中でも英語が通じるのかと思っていましたが、実際はそんなことなく、むしろ日本よりも通じないと感じました。中国語では日本語のように外来語がないため、英語のボキャブラリーは勉強しなければほぼゼロになってしまうことがその理由の一つだと思います。

今回の一週間の訪日を終えて、中国に対する考え方が大きく変わりました。日本人には中国人に対し、「爆買い」やしゃべり声がうるさいなどマイナスのイメージを持っている人が少なくありません。しかし、実際に触れあってみると日本人と似たところも多く、言葉や文化の違いを乗り越えることができれば互いに分かり合い、尊敬しあえる関係が作れるのではないかと思います。将来、互いの互いに対する誤解を解き、切っても切れない日本と中国の関係性をより良い状態にできるようにするために、中国語学習に励みたいと思います。

◆中国は古来より世界の中で大きな影響力を持つ大国であり、数千年にわたって独自の文化を発展させてきた。日本との交流の歴史も非常に古い。また近年では目覚ましい経済発展を遂げ、再び世界の注目を集める存在となっている。私はこのような中国という国に以前から興味があり、大学でも中国語を専攻している。しかし、多くの日本人は中国に対してあまり良い印象を持っていないと感じる。それは日本のマスメディアの報道の仕方によるところが大きいと考える。日本にいると、中国に関する良いニュースを耳にすることはあまりない。そこで実際に中国を訪れて、中国の現状や中国人が日本についてどのように考えているのかを自ら確かめたいと思ったことから訪中団に応募した。

今回、初めて中国に足を運んでみて、日本での中国のイメージと実際の中国の様子との間にはやはり様々な相違があるということが分かった。そのうちの一つが街の環境である。数

年前に、PM2.5 などによる大気汚染が中国で深刻な問題となっていることが日本でも話題となった。最近ではあまりそういったニュースは見なくなったが、日本では中国といえば汚染物質で視界が悪くなっているような街の様子を想像する人が未だに多いのではないだろうか。実際私もその一人で、ポイ捨てなど当たり前の不衛生な街を想像していた。しかし、実際には、私が訪れた北京、杭州、上海どの街をとってもとてもきれいで、空気がよどんでいるということもなかった。大通りなどのゴミの出にくいところはもちろん、出店が多く並ぶような場所に行ってもきちんとごみ箱が設置され、地面が汚いということはなかった。街の至る所にリサイクルボックスが設置されているなど、ガイドさんの説明通り環境問題に対する意識がとても高いことが伺えた。このように状況が改善されていることは日本ではほとんど報道されない。マスメディアが私たちに与える影響の大きさを改めて思い知った。

もう一つが中国人、特に若い世代の人たちがどのような考え方をしているのかということである。今回の訪中では様々な大学からの多くの学生と交流することができた。北京での三日間を共にした北京第二外国語大学の学生さん方は日本語を専攻されていることもあり、日本の文化についてとても詳しく、私たち日本人よりも日本について詳しいのではないかと思ったほどであった。また日本語を学んでいない北京大学の学生さん方や、浙江大学の学生さん方も日本に良い印象を持っているということが分かった。日本への留学を考えているという大学院の学生さんにもお会いした。もちろんこのような方々の意見を中国の方々の総意だと考えることは浅はかなことである。しかし、日本のニュースで時折見かける反日的な考えを中国の方が皆持っているわけではないということは確認できた。

今回の訪中の最大の目的は、日中間の友好をさらに深めることであるが、このような活動が行われている一方で日本のマスメディアが中国に関する良くない報道を多く行っているということもあるように感じられる。日中平和友好条約締結四十周年という節目に、このような訪中団に参加できたことに感謝し、これからも私たち一人一人が日中の交流を深めていきたい。このことがますます重要になるとこのプログラムを通して実感した。

◆政府やメディアが行っている世論調査において、中国に対して「親しみを感じるか、感じないか」や「良い印象を持っているか、良くない印象を持っているか」といった質問があることは一般的であり、またその回答を見ると、中国に「良くない印象を持っている」日本人が多数を占めることが分かる。しかしながら、私は一国について「好き嫌い」や「良い悪い」で断じてしまうことは極めて危険なことだと考えている。必要なのは、政治、経済、文化、歴史など様々な角度から相手のことを知り、批判すべきは批判し、優れている点は認めて見習うという姿勢でいることだ。そのための最初の段階である、相手のことを知るための手段として非常に有効なものの一つがその国を実際に訪れてみることである。私は一人の中国語を専攻する学生として、そして中国の隣の国である日本で暮らす者として、中国についての知識と見聞を深めたいと思い、訪中団に参加した。

今回の訪中で印象に残ったことの一つが、現地の大学生との交流である。日本の文化に関

心を持ち日本語を学んでいる学生と話をすることができたことによって、中国に日本の文化や芸能が想像以上に浸透していることが分かり、とても興味深かった。ただ今回は、政治や経済、そして現在の日中関係についての話が十分にできる時間がなく、そういった深いテーマについて意見交換や議論をすることは叶わなかった。そのため、彼らが中国政府や日本との関係について内心どのように考えているのかは分からない。しかし実際に彼らと親しくなれたことで、さらに互いの理解を深めるためにも両国の人々が交流できる機会を増やすことが必要ではないかと思うと同時に、政治や外交の面で日中が対立したとしても、それによって民間の交流に影響が及んでしまうことはあってはならないと強く感じた。

訪中前と比べて、中国に対するイメージや考えは全く変わっていない。ただ、日本との違いに驚いた点はいくつかあった。特に街中にあふれる標語の数々は異様なものであり、日本との政治体制の違いを実感した。そして、安全検査の多さにも驚かされた。空港さながらのボディーチェックと荷物検査が博物館や駅でも行われていたことに戸惑いを覚えたが、日本の緩い警備体制よりも安心感があるように思えた。

当然のことながら、一週間の訪中で中国について知ることができた部分は限られたものであり、今回の訪中だけで中国の全てを知った気になるのは間違っていると思う。だが、実際に訪れたことによって得られた経験や学びは計り知れない。同年代の日中の学生と親交を深めるだけでなく、中国語でコミュニケーションを取ることや、中国の観光地や大都市を巡ることもできた。私にとって今回の訪中は一生心に残り続けるものになると確信している。私の大学での専攻は中国語であり、また大学卒業後も中国と関わることになるだろうと思う。今後どういった形で中国と関わっていくかは分からないが、両国の人々が多面的に互いのことを理解しあえる手助けをしたいという目標が、訪中団に参加したことで明確になった。

◆今回の中国への渡航に際し、私は三つの目的を持って参加しました。以下では一つ一つの 目的を振り返りながら本プログラムの感想を述べたいと思います。

一つ目の目的は、中国経済の躍進を支える原動力について探る事でした。中国経済は今後の 国際社会を語る上で欠くことのできない存在感を有しており、訪中前からその特殊性とバ イタリティには強く興味を引かれていました。

現地への訪問を通じて強く感じたのは、若者の活力です。創業公社ではベンチャーの立ち上げからその運営が軌道に乗るまでを手厚く支援するシステムが整っており、若い人たちが中心となって新たなイノベーションを生み出している他、中国の学生との交流でも将来自分のやりたいことが明確に決まっており、その目標を達成するために今の勉学に取り組んでいるのだという目的意識を持った学生がとても多い印象を受けました。また新卒で就職した会社は皆五年以内には辞めてしまうと言われるほど、企業に奉仕するという日本的な意識も薄く、あくまで自分のやりたいことの達成のために働くのだというどちらかと言え

ば欧米的な就業への考え方が強いことに驚きました。

このように若者が自らの夢に向かって積極的にチャレンジしていく姿勢が、中国の著しい 経済成長の一因になったのではないかと感じました。

二つ目の目的は、中国の文化を体感することでした。

日本が多大な影響を受けた中国文化について、芸術方面の文化のみならず、食文化や習慣な どより生活に密接に関連した文化も実際に体験することで学びたいと考えていました。 現地への訪問で感じたことは、中国文化は総じて規模感が大きいということです。

悠久の歴史を誇る歴史建造物や景勝地はもちろん、食事や街中の建物に至るまでスケールが大きく華やかで、簡素な落ち着きから生まれる味わいを大事にする日本的な侘び寂びの文化とは異なる良さを感じました。

三つ目は、現地の学生とのディスカッションや交流を通じて、同世代の中国の学生がどのような価値観を持っているのかを知り、日本と中国の今後の共存共栄の可能性について探ることでした。

同世代の学生と交流し総じて感じたことは、中国の学生も我々とあまり変わらないな、という事です。渡航前、中国の学生は自己主張が強く勉学に対しても非常に真剣に取り組むと聞いていましたが、実際に会ってみると恥ずかしがり屋な学生も多く、事前に思っていたほど勉強一筋ではなく趣味に生きているような学生もおり、あまり日本の学生と変わらないという印象を受けました。

個人的には日本語と同様、中国語にも「一夜漬け」という言葉が存在するということを知り、どこの学生も大差ないのだな、と愉快に思ったことが印象に残っています。また、私は今まで言葉の通じない相手と交流する経験があまりなかったため、どのように表現すれば伝わるかを一生懸命考えながらお互い拙い言葉で身振り手振りを交えながら行うコミュニケーションに、日本語や英語で意図が比較的簡単に通じてしまうようなコミュニケーションとはまた違った楽しさを感じ、お互いに伝えたかった内容が通じ分かり合えた瞬間は新鮮な喜びを覚えました。

今回の交流を通してお互いをより深く分かり合いたいという気持ちが強くなった一方で、 社会的な立場を得てしまった後では今回の交流のように本音ベースで話し合うことは難し いのでは無いかと感じました。

本プログラムのように若い世代が交流を通して、互いを完全には理解し合えなくとも理解 しようと努め、結局は同じ人間なのだと体験として知ることは、今後日中が手を取り合い、 パートナーとして共に発展していくためには肝要であると感じました。

以上を振り返り、一週間という短い滞在期間の中で想像以上に多くの収穫を得ることができた一方で、中国渡航前には思い付かなかった疑問や新たな関心も抱くようになりました。 私は来年から社会人になりますが、日本と関係の深い中国とは仕事の中で関わる場面も少 なからずあると考えます。そのような機会をより良いものにするためにも、今の残された学生の時間を生かして学生の内にしか知り得ない中国にもっと関わり、相手の事をもっと知っていきたいと考えています。

◆約 1 週間という短い期間ではあったが、千人交流大会への参加をはじめとする充実した プログラムによって、実際の中国を肌で感じ、中国に対する理解を深めることができた。同 年代の中国の学生との交流や各施設への訪問などを通して感じたことを記したいと思う。 主に3つの観点から述べる。

まず、第一に中国の発展速度が訪中前の私の想像をはるかに超えて速いことが実感できた。 特に驚いたのが電子マネーの導入がかなり進んでいることである。観光施設はもちろん、主 要都市の街中では屋台の露店ですら wechatpay をはじめとする電子マネーが導入されてい た。北京の露店では、ドリンクを買おうとした際に店側が現金のお釣りをほとんど持ってい なかった為、店員に両替に行ってもらうということすらあり、これは本当に驚いた。私個人 の感覚では日本で電子マネーをここまで浸透させるのにはまだまだ時間がかかるのではな いかと思う。 特に年配の方や子供を持つ親など抵抗がある人は多いのではないだろうか。 私 はショッピングモールの和菓子屋でバイトをしていたことがあり、そこの客層は年配の方 が中心であったが、電子マネーで支払う人はほんの1割程度だった。さまざまな問題はある が、新たな技術やサービスの導入をいち早く達成できるということに中国の強みを感じた。 第二に教育についてである。今回は北京大学、浙江大学を訪問させていただいたがどちらの 大学も非常に広く、充実した設備が整っていた。単純な比較では必ずしも意味があるとは言 えないが、規模の面から言うと日本の大学とは比べ物にならないほど大きいと感じた。外国 語教育に関しても充実しているようで、北京大学、浙江大学の生徒は流暢な英語を話してい た。発音や会話部分を中心とした教育が行われているようである。一方で、街中の人々はご く簡単な英語が通じなかった。日本でも英語を流暢に話せる人はそう多くないとは思うが、 観光地などでは「popular」などの基本的な単語は通じる場合が多いように感じる。大学教 育を受けられる状況にある人とそうではない人でかなり教育レベルに差があるのではない か、また、教育格差による経済格差が起きているのではないかと感じた

第三に政府に対する考え方の違いである。北京大学の生徒が「自分に判断能力がないから政府の善悪を判断できないが、政府の政策はきっと意味があるのだろうと思って信用している。」と話していたのが印象的だった。日本では政府の政策に対してワイドショーを初めとしてマスコミを中心に様々な議論が展開され、えてしてそれらは批判的であるため、こういった意見は新鮮に感じた。ネット規制をはじめとして、情報公開が少ないことは問題であるが、とても興味深い視点であると思った。

以上の 3 点がこの訪中で感じた主な事柄である。今回の日中友好大学生訪中団ではこれら に加え中国文化の体験など多岐にわたって様々な経験をさせていただいた。お世話になっ た方への感謝を最後に述べたいと思う。西堀団長を始め、日中友好協会の方々、中国の学生 ◆私が今回の中国訪問に参加した理由は、中国の文化を肌で感じ将来日本中国間の友好関係改善の一助としたいと考えたからだ。というのは建前であり、本音は単に「1万円で海外旅行」という響きに魅了されたからだ。

私は怠惰な人間であるため、募集要項をよく読まずにこの訪中団参加の応募をした。100 人もの学生と行動をともにすると知ったのは参加が決定してからだった。この 7 泊 8 日、 連日の団体行動を通して私が学んだことは、自分を見つめる重要性だった。本来ならこのよ うなことは大学に入学する前に知っておくべきことなのかもしれない。中国人学生たちの 日本語の流暢さに多くの日本人学生は感嘆したと思うが、彼らが巧みに異国の言葉を操れ るようになったのは彼らが学ぶ意欲を持っているからであろう。中国人学生と会話をする 度、「将来日本で働きたいから」であったり、「日本の大好きな俳優のセリフを理解したい」 であったり、勉学に取り組む上で明確な目標を持っていたような印象を受けた。これは勿論 「中国人だから」というわけではない。中国語を流暢に話していた日本人に話を聞くと、「中 国人の友人とコミュニケーションを取りたいから勉強に励んでいる」と話してくれた。私は 1年生の時から第二外国語として大学で中国を学んでいるが、果たしてどれほど実になっ ただろうか。中国人学生たちを前にしても中国語で会話を始める勇気が出ない程度、といえ ばいいだろうか。そもそも、中国語で会話ができないのは私が覚えている中国語の単語数が 少ないからなのか。それとも文法の理解度が低いからなのか。いや、どちらでもないだろう。 喋ろうとしないから喋ることができない、きっとただこれだけのことなのではないだろう か。結局意欲が全てなのだろう。

今回中国を訪問して学んだことの際たるものは自らを見つめる重要性である。きっかけは度重なる自己紹介だった。自己紹介というものは、私個人の意見では、自分と他者との違いをいかに効率的に伝えるかが要求されるものである。趣味、特技、住んでいるところ、学んでいること、家族構成…。自分を構成する要素のうち、どれを伝えるかは当人の自由である。どの要素を人に伝えるかで印象を左右できる。思いの儘である。これほど他人の考えていることを操作できる手段があるだろうか。

とはいえ、私は自己紹介が苦手である。大抵の人は自己紹介テンプレートとでも言えるもの を持っているだろう。私の場合、以下である。

東京大学2年です。東大では1・2年生は全員教養学部に所属していて、様々な分野の勉強 をしています。第二外国語として中国語を学んでいるので、挨拶程度なら中国語が話せます。 以上です。

こんなところであろう。中国での1週間、この定型分を幾度も繰り返した。中国人学生との交流の場ではもちろん、日本人学生と食事を共にするときも大抵この定型分を使った。 自己紹介は、相手の自分への印象を操作する行為である。もちろん、相手と交流の回数を重ね、本当の自分を知ってもらうのが理想であるのはいうまでもない。だが、果たしてどれほ どの人が本当の時間を伝える機会に恵まれているだろうか。皆、限られた場所で、限られた時間で、限られた人とのみ交流することしか許されない。第一印象を覆すだけの機会があると考えて油断してはいけない。だからこそ、自己紹介が大切なのだと思う。これからの人生、自己紹介を繰り返す度に身を引き締めていきたい。

◆2008 年の北京オリンピックや 2010 年の上海万国博覧会を契機として急速に発展を遂げてゆく中国という国に衝撃を受けたのは私がまだ中学生になりたての頃でした。「将来は、ダイナミックに成長し続ける中国に関わることがやりたい。」そんな思いから大学入学後は第二外国語として中国語を選択し、今も独学で中国語の勉強を続けています。1年半前に南京に、半年前に南京と上海に訪れたことがあり、今回は私にとって3回目の訪中となりました。

私はこの訪中のメインイベントである「日中大学生千人交流大会」の司会を務めさせていただいたことが、一番印象に残っています。日中友好条約締結40周年という節目に、日中の大学生1000人が一同に会することの歴史的重要性を噛み締めながら何度も司会の練習を重ね、日本人大学生の代表として、司会を通じてこの大会に参加している学生みんなで日中の友好・協力の歴史を表現することができるような言葉選びや話し方を意識しました。昨年北京大学で「日中大学生平和友好宣言」が発表されましたが、再び同じ場所にこうして千人の学生たちが集まったことに、私たちが日中友好の歴史の一ページに刻まれていく思いがしてとても感慨深い気持ちになりました。

このプログラムでは、北京創業公社・上海城市計画博物館・外灘見学を通じて、とどま るところを知らない中国のダイナミックな成長を目の当たりにしました。しかしその一方 で、万里の長城・故宮博物院・シルク博物館・豫園を訪れたことで、中国の発展は何千年 の歴史を基に築き上げられていったのだと実感しました。7日間で北京・杭州・上海とい う大都市を訪問するという密で短いプログラムでしたが、この一週間で私は世界トップク ラスの経済規模、世界一の人口を持つ国のパワー、そして世界最古の文明から始まる歴史 の奥深さを身にしみて実感することができたのです。加えて、当プログラムの醍醐味であ る北京大学・北京第二外国語大学・浙江大学の学生たちとの交流を通じてわかったこと は、それらの歴史を支え、これから発展させていくのはまさしく私達の同世代であるとい うことです。しばしば隣国中国は計り知れない化け物のような国だと思われがちです。実 際そんな意識が日中友好の溝を広げているのかもしれません。しかしながら、中国を支え ているのは私たちと同じ、日々精一杯生きているかけがえのない人たちなのです。そうし た視点をより多くの人が持つことで、日中間に限らず、世界の平和や友好につながってい くと考えています。2020年には東京オリンピック、2022年には北京オリンピックが開催 されます。国際的に目を向けてみると、未だに紛争や対立が絶えない地域も多くあります が、かつては対立していた時期もあった日中両国が国というマクロな視点ではなく、個人 を尊重しあいながら友好関係を築き上げていく姿勢を見せることで、アジアだけでなく、

世界に平和と友好の輪を広げていけるのではないでしょうか。

私は将来、弁護士として、日本に投資をしたい中国企業への法的アドバイスや、逆に中国に進出したい日本企業のサポートをしていきたいと考えています。自分にぴったりの仕事にやりがいを感じながら、今夏、日中友好協会の一員として7日間日中友好について思考を重ねた経験を生かして、今後の日中の共存発展の道を追求していきたいと思っています。

◆今回、私が日中友好訪中団に参加した目的は、「ありのままの中国を見る」ということだった。中国は近年急速に発展する一方で、貧富の差が大きかったりマナーが悪かったりと日本人に悪いイメージを持たれがちだ。実際に中国の経済は今後どこまで発展の余地があるのかをこの目で確かめ、さらに中国の学生との交流をすることで今後の未来を担うであろう学生がアジア経済や日中関係をどのように考えているのか、また中国の文化を知りたいと思っていた。

私が今回の訪中を通じて感じたことは大きく二つある。一つ目は中国のすさまじい経済的成長とこれからの可能性だ。例えばまず私が驚いたのはそのキャッシュレス経済の普及度合いである。中国ではQRコード決済機能が非常に発達しており、We Chat Pay やAri Pay がかなり普及している。買い物客はケータイ一つ持っていればほぼ全ての店で買い物ができるのだ。実際現地の店を見ていても小さい屋台でさえその機能を有していたり、さらに現金で支払いをしている現地人の客などほとんどいなかった。やはり近年先進国の後追いで経済発展をしたこともあり、建物や街並みなどを見ても、どんどん新しいものや技術を取り入れようとする風土を感じた。さらに創業公社を訪問した経験も私にとって印象的だった。創業公社とは、中国のスタートアップを金銭面、技術面などで支援する団体だ。創業公社の説明の中で、その投資額や利益が年々増えていたり、またかなりの額を投資しているにも関わらずそれでも利益を挙げているという事を聞き、改めて中国の経済の成長スピードを感じた。さらに政府からかなりのサポートがあるため事業がやりやすくなっているという事を聞き、現在中国のバブル崩壊も近いとの見方もある一方でまだまだ成長の余地があるのではないかと感じた。

私が今回体感したことの二つ目は中国の文化や中国人の人柄だ。北京大学や浙江大学での現地大学生との交流は私にとって非常にいい経験となった。当初、私は歴史的な経緯から中国人は反日感情を抱いている人が一定数いるという印象があった。しかし実際は、日本語学科に在籍にている学生と交流したこともあってか、彼らはみな日本の文化に非常に興味を持っていてくれ、私の中での中国人の印象がかなり変化した。さらに衝撃的だったのは、中国での受験や就職の厳しさだ。私が交流した北京大学の学生は、彼女の出身省からの北京大学への合格者は一万人中百人未満であり、入学するために彼女は必死に勉強したと言っていた。さらに大学のランクが明確でそれが就職に直結していたり、また大学での勉強がその後の仕事内容に直結する事が多いために中国ではたとえ文系でも大学院に行く人が多い

という事を聞いた。私は改めて中国の競争の激しさや、さらに優秀な学生たちの志の高さに 気が付くと同時に、なぜ中国の発展がここまで急速になされたのかの理由が少し垣間見え た気がした。

このプログラムを通じて中国の実情を見た事で、日本にとって中国という国が将来的にさらに重要になるであろう事を感じた。もちろん中国が発展するためには日本という先進国の存在はなくてはならないが、それ以上に日本にとっても今後発展を維持していくために中国と良好な関係を築くことは必要不可欠なのではないか。今の日本の若者は将来を楽観視している人が多く、いつまでも日本は先進国であり続けられると思っている人が多いかもしれないが、私は今回の経験を通じて、必ずしもその考えは正しくないと思い始めた。日本と中国は協調することで、互いの発展を助長し合わなければならない、それが日本が長く生き残っていくための道なのではないかと私は気が付いた。

◆私が訪中団を終えて一番思ったのは「日本は中国から学ぶべきこと、中国に見習うべきこ とが沢山ある。まずはメディアに流されずに、中国のことを知らなきゃ!」ということです。 大学に入るまで、私は中国に特に興味を持ったことがなく、メディアの情報を受動的に受 け止めているだけでした。そこで流れてくるのは、「大気汚染が酷く、環境が悪い国」「領土 問題でもめており、日本とは仲が悪い国」「政府の締め付けがきつく、自由にネットを使っ たりできない不便な国」など悪いものが多く、当時の私の中国に対するイメージもややマイ ナスでした。これは私に限ったことではなく、一般の日本人全体に言えることだと思います。 ですが、今回実際に中国に行き自分の目と耳とで感じて来た結果、それは中国の一側面に しか過ぎないことがよくわかりました。確かに空気は日本ほど綺麗ではないかもしれない けれど、マスクなしで過ごしても全く問題ない程度で、町中の人がマスクで歩いている TV 報道での様子とは全然違いました。情報統制についても、「確かに不便だが、玉石混合なネ ット情報から取捨選択できない国民のためなんだ」と考えている現地の学生がいたり、情報 リテラシーのあるとみなされた特定の大学では規制がないと聞き、驚きました。これも当初 抱いていた「政府がとても厳しくて生きにくい社会」といった中国のイメージとは異なるも のでした。それ以外にも中国の良いところを沢山見つけました。例えば電子決済の普及。 WeChat やアリペイなどを使う姿が町中あちこちに見られ、私たちが現金で支払おうとする とお釣りがなくて困ってしまったり、そもそも現金では支払えないサービスもありました。 他にもシェア自転車が町中に置かれていて好きなところで乗り降りできるサービスがあっ たり、地下鉄の料金がとても安かったりしました。これらの点はどれも日本より優れており、 学ぶべきことだと思いました。

しかし、それらの中国の良いところを知っている日本人がどれほどいるのかた考えると、 それほどいないのではないかという結論に至ります。私がかつてそうだったように大体の 日本人はメディアの描くマイナスなイメージの中国像を持っていると感じます。日本人と 中国人の互いへの関心の不均衡は今回の訪中でも感じました。たとえば、両国のポップカル チャーの浸透度。現地の学生と話していると、日本の映画やドラマ、アニメを観ている人がとても多かったです。私が仲よくなった学生は映画がとても好きで、俳優の染谷さんのファンなのだと話してくれました。北京大学のキャンパスでも日本映画の大きなポスターをみかけ、日本のポップカルチャーが受け入れられていることがよくわかりました。それに対して日本では、中国の映画やアニメはまず目にしないし、私自身もはずかしながら中国作品を見たことがありません。この中国への関心のなさが、メディアがつくるイメージに日本人が流されてしまい偏ったイメージや両国の摩擦を産む一つの原因なのではないかと思いました。だから、日本人はまず中国のことを知ろうとすることがとても大事なのだとおもいます。そうやって草の根レベルで日本人が中国のイメージを変えていけば、国全体としてもより良い関係を築けるのではないかと思いました。もっと多くの人に中国を訪れ、実際に中国を感じ、中国の人々と触れ合い、本当の中国を知ってもらえたら、日中友好関係もより強固なものになるはずです。私自身も今回の訪中をとして中国のイメージが変わりましたし、このような経験ができたことをとてもありがたく思っています。

さいごになりましたが、今回訪中団員として選んでいただき、中国のリアルを感じる貴重な機会を与えてくださり訪中団派遣を支えてくださった全ての方々に感謝を申し上げ、終わりの言葉とさせていただきます。本当にありがとうございました。

◆はじめに、今回訪中団の一員として1週間の中国研修旅行に参加させていただけたこと、 主催者である日中友好協会をはじめとする関係者の皆様にこの場を借りて感謝いたします。 日中平和友好条約締結40周年という節目の年に盛大に開かれた「中日大学生千人交流大 会」や中国の大学生との交流会に参加できたことは、大変貴重な経験となったと痛感しております。どのイベントも楽しくかつ有意義で、無事帰国した今、親しくしてくださった心優 しい先輩の方々と過ごした一週間はとても充実していたという思いでいっぱいです。

今回の研修は勿論自分にとって初めての中国訪問となったわけですが、実際に現地を訪れてみて考察した点がいくつかあるので、それぞれについて記していこうと思います。

まずは、「中国や中国人に対する印象の変化」です。訪中団をきっかけとして訪中前の自分が中国に対して抱いていたイメージを改めて見つめなおしてみました。人口が13億超ととても多い、広大な面積に広がる経済格差、近年の高度経済成長、キャラクターのパクリ、PM2.5をはじめとする大気汚染、などなど。同様に中国人に対して抱いていた印象としては、公共の場で声が大きいなどマナーが良くない、日本に来て爆買い、領土問題から来る反日感情、などが挙げられます。訪中後に見直してみるとどれも具体性のない、メディアや授業を通して垣間見た曖昧なイメージだと感じます。当たり前ですが、実際に行ってみることで現地の雰囲気は分かります。自分のイメージが間違っていたことに驚いた点や、誤ってはいなかったものの、より具体的に現地の様子が頭の中に思い描けるようになった点があるので、是非以下に紹介したいと思います。例えば、着陸直後我々を出迎えた北京の空気が澄んでいたが、PM2.5のニュースで以前見たフォグのような写真が脳裏にあった自分には驚きでした。

厳密には分かりませんが体感では東京と変わりません。また、人口の多さですが北京では人混みという意味での混雑よりも交通量に現れていました。明らかに車の数に対して道路が足りておらず、しかも皆思い思い抜かそうと車線変更や警音器使用を繰り返しており、「交通ルールはいずこへ?」という感じでした。(杭州や上海ではまだましでしたが・・・)経済格差に関しては、以前は北京や上海といった大都市は東京に並ぶほど栄えていて内陸部は貧困層が根強く残るという印象でした。しかし実際に上海の豫園という観光地に訪れた際垣間見えた光景は、観光地である豫園はある程度綺麗で賑わっていましたが、それとは対象的にたった一本道路を奥に行くと狭く貧しそうな家屋が連なる住宅街がありました。地域間格差というより大都市の内部でもまだまだ歴然とした貧困が残っていると痛感しました。中国人に対して抱いていた印象は、北京大学や浙江大学の学生さんと交流をする、あるいは、商店街で出会った中国人と会話する中では全く感じず、現地での体験を通して一変しました。このような印象の変化は、今回訪中に参加させていただけたことの良き収穫であったと考えています。

次に考えが深まったのは「日中友好」についてです。正直、訪中団に参加する前は隣国で ある中国との友好関係というこの研修最大のテーマについては、僕は平凡な理系な学生で すし、あまり関心がありませんでした。このプログラムに応募した理由も、「第二外国語が 中国語だから」「行ったことのない中国で新鮮な体験をしてみたかったから」というような、 国際関係や日中友好関係とは関係もない平凡なものでした。しかし、研修に参加してみた結 果、昨年が国交 45 周年、今年が平和友好条約締結 40 周年だということを強く意識させら れました。領土問題、反日感情などが存在しているのは事実ですが、中国の学生さん方と 我々との交流会ではそのような問題抜きに、単にお互い若者だということで国に関係なく 若者らしい会話で盛り上がれました。商店の方々は日本人だというと親しげに色々聞いて きてくれました。個人的には、国際関係に問題が生じているからといって毛嫌うのではなく、 問題があったとしても親しくしていくべき、親しくしていける隣人「朋友」だということを、 交流を通して実感しました。千人交流大会での慶応の学長さんがスピーチで、「けんかする ほど仲がいい」にたとえたお話をされていたのが蘇ります。国家権益が衝突するのは仕方の ないことだがそれでも上手くやっていける関係こそがお互いが目指すべき関係だ、という 考えに賛同します。 簡単ではない友好関係の発展ですが、関心のなかった自分にとって考察 する機会となったのは大きな成果です。

最後になりましたが、もちろん今回感じた中国は大きな中国の一片だということは忘れていません。交流した中国の学生さんはもともと日本や日本語に興味をもっていらっしゃった方々ですし、我々が訪れた観光地や宿泊した宿は最高級のものであることも念頭に置いています。これは悪い意味ではなく、自分にとって「本当はまだまだ知らない実情があるのだろう」とより意欲的に中国について知りたいと思うきっかけとなっています。これからも現在鋭意学習している中国語を活かす場として、再度中国を訪れたり、将来的にはもしかしたら日中友好に携わったりできる可能性を信じています。谢谢大家。

◆8月26日から9月2日の7泊8日、北京・杭州・上海の3都市を訪問しました。これまで台湾や香港への訪問経験はあったものの、中国本土へ行くことは初めてのことだった。訪中団の目的は、日本と中国の大学生が実際に交流することによって、相互理解を深め、約1週間という短い期間ではあるが現地の生活や文化に触れることを通して相手国のことを客観視することを目的としている。したがって、プログラムの内容も北京大学や北京第2外国語大学など現地の大学生と交流したり、3000年の歴史を持つ中国ならではの遺跡や博物館を訪問したり、様々な機会が用意されていた。また、3都市を周遊することで中国という1つの国でも地域によって衣食住の生活文化が全く異なることなどを実体験として感じることができた。最初に訪問した北京では、現地の学生との交流の時間が多く用意されていた。後半に訪問した杭州、上海は、日数が少なく慌ただしい日々だった。以下では、北京での活動を中心に振り返り、今回の訪中の意義について記した。

北京第二外国語大学の学生とは、世界遺産である万里の長城や紫禁城、北京大学の訪問など多くの時間を一緒に過ごした。日本語を選択しているということもあり、とても日本に好意的な意見を持っていた。大学生活の話や日本語を選択した理由など、様々な話をした。少し驚いたのが、日本語を選択した理由として、発音の綺麗さや将来のキャリアを見据えて選んでいる学生が多くいたことだった。語学の勉強のモティベーションが、自分の周りの学生と少し違うように思った。一方、北京大学の学生とは北京大学内での活動のみの交流で、少し時間が足りないようにも思った。しかし、1時間のディスカッションの中で大学生活や大学受験、将来のキャリアなど深い話をすることができた。北京大学の学生から、「日本人の学生は毎晩飲み会をしているのか」と質問を受けた。日本の学生はあまり勉強しない、飲み会を頻繁にしているというイメージがついているようで、少し残念だった。また、ちょうど交流した学生に2、3年生が多かったからか、就職や大学院進学に関しての質問を受けた。中国社会での就職難が問題であることを感じた。

北京の歓迎宴会で、学生のスピーチがとても印象的だった。彼女は日本と中国の文化の違いについて触れていた。食事があまり美味しくなくても、作ってくれた人、振る舞ってくれた人に感謝すること。日本での当たり前が他の国では違うということを改めて考え直すことができた。小さな価値観の違いであるが、きちんと理解しなければ相互に齟齬が生じたりするだろう。生活をともにして、会話をする機会を作ることで相手との文化の違いをまず知り、その価値を理解する。この一手間を様々なバックグラウンドを持つ人とのコミュニケーションをする上で行うことが大切であると思った。1週間という短い時間であったが、隣国である中国について実感を持って知ることができた。この機会を用意してくださった日中友好協会に関わる全ての人に感謝申し上げたい。この訪中で出会った人々とのつながりを将来まで大切にしていきたい。

◆今回の訪中で印象的だったことが二点あります。

一点目は中国社会における「平等」と「不平等」です。日本と中国はどちらも東アジアの 国ですが、両国の大きな違いの一つに社会のあり方が挙げられます。日本は民主主義国家で すが、中国は社会主義国家です。現在、中国共産党がその政治の一切を担っていますが、も ともと中国共産党は、マルクス主義に基づき、労働者や農民などの労勤階級を中核とする共 産主義社会を実現するために結党されました。共産主義といえば「みんな平等」というイメ ージがあったため、訪中前は、中国社会は当然、国民全員が平等なのだろうという印象を漠 然と持っていました。今回の訪中を振り返ると、この印象は半分正解で半分不正解だったと 感じます。まず前者についてですが、中国社会は男女「平等」が徹底していると感じました。 現地のガイドさんから、中国の女性は男性と同じように働いているので専業主婦がほとん どいないと伺いました。今回、北京大学と浙江大学で交流した学生は偶然全員女性だったの ですが、きちんとキャリアプランを持ち、そのために努力しているという子が多かった印象 を受けました。ガイドさんがおっしゃっていた通り、男女共に活躍できる平等な社会が実現 できているのだと思います。続いて後者についてですが、経済や教育格差という「不平等」 を感じました。滞在中、毎日連れて行って頂いていた立派なレストランやホテル、幼少期か ら質の高い教育を受けて育った北京大学や浙江大学の学生達、有望なベンチャー企業の支 援等を行い飛躍し続ける北京創業公社、ハイブランド店舗が立ち並ぶ北京や杭州の大通り、 立派な高層オフィスビルが立ち並ぶ上海の外灘などを目にし、豊かな中国を実感しました。 しかし、その一方で、杭州の西湖周辺で観光客向けに物売りや物乞いをする人々や、高水準 の教育を受けてこなかったのか、英語が全く話せない小売店の人々、豫園周辺の庶民が生活 する裏の通りの様子など、中国のまだまだ貧しい一面や教育格差の実態も目の当たりにし ました。この不平等をなくしていくことが中国社会の今後の課題なのではと感じました。

二点目は、中国社会におけるキャッシュレス化とモバイル決済の浸透です。自由時間に友 人らと何度か街のタピオカ屋さんに行ったのですが、大勢でレジに並び、一人一人現金で会 計をしていたため、全員が購入し終わるまでにかなりの時間がかかってしまいました。その 一方で、事前にネットで注文と決済を済ませ、店頭に来てスマートフォンの注文画面を店員 に見せ、すでに出来上がっている品物を受け取ってすぐに帰る現地の若者をしばしば見か けました。また、現地のガイドさんからも、現在中国では多くのレストランや小売店などに おいてスマートフォン決済で会計が済んでしまうので、現金を持ち歩かなくとも、スマート フォン一つで出かけることができるという話も伺いました。アリババ集団の「支付宝(アリ ペイ)」や「微信支付(ウィーチャットペイ)」がその一例ですが、こうした決済サービスの 普及の結果、現在、中国ではキャッシュレス決済の比率が6割だそうです。さらに驚いたの は、北京の王府井に遊びに行った際、大きなデパートや飲食店だけではなく、夜市の露店で さえもこれらのスマートフォン決済を導入している店舗が何店かあったことです。日本で も、温泉・スキー場などの観光地やファッションビル・小売店などでは、訪日外国人の中で も特に消費額の多い中国人向けに「支付宝(アリペイ)」がどんどん導入され始めています。 わたしも度々見かけたことがあったので、訪中前からその存在は知っていましたが、中国国 内でこれほどまでに浸透しているとは思っていなかったので、実際に現地での買い物を経

験することによって、影響力の大きさを実感することができました。一方、日本のスマートフォン決済の比率はまだ 2 割程度と、中国や他のアジア諸国に比べてもキャッシュレス化はかなり遅れています。最近では、国内向けに、アップル社の「アッペルペイ」や LINE 社の「LINE ペイ」、JR 東日本の「モバイルスイカ」などのスマートフォン決済サービスが普及してきていますが、専用端末の設置費用の負担が中小零細店舗の導入を妨げているという現状もあります。今回の訪中を通じて、中国のモバイル決済やキャッシュレス化の発展から日本が学べることは多いのではないかと感じました。

◆今回の訪中に際し、私には事前に立てた目標が3つありました。1つ目は、1年半の中国 語学習の現時点での進捗を実際に会話することで確認すること。2つ目は、現地の大学生と 積極的に交流しなんらかの気づきを得ること。そして3つ目は、メディアによって作られた 中国のイメージと実際に体感する中国の同じ部分と違う部分を発見することです。

まず一つ目の語学的な目標について。訪中団の人たちと仲良くおしゃべりをしているだけでは中国語を使う機会がないと思い積極的に中国の方に中国語で話しかけるようにしました。飛行機のCAさんやホテルのフロント、お店の店員など、半ば無理やり用件を作っては話しかけていました。特に印象的だった出来事は履いていた靴が壊れた訪中5日目の夜のことです。私はまず接着剤を探して近くのコンビニ2件探しましたがありませんでした。そこでフロントの方にこの辺で接着剤を売っている店があるか尋ねたところ、近くにはないので靴を買ったらどうかと言われました。しかしあまり中国元を持っていなかったので、それを伝えるとホテルの向かいのデパートでサンダルを買うことを勧められそうしました。デパートではおばさんに2足買ったら安くすると言われ、何を考えてかいらないのに2足も買ってしまいましたが。この一連のやりとりを拙いながらもなんとか中国語で行えたことは自信になりました。と同時にもっと勉強していろんなことを伝えられるようになりたいと思いました。

次に現地学生との交流について。北京では北京第2外国語学院、北京大学の学生と、杭州では浙江大学などの学生と交流する機会を設けていただきました。北京第2外国語学院の学生は日本語学科でしたが、とても流暢に日本語で話していて感動しました。また、日本のアニメに興味があるという方が多く共通の話題があることで会話も弾みました。北京大学の学生は英語がとても上手でした。私が話した学生は日本への留学も考えていて、日本での再会を約束しました。施工大学では、簡単なゲームなどをして遊びましたが、その中にも微妙な文化の違いが見え隠れし、非常に刺激的でした。こうして同年代の中国の友達ができ今後も大切にしたいと思いました。

最後に真の中国を発見する目標について。まず意外だったことは、想像よりも空気が汚れていなかったことです(数値的にはわかりませんが)。耐汚染は深刻な問題なので、改善に向けた取り組みがなされているのかと思いました。中国人は日本人が嫌いというイメージについては現時点ではおおよそ間違っていないのかなと感じました。もちろん訪中団と交

流してくれる大学生の方々は日本に興味があって参加してくれているのでそれは感じませんが、街中では、例えばコンビニで並んでいると、そこの日本人、と呼ばれたり、お店ではお釣りをごまかされたりと日本人を嫌っているなぁと感じることはありました。ただそういった人ばかりではなく道を尋ねると快く教えてくださった人もいたので、日本と同じように相手国に対する印象は個人によって差があると思いました。こういったイメージは、一人でも相手国の友人がいるだけで大きく変わってくるので、もっと中国の友人を増やしたいです。あと、中国はキャッシュレスが進んでいると聞いていましたが、予想以上でした。夜の自由時間にみんなでタピオカジュースを買いに行った際、レジにほとんど現金がなくお釣りが出せないと店員さんがとても困っていました。また自販機も電子決済のみのものもあり、衝撃を受けました。

このように事前に立てた目標については概ね達成できたと思っています。それ以外にも個人的にいくつか思ったことがあります。まずは料理についてです。ありがたいことに毎昼食、夕食は円卓で豪勢な料理を並べていただきました。しかし、私は辛いものと甘いものと脂っこいものとパクチーが苦手でかなり苦戦しました。日中様々な文化の違いがありますが、食文化の違いも大きいと感じました。また物価は東京に比べて安いと感じました。コンビニでも500ml のジュースで100 円以下のものが多かったです。

今回日中友好協会、北京市人民对外友好协会をはじめ多くの方々にこのような機会を大学生という若いうちに与えてくださりまことに感謝しています。この訪中を通じ、もっと中国語の学習の励み、もっと中国という国を知り、また日本自体も客観的に知れるように努力しようと思います。ありがとうございました。

◆8月26日から9月2日まで約一週間かけて、北京・杭州・上海の三都市を巡った。中国本土に足を踏み入れるのは今回が初めてであっただけに、一週間を通じて新たな発見や驚きに満ちた日々だった。

今回の訪中を通じて強く感じたことは、「実際に自分の五感を通じて確かめること」の 大切さである。今回の訪中では、今まで報道等を通して自分の内面に形成されていた中国 のイメージとは大きく違った中国を垣間見ることがあった。例えば、初めに訪れた北京に ついては、大気汚染などの印象が強く、正直なところ渡航前はあまり良いイメージを持っ ていなかった。しかし、実際に訪れてみると想像していた以上に街は巨大で洗練されてい たし、道に落ちているゴミも非常に少なく驚かされた。ただその一方で、一歩裏道に出る と少し暗く古びた通りも多く、華やかな発展の一方で格差を感じさせられることもあり、 ある意味自分のイメージに合致した中国を確かめることもあった。

また、途方もなく長い歴史の中で生み出されてきた中国の都市を歩き回り、そこに暮らし人々の姿を観察し、さらにはそこで学ぶ今後の中国を担う人材と交流することは、中国の今と歴史を知るこの上ない機会となった。万里の長城や故宮博物院の訪問では、中国の数千年にも渡る歴史の壮大さに驚くばかりであった。またその歴史を辿っていくなかで、

中国一国の歴史だけでなく、日本と中国の長い関係の歴史も再確認することができた。両 国が切っても切り離せない重要な関係の中で発展してきたという歴史を実際にこの目で確 かめることができた。

また、北京大学や浙江大学で学生と交流した際には、中国の学生の日本についての考え方について知ることができたとともに、こちらの中国に対する考えを伝えることもでき、お互いの国に対する認識について有意義な意見交換の時間を過ごすことができた。そこで強く感じたのは、現地の学生たちが自分自身の将来や自国の将来、あるいは日本との関係について深く思慮しているだけでなく、それについてはっきりとした自分の意見を持っていることが多いということであり、良くも悪くも何となく立場を曖昧にさせていた自分を少し見直す機会にもなった。

今回の訪中の究極の目的は、両国の発展には絶対に欠かせない日中間の平和友好を達成していくことであると思う。そして、その平和友好を推し進めるためには、まずお互いの国を双方が理解することから始める必要がある。もちろん、今回は中国の中でも限られた三都市しか訪問していないし、一週間という短期間では中国という多面的な存在のごく一面しか捉えられてはいないと思う。しかし、今回の訪中を一つのステップとして、今後より中国についての理解を深め、さらには中国との友好を深める大きな一歩を踏み出すチャンスを掴んだということは間違いない。今回の訪中を終えて、今後また仕事やプライベートなどで積極的に中国と関わっていく機会をつくっていきたいと強く思うようになった。

◆「未来を担うのは若者たちだ。中日両国の若者が相手をどう見るかが、両国関係の行方や 発展に関わる」

中日平和友好条約締結 40 周年を記念した中日大学生千人交流大会にての、李克強総理のお言葉です。中日関係に大きな転換が望めるいま、両国の良好な関係発展を担うのはわたしたちなのだと奮い立たされる思いでした。

今回の訪中団で中国の歴史や伝統、あるいは繁栄を物語る名所を多く回りましたが、わた しが一番印象に残っているのは創業公社です。

社内を見学していると、最先端の技術を駆使したアイデアが陳列しており、北京の IoT の強さをまざまざと見せつけられました。しかしそれよりもわたしが驚いたのは、スタートアップを図る若手起業家たちがうじゃうじゃいたことでした。日本では起業しようと思い立ってから実行するまでの後押しをするようなパワーが未だ乏しく、わたしたち若者にとって起業は遠いことのように感じます。しかし中国は起業家を志望する若者が本当に多く、またそれを支援する大人もたくさんいます。社会主義国だからという理由にはおさまらない、この国のエネルギーを肌に感じました。中国の発展の流れが目覚ましい要因はこういうところにもあるのだろうと思いました。

そしてなによりも、今回の訪中団では中国の大学生と交流する機会が多くありました。彼らとの会話を通して感じたことがいくつかあります。

まず、日本のソフトパワーが中国の学生に大きな影響を与えているということです。わたしが親しくなった学生はみな映画やアイドル、アニメといったポップカルチャーに関心があり、日本語を学ぶ動機になったと言っていた子もいました。わたしより彼らのほうがずっと詳しいという場面もあり、自分の無関心を恥じたこともしばしば。日本のカルチャーを通して彼らと盛り上がるなか、わたしは積極的に他国の文化を学び楽しんでいる彼らの姿勢にひどく感心しました。

また、彼らのおめず臆せず堂々としている様子に感銘を受けました。訪中中、お互いが自国の文化をパフォーマンスとして披露する機会が何度かありました。日本側はソーラン節と合唱を披露し大いに盛り上がりましたが、恥ずかしくて笑ってしまったり下を向いてしまったりということがありました。わたしは合唱に参加しましたが、前を見ると目が泳いでしまうのでずっと歌詞カードを見ていました。ところが中国の学生にそんな様子は全く見られず、むしろ魅せようという強い意識を感じました。彼らのステージを見ていて、恥ずかしがることほど恥ずかしいことはないと痛感しました。

この訪中団での唯一の反省点は、中国に行ったのにもかかわらず中国語をほとんど話さなかったことでした。中国語を使わなくてもよい環境に身を置かせてもらっていたからこそ、一歩踏み出して中国語を話していればもっと意味のある経験ができていただろうと悔しさが残ります。これもまた結局のところ、恥ずかしいから喋らなかったわけです。間違えたら恥をかくから、通じなかったら怖いから、そういった思いが先行してしまいました。それに比べて中国の学生たちは、勉強した日本語を実践しようと自ら通訳ボランティアを志願し、中日を繋ぐ大きな役割を果たしています。彼らの姿は、わたしが今までかぶっていた見栄とか世間体とかを破る原動力になりましたし、これからは恥ずかしがらず、失敗を恐れず行動していこうと思います。

政治的な意図を介さない「草の根交流」は、その国の本当の姿を知ることができると感じました。わたしは中国に対し特別な印象は持っていませんでしたが、メディアから得られる情報はネガティブなものが多く、日本と中国は相いれない関係にあるというイメージはたしかにありました。しかし実際に彼らと話してみると分かち合える部分が本当に多く、思っていたよりもずっと近い存在であることを実感しました。帰国して 1 週間が経ちますが今でも向こうの学生と連絡をとっていますし、そのうちの一人は今月中に日本に来るというので一緒に遊ぶ予定です。わたし自身、訪中団を終えてから中国主催のシンポジウムやイベントに積極的に足を運ぶようになりました。少なくともわたしにとって、今回の訪中はたしかに次へとつながっています。

今回のような日中友好の輪がもっともっと広がればいいと強く思います。GDP2 位と 3 位の国がいがみ合っていては埒があきません。手を取り合い協調しながら、この激動の時代を切り抜けていく必要があります。そしてそれをやっていくのは未来を担う若者たちです。日

中平和友好条約 40 周年を祝いこれからの日中友好が謳われるいま、わたしたちの力が求められています。

◆今回の訪中で私は人生で初めての中国大陸を訪れた。また来年九月から一年間南京大学への留学を控えていることからも、貴重且つ有意義な経験となった。以前より中華圏をはじめとする東アジア地域の言語に関心があり、第二外国語として中国語を専攻することに加え、今年からは台湾・朝鮮における植民地支配などに関する研究をするゼミに入り、歴史認識を深めている。しかし、私自身大学入学以前から、公然で大きな声で会話をする中国人に対して、あまり良い印象を抱いていなかった。ところが一年次より中国語を専攻し学んでいくうちに、同じような音で四つの複雑な声調を使い分けなければならないことを知り、自らの判断で他国の文化や国民性を解釈してきたことに後ろめたさを感じた。自分の五感を使って直接確かめるため今回の訪中団への参加を決めた。

まず私が最も印象を受けたことは、今回の訪中を通して想像以上に、中国に対して日本に近いものを感じ、さらには親近感さえ覚えたことだ。街の衛生が保たれている点や、公共でのマナーが守られている点などが例だ。近年では歴史認識問題をはじめ領土問題から両国間に深い溝があるように感じられ、メディアにおいても隣国であるにも関わらず中国に関して取り上げられるニュースの大半はマイナスのイメージを抱かせるものばかりであった。そのため若者世代でも、特に決まった理由はないけれど中国に対して良くないイメージを抱く人が増加してきてしまっている。確かに、訪中前までは社会主義国であり一党制をとる日本とは政治体制も異なれば、暮らす環境や考え方など何から何まで違う国であると思い込んでいた。しかし今回訪中団というプログラムを通し、一週間滞在することで中国に対しても、中国人に対しても日本と似通った一面があることを感じた。

また言語的な面で気になったことは、日本と同様に英語を公用語としない中国では、大多数の中国人は簡単な英会話でさえ困難とする人が多く感じられた。一方、北京大学で交流を共にした学生たちは、全員日常会話レベル以上の専門的な単語を交えた会話が可能だった。このことから、日本の英語教育の改善が必要だと感じている私は、経済の発展に伴いグローバル化が促進している中国にも英語教育の改善すべき点があるのではないかと思った。しかし、夜中にホテル周辺を散策していた際、道が分からなくなり、通りすがりの中国人の方に拙い中国語で道を尋ねたところ、親身に聞き取り、道の説明をしてくれた。どこから来たのか聞かれ、日本から来たことを伝えてもなお、やさしく笑いかけてくれたことに、心を動かされた。

今回の訪中で強く感じたことは、ただ単に場所を訪れるだけではなく、その国の人と関わりコミュニケーションをとることの重要性だ。プログラム中で知り合う中国の学生は皆、日本語を習得するために、日本の文化をアニメや漫画を通して学び、さらに相当の時間を投資して言語学習に取り組んでいるのだ。他国に比べ日本の大学生は学習時間が少ないと指摘されることが多い。私は来年から、自分がそのような中国の学生と肩を並べて勉学に励むこ

とを考え、現在の自分の学校生活を見直す契機となった。またディスカッションをする上でも、日中の友好を掲げた交流であることを考え、配慮しながら話をする学生も見受けられ、未来を担う若者の一人として、相互間の理解を深めるとともに、様々な歴史を乗り越えてきた隣国を思いやる気持ちを持つことの大切さを感じた。今回中国の学生に高めてもらったモチベーションを落とすことなく、来年からの南京大学への留学、残りの学生生活、そして卒業後に活かしていこうと思う。

◆今回の訪中を終えて一番に痛感したことは、何事も自分の目で見て判断することの重要性です。訪中前は、メディアなどを通して知ったマイナスな情報から中国を色眼鏡で見ていました。もちろん7日間の滞在の中で悪い面を目にすることもありました。例えば、交通マナーが悪い点、電柱の線が何十本も絡み合っていて危険な点、トイレなどのインフラがきちんと整備されていないといった面です。しかし、実際に訪れて市街を歩いたり、現地の学生と交流することで、私が想像していた以上に中国の良い面を感じることができました。北京、杭州、上海の3都市で色々な体験をさせてもらいましたが、その中でも2つ印象に残ったことがあります。

まず1つ目は学生のレベルの高さです。今回の訪中では、日本語を学んでいる北京第二外国語学院と浙江大学の学生、そして英語で授業を受けている北京大学院の学生と交流する機会がありました。そこで驚いたのは、現地の学生の語学力の高さ、日本への関心の高さ、自分の大学への誇り、そして愛国心の強さです。交流した学生たちは第二言語を不自由なく使え、北京第二外国語学院の学生に至っては同時通訳をしてくれました。また日本への関心も高く、日本について色々と知っていました。日本で流行っているものなど色々な質問を受けました。反対に、日常に関することから博物館の展示物についてなど、私がした質問になんでも答えてくれました。果たして日本の学生に同じことができるでしょうか。何人の学生が、中国の学生と同じような対応を取れるでしょうか。私の勝手な推測ですが、きっとほとんどの学生が6年以上も英語を習ったにも関わらず、不自由なく会話を続けることができないでしょう。また博物館に展示されているものに対する知識が不足し、説明がたどたどしくなるのではないでしょうか。中国の学生との交流を通して、彼らは常日頃から色々なことに関心があり、熱心に勉強しているのだなという印象を受けました。また自信に満ち溢れている姿に見えたのは、自分の大学と自国を誇りに思っているところから来ているような気がしました。

2つ目は若者への支援の強さです。起業する若者を支援する北京創業公社への参観を経て、中国は政府や企業による若者への支援が充実していると感じました。また留学生の数が多いにも関わらず、学費免除などの制度で、留学生を全面的に支援していることを知り、日本に比べて未来のある若者が大事にされているイメージを受けました。日本はどちらかというと高齢者を優先的に扱う政策や支援が多いので、この点はぜひ日本の政府や企業にも真似をしてもらいたい部分です。

訪中の際に、ある方が日中関係は遡れば倭国の時代の遣隋使から始まっていて、今後さらに友好な日中関係を持続させるには私たちが頑張らなければならないと仰っていました。今回の訪中で、自分の目で実際の中国を見て確かめたことで、中国へのイメージが変わり、自分の視野の狭さを認識しました。この体験を友達に話すなどして、もっとたくさんの日本の学生に訪中団について知ってもらいたいです。また、交流した学生とは、We Chat で今でも連絡を取っています。中には日本への留学が決まっている学生の方もいるので、再会したいと思っていますし、私自身もまた中国に旅行で訪れたいと考えています。今後も、私でもできる小さなことから日中友好関係を築いていきたいと思います。

◆今回の訪中では、一週間を通じて現地の人達と関わる機会が多くあった。

北京大学では、北京大学の学生達と班を組み、ディスカッションを通じて交流をした。彼 らは日本の文化に大きな興味を持っていて、日本語学科ではなくても日本語を独学で勉強 している子がいるほどであった。私は彼らがどんな学生生活を送っているのかを詳しく知 りたいと思い、昼食の時間に、同じ班のある男子学生と英語で直接話をした。その時に感じ たのは、彼は自分の将来について真剣に考え、大学で勉強することを生活の中心としている、 ということであった。私がアルバイトをしているかどうか聞くと、彼は現在インターンシッ プをしているということであった。現在彼は、多くの企業が立ち並ぶ、北京のシリコンバレ ーとも言える「中関村」でインターンシップをしているという。それも、週に2回ほどフル タイムで働くものであり、お金を稼ぐためよりは、自分の経験を積むためだという。私は、 「アルバイト=インターンシップ」と捉える彼の考え方に驚き、「趣味や学費のためにバイト している友人はいないの?」と聞いた。彼は、ほとんどいない、と答えた。勉強の時間を削 ってまで働くことはせず、奨学金の種類も多いため、勉強に集中すれば学費を補助してもら える、ということであった。私が勉強熱心な彼の考え方に素直に感心すると、彼は、「中国 は人口が多くて競争が激しいから、知識を身につけた上で経験を積まないと目をつけても らえない。」と話した。現在の日本では働き手が不足していて、企業側が必死になって働き 手を求める状況も少なくない。そのため私は、中国の学生と比べて日本の学生は、そこまで 熱心に勉学に励まなくてもある程度の職を得られる環境にいるのではないかと感じた。し かし、社会的背景の違いがあるにせよ、私は北京大の学生の勉強に対する姿勢を見習わなけ ればならないと感じた。大学において第一に知識を身につけることは、自分の思い描く将来 に近づくために最も重要であると感じた。

浙江大学では、浙江省内の大学の日本語学科の学生達と班を組んでディスカションやレクリエーションを楽しんだ。私の班には、浙江外国語学院の学生三人がついてくれた。私がまず驚いたのは、彼らの日本語力の高さである。彼らは日本語を学び始めて二年目であった。しかし、会話の中で日本語の意味を聞き返すことはほとんどなく、日本人だと言われてもおかしくないほどの訛りのない綺麗な日本語を話していた。さらに、日本に留学した経験はないという。私の周りでは、発音が完璧な流暢な英語を話す子達がいると、その子達の多くは

海外滞在経験が長かったりする。国内にいながら日本人並みの会話力を習得するということは、やはり彼らの勉強量も相当なものなのであろう。これは私が出会った、日本に興味を持つ多くの中国の人に共通することであるが、彼らは日本の漫画やアニメが大好きで、それらを見ることが日本語学習に役に立っているのだという。漫画やアニメは私たちにとっては娯楽であるが、そういったものが、日本に興味を持つ人や日本語話者を増やすことにつながっている、という事実には驚いた。

私は帰国後、浙江大学で仲良くなった学生と、チャットアプリを通じてお互いのことについて話をしていた。私が帰国してすぐ、台風が日本を襲った際、彼は心配のメッセージとともに、中国国内でも日本の台風が大きく報道されていることを教えてくれた。私がなぜ報道されているのか聞くと、今や日本には多くの中国人が住んでいるため、日本における大きなニュースは、中国中の人々が気にかけているのだと言っていた。私はそれを聞いた時、「日本と中国は深くつながっている」、ということを大きく実感した。中国の人々は、私たちの知らないところで日本に大きな関心をもち、日本と繋がりを持っているのだと思う。

中国の学生と関わることを通して、自分の将来の考え方に関して大きな影響を受け、彼らが日本に大きな関心を持っていることを知った。私達も、そのような彼らの日本に対する思いを受け止め、私達の方からも中国に歩み寄り、そこに住む人々について積極的に知ろうとすることが大切なのではないかと感じた。

◆訪中団の一員として7日間中国を巡った今回の経験は、大学訪問や歓迎会をはじめ、同世代の中国人との交流、千人交流会への参加など、ただの旅行では味わえない特別な経験がたくさんでき、私の人生にとってかけがえのない時間となった。それと同時に、中国に対する私の見方や考え方も変化した。

私にとって今回が初めての訪中であったが、訪れる前まで、私が持っていた中国に対するイメージは、日本の多くの人々と同じで、正直あまり良いものではなかった。その理由は、大気汚染や交通ルール、社会格差や情報統制など、日本と異なる部分を誇張し、過剰に演出して報じる日本のテレビや新聞の情報を鵜呑みにし、それをただ受動的に受け取っていたからである。また、親や祖父母の世代は中国及び中国人に対して厳しい目を持つ人が多く、私の中に中国に対する否定的なイメージが自然と形成されていったからである。自分で訪れ、学び、情報を客観視することはとても面倒くさい。しかし、流れてくる情報を疑いもなく受け取り、それだけを基に中国観を形成することがどれほど愚かで、もったいないことか、この7日間の訪中が教えてくれた。

私が中国を実際に訪れ、見聞を通して感じたことを一言でまとめると、「中国は特別でない」ということである。中国は汚い、マナーが悪い、愛想がない、大雑把だなど、「中国は〇〇だ」という負の先入観を持つ日本人は多く、中国に対して好印象を持つ人は少ない。しかし、特に中国人のガイドさんや大学生との交流は、一瞬にして私の先入観を払拭してくれた。食の好みや流行りの芸能人、可愛いものの話など、話題は日本人と会話して

いるのと大して変わらず、とても楽しかった。また、電車やバス、コンビニやファストフード店が当たり前にある光景も日本と変わらず、7日間不自由なく過ごすことができた。その一方で、中国人の学歴へのこだわりや勉強に対する積極性には驚かされたと同時に、私の学習意欲も掻き立てられた。また、建物の規模がとても大きいことや、バスの運転の荒さ、トイレの不便さなど、日本と異なることも多く刺激的だった。このように、共通点も相違点もあることは、中国に限らず海外に行けばどの国でも当たり前のことである。中国は特別ではなく日本の隣国の一つであり、中国を捉える際に余計な先入観は不必要だなと感じた。だから、これからは中国を特別視せず、客観的視野を通して中国と向き合いたいと思う。

最後に、中国はたった7日の訪中で理解できるほど単純ではない。今回は、ホテルに宿泊し、朝昼晩の食事や交流の相手が決められていたため、一般的な中国人の生活や価値観、地方都市、少数民族の人びとには関わることはできなかった。また、中国の民族格差や戸籍問題、情報規制などの社会問題に対して硬く議論するきっかけはなかった。だから、この訪中で中国全てを知った気になるのではなく、わかったのは中国の一部に過ぎないことを自覚した上で、中国の社会問題、日中関係を考えるきっかけとしたい。

領土や歴史認識をめぐり、日中関係は度々摩擦が生じ、そのたびに日本人の中国観、中国人の日本観は悪化し、政治問題が民間、世論に大きく影響してしまう。しかし、世論に流されるのではなく、一人一人が自分で学び、考える主体的な態度を持つこと、政治に左右されずに民間交流を滞りなく続けていくことが、日中関係を良好に継続する土台になるのではないかと今回の訪中を通して改めて自覚させられた。

◆今回の日中友好大学生訪中団に参加し、本当にとても良い経験がたくさんできました。私は初めて中国に行きましたが、北京・杭州・上海の3つの都市で様々なものに触れ、今まで自分が知らなかった大きな世界を知ることができました。私は中国語を専攻しているものの、いざ現地に行ってみると会話が全く成り立たずに少しショックを受けました。訪中以前は、中国というと街があまり綺麗ではない、無愛想な人が多いといったイメージを持っていました。しかし、実際に訪れてみると街がすごく綺麗で驚きました。テレビで聞いた中国についての情報ばかりを信じてイメージを膨らませていた自分が、すごくちっぽけに感じました。北京大学の学生や北京の第二外国語大学の学生さんたちは優しく私に接してくれ、暖かみがある人々で感動しました。それだけでなく、色んな中国語を丁寧に私に教えてくれました。日本語がとても上手だった中国の学生に「どのように日本語を学んだのですか」と尋ねると、「日本語を話せるようになって日本人と話をしてみたいと思ったからです。だから一生懸命に学びました。今、たくさんの日本人と発しく話せて本当に嬉しい。」と笑顔で話してくれました。その時私は、同年代の学生が懸命に語学を学んでいることに胸を打たれました。また、自分の甘さに気づきました。私も中国語で中国の方々と楽しく話しをできるように本気で学ぼうと決心しました。今回の訪中ではほとんど中国語での会話はできなかっ

たけれども、いつかまたチャンスがあるのなら中国にいきたいと、そして多くの方と交流し たいと強く思いました。私は訪中前と訪中後での中国の人々に対する気持ちの変化はとて も大きく、中国の人々のことが大好きになりました。そんなたくさんの魅力が詰まった中国 に関わる仕事に、将来は就きたいと思うようになりました。この7日間は私の人生に「夢を 持って大きな世界と関わることの楽しさ」を教えてくれました。万里の長城から見た景色は 一生忘れられない美しさでした。若者の起業支援等を行なっている北京の創業公社では、現 代の中国を担っていく若者の考えや日本の若者との考えの違いを知りました。千人交流大 会では現地の学生と楽しい時間を過ごしながら打ち解けることができ、私のこれからのも っと語学を学んで中国に関わりたいという志になりました。故宮博物院では今まで見たこ とない、様々な歴史的な素晴らしい建物を見ることができました。浙江大学では広いキャン パスと勤勉な学生に驚きました。西湖遊覧では広い湖を眺めながら他大学の学生と交流す ることができました。シルク博物館では様々な展示物から自分の考え方に大きな影響を得 ました。上海城市計画展示館では発達する中国に驚かされました。上海の夜景は写真で見る よりもずっと美しかったです。このように、私はたくさんの思い出を作ることができました。 団員として過ごした7日間はどの瞬間を取っても充実した時間でした。これから一生懸命 に学んでいきたいです。本当にありがとうございました。

◆まず初めに、私は訪中団への参加前、この旅がこれほど実り多いものになろうとは思ってもみませんでした。帰国後一週間以上経った今でも、中国で過ごした時間、出会った人々を思い出してしまいます。そのくらい、私にとって大きな経験となりました。

このように満足感を持って帰ってくることができた裏には、この訪中団の内容の濃さがあると思います。この旅では、中国の歴史、文化、発展する都市などを実際に見る観光の機会と、現地学生との交流や、スタートアップの現場を見るなどの学びの機会、どちらも本当に充実していました。観光と学習、どちらか一方に偏ることない内容であったからこそ、ただ「楽しかった」だけでは終わらない、より深い経験ができたのだと思います。私たちのプログラムを考え、様々な手配をしてくださった多くの方々に、感謝の気持ちでいっぱいです。

私が訪中した中で、最も強く心に残っているのは、北京大学での一日です。北京大学では、午前中に、燕京学院という大学院に所属する皆さんにキャンパスツアーをしてもらい、その後交流しました。また、午後からは訪中団のメインイベントである、中日大学生千人交流大会に参加しました。

私は、北京大学に行くとわかったときから、中国トップレベルの大学生はどんなことを考えているのだろうと、とても気になっていました。そのため、キャンパスツアーの際、これはチャンスだと思い、話しかけに行きました。そして、そこでわかったのは、彼らも私たち日本の大学生と何も変わらない大学生だということです。日本のアニメや映画の話、恋愛話で盛り上がり、今度桜を見に行くつもりだと言う中国の友人。彼女と話す時間

は、本当に楽しかったです。私たちは日本で普通に過ごしていると、「中国」といわれれば、何かとネガティブなイメージを抱きがちです。私は、中国に対してマイナスなイメージを持っているつもりはありませんでした。しかし、心のどこかで、中国の学生は日本の学生とは何か違うのではないか、と思っていた節があったと思います。しかし、そのような思い込みは打破されました。話す言葉が違うだけで、「中国人だから〇〇だ」という違いはないと思います。違いといえば、彼らと比べて、自分がいかに勉強不足であるかを痛感しました。

それどころか、中国の学生は、日本のことを驚くほどよく知っています。日本を専門に 学んでいない人であってもです。それに比べて、私はといえば、中国で有名な歌手の一人 さえ知りません。私は正面から中国を見ていなかったのだ、と思い知らされました。そう して、この交流のあとから、中国をもっと知りたいという思いが強くなりました。同時 に、自分の目で見ること、内側から見ることの大切さを学びました。

訪中団を通じて常に感じていたのは、本当に多くの人が、日中関係の発展のために努力を重ねてきたということです。滞在中、様々な場面で、日中双方の方から、「これからの日中関係を作っていくのは君たち若者だ」との言葉をいただきました。私たち学生は、大人からそのような言葉を受けることに、ある意味慣れています。しかし、今回ほど、この言葉が響いたことはありませんでした。中国大使館をはじめ、北京市人民対外協会の方々は私たちのために多くの投資をしてくださっています。最終日には、私たちが上海の美しい夜景を見られるよう、予定を変更までしてくださいました。その他にも、私たちが充実した時間を過ごせるよう、数え切れないほどの配慮をしてくださっていたのだと思います。それは、日中友好を強く願い、若者にその希望を託しているからだと思います。

日中の関係を作っている方々のそのような思いを感じたことも影響し、私も将来、日中 友好のために何かしたい、と初めて思いました。また、純粋に中国をもっと知りたい、内 側から見てみたいという思いから、中国へ留学するという新たな、大きな目標ができまし た。訪中前には全く考えられなかったことです。

私は訪中団を通じて、貴重な学びの機会と、中国の友人、同じ興味を持つ日本の多くの仲間を得ることができました。一つの経験にとどまらない、未来につながる収穫です。このような機会を与えてくださった日中友好協会の皆さまには、特に感謝しています。今後も、中国の学生から受けた刺激を忘れず、目標に向かって努力していきたいと思います。

◆「中国に行きたい」と告げた時の家族の反応はあまり芳しいものではありませんでした。 私は喘息を患っているので PM2.5 のことで過度に心配されたし、食べ物に関してもスーパーなどで「中国産」の表記のあるものは危険と思い込んでいるのか意識的に避けるので、「本当に大丈夫?」と家族からは何度も確認されました。また私の故郷は観光地でもある長崎で、街には中国人観光客がたくさん溢れているのですが、家族をはじめとして市民全体が彼らに良いイメージを持っていません。彼らの話し声がうるさいだとか、マナーが悪いだとか、 そのように一度悪いイメージを持ってしまったらそこから抜け出すのはかなり難しいので しょう。そのようにして私の中国イメージは「なんとなく良くない国」として刷り込まれた ままずっと過ごしてきました。

しかし大学入学後は東アジアの国際関係学に興味を持ち、授業で中国近代史に触れる中で「中国とはこんなにも興味深い国だったのか」と私の中の中国に対する関心がどんどん高まっていきました。そのようにしてマイナスのイメージもありつつも好奇心からこの訪中団の参加を決めました。

まず北京に着いてすぐの歓迎会や北京大学訪問の際には、北京大学の学生さんたちと私たちでたくさん交流をする時間がありました。歓迎会では交互に出し物を発表する機会があったのですが、私は中国語もほとんど話せないし中国のポップカルチャーについても全く興味がありませんでした。しかし向こうの学生ボランティアの皆さんは日本語で会話をしてくれたし、『世界に一つだけの花』を日本語で歌ってくれました。単純に嬉しかったというのもありますが、なんとなく心理的に離れていると感じていた中国人の皆さんと近くで交流してみて初めて気づくこともたくさんありました。それは、日本人はメディアに流されやすくテレビのニュースなどからほぼ無意識的に中国のことを毛嫌いしていたけれど、実際に彼らに会ってみるとこんなにも日本に関心を持ってくれていることが分かったということです。何と言っても豪華な食事や歓迎の挨拶・出し物など、こんなにも私たち日本人のことを歓迎してくれているということがとても嬉しかったです。最初は中国人の学生さんたちと交流することに少し緊張していましたが、彼らも私たちと変わらない大学生なんだな、ということが身にしみて感じられてどんどん打ち解けていくことができました。これを機に中国語や中国の歴史・文化をもっと勉強したい、と感じたことは言うまでもありません。帰国後は一生懸命、勉学に励んでいます。

このように今回の訪中を通して学んだことはたくさんありますがやはり何よりも良かったと思うことは、今回の訪中が中国という国について興味を持つ大きなきっかけになったということです。互いに興味を持たなければ、未来のパートナーシップを築くことはおろか、交流すら始まりません。21 世紀はアジアの時代だと言われています。これから日本と中国が有効的な関係を結んでともによりよい未来を目指していかなければならないということは明白だと考えています。そのため私たち大学生など民間レベルから、交流の機会を持つということは非常に重要なことだと感じました。今回の訪中の機会をいただいたことには心から感謝しています。まずは今回の経験を友達や家族に話し、いずれはより良い日中関係のために仕事をするなど、何らかの形で恩返しできたらいいなと思っています。ありがとうございました。

◆今やどこにでも見られる Made in China の文字から、やはり中国のイメージは世界の中で急成長している国、ビジネスが好きな国、でした。テレビで見る限りでは、習近平が永遠の国家主席となるルールが定められ、なんとも独裁的な国家だという風にも思っていまし

た。中国人に対しては、わたしがマレーシアという中華系の国に住んでいた時の印象から、マナーが無く、とても大雑把といった印象を持っていました。ただ、わたしはたったこれだけの情報から中国という国をわかったつもりになっていました。実際に、中国を訪問して感じたことは、隣国であるはずの中国のことを全く何も知らなかったということです。また訪中団を通し、日中関係の重要性を考えるようになりました。

今回の旅は、千人交流大会に加え、北京第二外国語大学の学生や浙江大学の学生との交流など、同年代の学生と話せる機会が豊富にありました。わたしは同年代の人の考えや価値観をぜひ知りたいと思っていたので、中国での生活や、受験勉強、大学生活、就職事情などを主に話しました。日本と状況が似ている部分も多いと思った一方、大学や就職時の競争率は日本とは比べものにならない程、苦労が多いと感じました。特に就職時、中国では専門性を持った即戦力になる人材が企業から求められていることもあり、大学院まで行かないと職につくのは厳しいと知りました。それもあり、中国の大学生は、学問を将来活かすために、それを実践力としてきちんと身につけているのだと感心しました。創業公社に訪問した際も、若い人が、中国の成長を支える重要な役割を為していることを実感しました。勉強熱心な一面がある一方で、中国の学生の謙虚な姿には驚きました。日本人が「すごいね」と言うと、「全然勉強してないですよ」と必ず言っていました。わたしは、中国人はマナーが悪く態度も大きいと、偏見的な目で見ていた部分がありましたが、当たり前ではありますが必ずしもそういうわけではないのだと感じました。

一つ気になったのは、中国の田舎・村から出てきたという学生たちを数人見かけたことです。中国の村の現状は、北京や上海の大都会とどう違うのか大変気になりました。北京と上海など、地域で文化や言語が全く違うと知れたことは、旅の収穫の一つでしたが、あの広大な中国では都会と田舎でも随分と状況が違うのだろうと思いました。わたしたちが交流した学生は、おそらくエリートと言われる人たちで、そうではない人との貧富の差などが少々気になりました。今回の旅は、総じて中国の光り輝く、表の部分を見させていただいたという印象でした。

日中関係については、そもそも中国政府が公式に日本の学生を招待し、大規模な交流の場を設けているという、その事実がまずわたしの中では驚きでした。あれほどの費用をかけてまで、日中の関係を良好にしていこうという意思があるということ、日中関係がそれほど重視されているのだと実感しました。日中関係は、メディアの情報により、悪い印象が植えつけられがちですが、こういった取り組みをもっと前面的に押し出すような報道があれば、印象はかわるのではないかと思いました。長い日中交流の歴史が、今のままではないがしろにされているように思えました。

最後に、訪中を通して、交流の重要性を改めて実感しました。駐日中国大使夫人の汪婉先生が、日中の往来・交流を続けていくことの重要性を語ってくださいましたが、まさにその言葉の通りだと思いました。まず友人を作ること、実際に行ってみることが最初の相互理解につながることを実感しました。今回の旅で、中国人の友達が増えました。将来を担う若者の一人として、ここから良好な関係を気づいていきたいと思いました。国土も広く、人口も

多く、人種や文化が多様な中国を一概に捉えることはできませんが、もっと中国のことを知り、将来何かしらの形で関わっていきたいと思います。

◆この度、私は日本友好大学生訪中団に参加し、現地での交流と視察を通じて、とても貴重な体験ができただけでなく、数多くのことを学びました。特に北京、杭州、上海の三つの都市を訪問し、中国の歴史と未来についてあらゆる側面から理解を深めることができました。

北京では、ユニークな形の建物が立ち並ぶ都市部の発展に驚きました。北京大学での向上心の高い学生の方々や北京創業公社という新しい形の企業からは多くの刺激をもらいました。万里の長城や故宮博物館といった中国 5000 年の歴史の一部に触れたことで、今まで教科書でしか見たことがなかった景色が目の前に浮かび上がり、非常に感激しました。杭州では、北京に比べると高層ビルは少ないですが、地下通路をはじめとする交通手段が完備されていて、利便さを感じました。そして、世界遺産である西湖の景色を満喫することができました。上海では、上海城市規画展示館で上海の地形から地下鉄の路線まで楽しく学ぶことができました。豫園で古風の建物に囲まれての買い物がとても新鮮だったことや夜の散策で東方明珠塔をはじめとする豪華な夜景を生で見ることができたことが印象的でした。

訪中前から、私は中国の言語を習得することにあたって、中国という国についてとても 興味を持っていました。しかし、メディアなどの情報を通じて、中国に対しては日本に対 して友好的ではない考え方の人が多いことや大気汚染をはじめとする環境問題が多い印象 を持っていました。しかし、実際に訪れてみると、私の中にある中国への印象の多くが変 わりました。まず、現地で大学生と交流する際に学生たちはとても友好的で好意を持って 接してくれました。それにより、日常的な事柄から両国の文化に至るまで幅広く意見交換 を交わすことができました。そのときに驚いたこととしては、多くの学生は日本の情報を よく知ってくださっていて、考え方も共通しているところが多いことです。学生ばかりで なく、街にいた一般の方も私たちが困っているのを見たら親切に手助けしてくれました。 さらに、環境問題についてですが、日本のメディアで数多く取り上げている大気汚染も思 いの外少なく、詳しく尋ねてみると、PM2.5の発生は中国の特定の地区でしかも特定の時 期にしか起こらないと教えてくださいました。街を見渡してみると、ゴミ箱が多く設置さ れているおかげで道端にゴミが落ちていることはほぼなかったのです。そして、排気ガス 対策として公衆バスには電動化されていました。こういった点で、良い意味で予想を裏切 られました。そして、中国にはまだまだ知られていない魅力的な点が多く存在していると 感じました。

7日間の訪中を通じ、私には多くの出会いがありました。それらの全てが刺激的で有意義なものとなりました。実際に現地に赴き、相互理解を深めることで、日本にいるだけでは知りえなかった事柄を正しく知れたと思いました。その一方、マスメディアが情報収集

の主流となっているこの時代、私たちはテレビやスマートフォンの小さな画面でしか物事を見ていない恐ろしさを痛感しました。日本にはメディアの報道により中国に対して間違った認識を持っている方もまだ多いと思うので、今回の訪中で身をもって感じた中国を多くの人に広めたいです。そして、日中をつなぐ友好な架け橋となる人物に成長したいです。最後に、このように素晴らしい機会を提供してくださった日中友好協会をはじめとするすべての関係者方々に感謝を伝えたいです。

ありがとうございました。

◆私の周りの津田塾生は、中国をフィールドとした国際関係概論を履修した人が多い。国際関係学科1年生の必修科目として、半数はこちらのクラス、残りの半数は別の教授によるフィールドもまた別の地域の国際関係概論を履修する。国とは、民族とは、そもそも国際とは、といったような大学で学問を修めるために必要な基礎を、中国という隣国の大国を軸に学んだ。その授業の影響もあって、「中国人」という表現をするのが、実はあまり好きではない。中国は多民族国家だ。今回の訪中でも様々な文化を紹介してもらう機会があり、その多様性のすばらしさを垣間見た。食事にその特色が表れていたり、歌や踊りなど音楽性によるものもあったり、それらは様々なルーツを持つ人がいるからであるから、それらを一括りに一つの名称でまとめてしまうのが、とても失礼に思われるので、「中国出身の人」とぼかしてしまうことが多い。

今回の経験が私にとってはじめての訪中となったわけだが、その広大な土地に驚きを隠せず、同じ国の国民と一言でいっても、様々な人がいるのだ、というその理由の一端を感じ取れたように思う。奇しくも平成最後の夏にシルクロードの国を 2 つも訪れたことになったので、ここ中国からずっと西へ歩けば、トルコへ着くのだと思うと、つい西を眺めたくなるような、ひたすら歩いてみたくなるような、そんな気分になった。絹に関する説明を両国で受けることができ、身をもってその類似性を知ったがゆえに、世界はつながっているのだという自明の事実を身体がやっと理解したように思う。距離的な側面からしてみれば、トルコよりも日本のほうがずっと中国に近い。トルコと中国に類似点があるならば、それ以上のものが日本にあるのは当然だろう。「中国らしさ」というのは、そのまま「日本らしさ」に直結するような、特に建築物において、そのように感じたことはとても新鮮だった。

言語においてはその限りではないのだが、中国語に対するモチベーションがこの 7 日間で向上したことは否めない。今まで学習してきた言語はいわゆる欧米の言語だった。話すと吃驚されることも少なくなかったり、最初から対応されなかったりする。見た目でそれとわかる「外国人」に自分がなるからだ。しかし、この国では違うのではないか。もし、流暢に会話ができるようになればだが。言い方は悪いが「日本人だということがばれないのではないか。」ということを思ってしまったのだ。日本人がなんとなく韓国人や中国人を見た目で当てることができるように、その逆もまた然りなのだろうが、顔が似ている我々が同じ言語で会話ができるということは、欧米の人とその言語で話すよりも、心的距離が近くなるのでは、

という興味が俄かに湧いてきている。ところで、中国では勉強といわず、学習という言葉を使うと北京でお近づきになった人から教わった。勉強というと学生がするもののようだが、学習は生涯学習を彷彿とさせ、とても好ましく思う。此度の経験で沸いた興味が冷めてしまうのはもったいない。この経験がなかったら、代々木のチャイナフェスティバルに行ってみることもなかっただろう。このフェスを通じて、改めて日本と中国の音楽文化の距離の近さを感じ、またその活力を体感した。文面上の学びにとらわれすぎず、肌でも感じる「学習」を意識した生活を送っていくことを当面の目標としたい。

◆この訪中団への参加はわたしの考えを大きく変えるきっかけとなりました。まずは中国の経済成長に対する印象です。今回の訪問では創業公社という若者の起業を支援する会社を訪問する機会がありました。その会社は若者たちを全面的にバックアップしており、まさに若者主導の国家であることを強く感じさせられました。それは中国人学生との交流を通しても感じることができました。彼らは日本語がとても上手で驚かされました。しかし、それ以上に驚いたのは彼らが将来を見据えて大学に通い、目標に向かって一生懸命であることでした。私が知り合った中国人学生の一人は日本語の学習歴が3年にもかかわらずわたしとスムーズに会話することができていました。またアルバイトに対する考え方も日本人と異なっていました。私たちはお金を稼ぐことが目的になりがちですが、中国人たちは仕事のスキルを身につけることが目的であるようで、そこに大きなギャップを感じました。こうしたことから中国の経済成長について、まだまだ環境汚染などの解決しなければならない問題はあったとしても、その裏側には彼ら一人一人が国の将来を考え積極的な行動と努力の結晶のもとにあるのだ、とポジティブに捉え直すことができました。また同じように私も日本を構成する一員であるのだ、と彼らの姿を見て感じました。

また同年代の中国人学生との交流も私に大きな刺激を与えました。北京に着いてからの三日間私たちと行動を共にしたボランティアの方々、北京大学、浙江大学の学生の方々との交流を通して感じたことは、彼らが私たち日本について想像以上に詳しいということです。私が交流した学生の一人は日本のちょっとした社会問題であるキラキラネームということを知っており熱心にそれについて私たちに質問していました。また彼らからの日本への質問は絶えることはありませんでした。質問するということはそのことについてしっかり理解しないとすることはできないはずです。そうした姿からも彼らは積極的に日本を理解しようとしていることを感じることができました。さらに私が出会った学生は日本のニュースを常にネットで見ることができるようにしていてそれにも驚かされました。しかしそういった硬いことばかりではなく日本で有名な女優さんやドラマなどについても彼らは知っていて共通の話題で楽しくお話しすることもできました。

さらに一緒に訪問した日本人学生の方々との出会いも忘れがたいものとなりました。初め は緊張であまり話すことができませんでしたが日が経つにつれてどんどん打ち解けること ができ自分たちの将来についても語ることができました。その中で同じ志の人や自分には ない視点で物事を考える人などとの出会いは自分を見つめ直すきっかけを与えてくれました。

今回の訪中団はこうした点において私をかえてくれました。しかし、そこで終わらせず私自身、中国への理解をより深めまた、周りの人たちの中国の印象を少しでも変わるように今回の経験を話していきたいと思っています。また、最後に貴重な体験をさせていただき、日中両国の関係者の皆様本当にありがとうございました。

◆「百聞は一見に如かず。」この言葉こそが今回の日中大学生訪中団に参加したことによっ てさせていただいた経験を表すのに最もふさわしい言葉であると思いました。このような 貴重な経験を 10 代最後の年に出来たこと、日本と中国にとって大きな節目である日中平和 友好条約 40 周年に出来たことに対して、私たちに直接的に関わって下さった方々にはもち ろん、間接的にサポートを行なってくださっていた方々など、全ての方々へ感謝しています。 私が大きな課題であると認識するとともに、どのように解決をすれば良いのか思い悩ん でいる課題は、日本人の中国に対する誤解です。みなさんは中国に対してどのようなイメー ジを持っていますか。良いイメージがあると回答してくださる方は、少ないのではないかと 私は考えています。なぜなら、私も中国にあまり良いイメージを持っていなかった一人だか らです。第二外国語で中国語を勉強し始めたことから、ビジネスで中国と関わってみたいと 考えるようになり、中国への関心は高まっていましたが、良いイメージを持つことは、中国 に足を運ぶことなく、日本国内にいる限り難しかったと思います。私が中国に対して持って いたイメージは、礼儀やマナーがなっていない人が多いというイメージです。中国人は、周 囲の人々がいるということをあまり考えずに、自分さえ良ければ良いという考え方をして しまっているため、そのような振る舞いをしてしまうのかなと考えていました。しかし、多 くの中国人と接するうちに、日本と中国の文化習慣の違いから来るものだと気付きました。 中国人は、細かいことを気にしない、非常におおらかな国民性を持っていました。そして、 店員さんは、笑顔がなく冷たいと聞いたことがありましたが、全く逆で、皆笑顔で挨拶を返 してくれたり、たわいもない話をしてくれたりと優しい方ばかりでした。しかし、お客さん がいるにも関わらず、眠っていたり、スマホで動画を見ていたりなど、自由な勤務の仕方を している店員さんや警備員さんが多く面白かったです。私は、態度が悪く不快だなどと思う ことはありませんでしたが、もしもこれが日本だったら、お店などにクレームを入れる人が 絶対に存在するし、そのような勤務態度は許されないでしょう。そう考えると、さらに中国 は興味深いと感じました。今回は、北京や杭州で同世代の大学生と交流させていただく機会 がありました。皆、日本に関心を持っており、フレンドリーで優しく、日本語が本当に上手 で驚かされました。次回中国を訪れる際には、私が中国語を上達させ驚かせたいです。また、 街の安全性については、日本以上ではないかと思うほど安全でした。入国手続き時には、指 紋を採取されるし、地下鉄に乗るだけでも、荷物検査があり、テロ対策も十分にされていま す。この点においては、日本がかなり遅れていると思います。グローバル化が進み、人的流

動性が高まる今、東京オリンピックという大きなイベントも控えている日本は、中国のような対策を講じる必要性を感じます。未だに中国に関する悪いニュースを見ることもありますが、良い面もあるということを忘れずにいたいです。日本と中国が協力し合うことで、両国にさらなる飛躍を期待できるはずです。中国という国を身を持って知った私たちが、中国に対する勝手な偏見をを無くし、友好関係を築く中心となりたいです。

◆「夢の国、現実は厳しい国、中国。」事前研修会で挨拶された団長の言葉である。

「夢の国」とは誰から見た姿であろうか。実際に訪れたことのない人からすれば、中国に対し抱く良い夢と悪い夢があると思う。中国への渡航経験の無い私は、中国に良い夢を抱いていた。日本の食や言葉、社会制度の起源を遡ると、遥か昔の中国に辿り着くものも多く、そんな悠久の歴史と文化に対する親しみがあるからだ。しかし中国の文化・歴史・政治経済について、日本人は様々な印象を抱いている。特に、好印象と悪印象。其々を抱く者同士のイメージには、大きな落差があるのではないかと感じてきた。日本人の8割が悪印象を抱いていると言う一部の世論調査を踏まえると、好印象を抱く自分は少数派なのかと心寂しいが、厳しい現実なのであろう。

「中国は恐ろしい」「民度が低い」と言う日本人もいれば、「日本こそ驕りを反省すべし」 「文化と政治は別物だ」と言う日本人もいる。いずれの印象を持つ者も、好きか嫌いかとい うものは価値判断の一つであって、実際の感情はもっと複雑だと思うし、現実は全く異なる ことも考えられる。そんな日本の世論を考えればやはり、中国は近くて遠い国であることを 実感する。

今回訪中団に参加したきっかけは、中国に対する自身の感性を、報道や文献だけに頼ることなく、独自の見方を持つ経験を得たいと思ったからだ。

千人交流会や晩餐会に参加したことで、中国の官民両方に、日中友好を積極的に希求する 方が多くいることを知れたことは意義深いものだった。

日本語を学ぶ中国人大学生が、将来は官界で活躍したいと語ってくれて、心強い気持ちになった。会話やスピーチを通訳できるレベルまで日本語を学ぶには、尋常でない根気と努力が必要なはず。日本語と日本文化に情熱を注いでいる同年代の学生を見ると、その向学心と日本愛に驚かされるばかりであった。

普段、私が日本で中国の情報に接する機会は書籍やネットといったメディアが中心だ。

「一つの情報を鵜呑みにしてはいけない」と言葉では自身を戒めるが。刺激的なニュースや文言を前にすると「やっぱりこうらしい」「どうせこんなことなんだろう」と納得したくなる。中国に対するイメージに「こうあってほしい」という国柄や国民像があるのかもしれない。中国に対する価値観は人それぞれだが、先入観からくる価値観を変えることは容易なことでは無い。しかし、先入観が根拠の価値観で相手と接することで、果たして相互理解な

どできるのだろうか。

友好に互いの理解は欠かせないが、理解しようとする姿勢が最も大事だと思う。

夢とは、見るのは簡単でも、叶えることは大層難しい物である。平和共存・共存共栄。言葉は美しく、簡単に言えるが、現実は厳しい。しかし美しくとも厳しい言葉を、机上の空論と切り捨てるわけにはいかない。言葉に虚しさを残し続けてはいけないと思う。

中国の言葉に、「先人木を植え、後人その下で涼む」という言葉があるらしい。訪中時に 感じた中国人の温かい歓迎のもてなしと、日本に親しみを持つ学生との交流から、自分はい ま、木の下で涼んでいる最中なのだと感じた。もし、先人の植えた木を枯らすことなく、枝 を伸ばす手伝いができたらと思うと。私の中国への関心は深まるばかりである。

◆私は 2018 年 8 月 26 日から 9 月 2 日にかけて日中友好大学生訪中団の一員として北京・杭州・上海の 3 都市を訪れました。私は同年 2 月の半ばから 1 カ月間上海にある復旦大学に通っていたことがあり、上海の食事や街並みそして人々の様子についていくらかの知識を有していました。しかし北京と杭州は訪れたことがなかったので、どのような食文化に触れる事ができるだろうか、どのような風景が広がっているのだろうか、そしてどんな人々に出会えるだろうかとても楽しみにしていました。

今回の訪中の大きな目的は両国大学生交流を前提とした北京大学で行われる日中平和友好条約締結 40 周年記念「千人交流大会」に出席することでした。式典では安倍総理大臣と李克強首相の代読があり、お互い「日中友好関係は 2012 年に起こった尖閣諸島問題を皮切りに続いた冷え込んだ関係から完全に脱却し今は正常な関係に戻った」ということを宣言していました。また、日本大学生代表のあいさつでは「日中関係は切っても切れない関係。いわば家族のような絆関係である。」と述べていました。日中平和友好条約が締結される前はLT 貿易が民間レベルで行われており、この友好協会も民間の団体です。今回の両国大学生交流は原点回帰という意味も込められているのではないかと私は感じました。

2012年当時尖閣諸島問題について連日メディアで報道されており、15歳だった私は特に深い歴史を知ること無くなんとなくメディアの言葉に流され「中国は中華思想の考えが残っていて自分勝手だな。中国人いやだな。」という風に考えてしまいました。しかし大学に進学し中国語を第二外国語として勉強し始め考え方が変わりました。はじめは当時母親が新宿に勤務しており、中国人観光客が増えていることを教えてくれました。そこから「これから日本で生活していく上で中国人と接する機会が増えるだろうから実用的な中国語を勉強してみよう」という気持ちで中国語を勉強し始めました。中国語の授業を通じて中国の歴史を学び、中国人留学生と交流する機会が増えたことで中学生のころ抱いていた中国への嫌悪感は払拭されました。

実際に今回の訪中で感じたことは、交流&通訳で3日間ともに行動をしてくれた北京第二外国語大学の学生たちがとても素直で真っ直ぐであるということでした。また、浙江大学

の学生とも交流し日本語を勉強し始めるきっかけがアニメが好きだからと答える学生が多いことが分かりました。中国の学生が中国の大学に入学するには日本では考えられない勉強量をこなし合格しなければなりません。これを通過した上で日本語を勉強し日本人の通訳として日中友好の懸け橋となっているのです。今回交流した学生は「好き」なことに対する愛の注ぎ方を知っておりそれを武器に自己実現する力までも知っています。とてもかっこいいと思いました。私も懸け橋の一員となるために今の生活をぬくぬくとし続けてはいけないと気を引き締めるいい刺激となりました。こういった双方の刺激が両国の交流の第一歩になるのではないでしょうか。私は中国人の学生とwechatで連絡先を交換し連絡を取っています。会話を上手にしたいと伝えたら今度テレビ電話をしよう!と言ってくれました。彼女はきっと日本語で文字を打てるにもかかわらず私のために中国語で文章を送ってくれます。こういった気遣いにとても感謝と尊敬の気持ちを抱きます。

最後に、私はこの訪中を終えて平和とは何か考えました。私は平和とは「仲良くすること」なのではないかと考えました。ここでいう「仲良く」とは単にずっとおしゃべりをしていていられるような友達という意味ではありません。互いに良い刺激を与えあって双方が高めあういい関係のことではないかと考えました。これから日本と中国は同じアジア諸国の一員としてアジア発展のために協力し合いつつ互いに高めあう関係築いていかなければなりません。そこには長期的な視点が不可欠であるため若い我々の力が必要となります。両国の発展のためにはまず両国のコミュニケーションレベルの交流が不可欠であります。今回訪中しこの大学生交流がその一歩となったのではないでしょうか。私は今後社会に出て日本と中国の懸け橋になれる人材になりたいとこの訪中を経て強く願うようになりました。

◆つい先日、日中友好大学生訪中団の一員として中国側からの文字通りの熱烈な歓迎を受けつつ約7日間に渡る活動を終え、上海国際空港より日本へ帰国した。将来日本とアジアをビジネスで繋ぐキャリアを目標とする私にとってアジア最大の経済大国である中国を肌で感じたことが今後の人生に生きる大きな経験となったことは言うまでもない。さて、私は現在大学で近現代中国史を中心にアジア史を専攻している。従って、今回北京や上海といった大都市を周遊する中で、大学で培った知識を基に中国社会、政治、文化といった側面にも一考したので以下に記したい。第一に、北京大学、浙江大学の現地の生徒と交流をする中で、中国は若年層が社会に対して一定の発言権を持った「若者主導型社会」であると感じた。例として、我々が滞在2日目に訪れた創業公社にみられるように、政府をはじめとする公的機関が若者の企業を支援する仕組みがある点などが挙げられる。中国がこういった社会となったことについて、77年に終結した文化大革命が大きく起因しているのではないだろうか。約10年に渡った動乱の中で、中国の50・60代の多数が教育を受けることができず、解放後、教育を受けた若年層が社会の担い手にならざるを得なかったという背景があったと予測できるからである。この潮流が現在の中国社会にも受け継がれているということができるだろう。若者が社会の中心に立つというのは近年のグローバル

社会において極めて重要な要素だ。というのも、近年のIT革命以降、社会の変化の速度が急激に上がり、そのすさまじい速さの社会変化への適応能力が求められる時代になったからである。従って、現代においては「変化」に、より寛容で柔軟な思考を持った若い層が発言力を持った社会の実現が求められている。現在の中国社会をみると、もはや都市部では人々は財布を持たず、家を一歩も出ずにアリババで買い物を済ませる。言い換えれば、中国社会はすさまじい速さの変化に適応し、この「テクノロジーと共存共生した社会」を作り上げた。ここまでテクノロジーを社会に自然に浸透させた国は世界的にみても中国以外に例はなく、これを実現した大きな要因は、やはり、中国社会が柔軟で変化への強い適応能力を持った若年層が社会をリードする「若者主導型社会」であったと考えられる。

また、日中の若者は、両国の友好関係においても極めて重要な存在である。滞在3日目 に北京大学で行われた中日大学生千人交流大会にて、慶応義塾大学の長谷山彰塾長がおっ しゃったように「民は官を為す」という視点からみれば、友好な日中関係の担い手は両政 府ではなく、あくまでも私たち「民間」であるからである。民間の交流は経済面での交わ りだけでなく、今回の訪中団で私たちが経験したような個人レベルでの交流、また留学を はじめとする大学を通した学術的な交流など多岐に渡る。しかしながら、私を含め現代を 生きる両国の若者は、古来から「多くを語り合ってきた隣人」を知らなすぎる部分があ る。メディアや一部の教育で得る情報はときに感情的あるいは直情的で本質を見失ってし まうことも多い。互いが互いを実際にみて、認め合い、心の底から語り合ったときにはじ めて真の日中友好がなされるのである。先の戦争を経て、締結された日中平和友好条約の さらにあとに生まれた若い世代がより柔軟な思考を持ってこれからのさらに発展した両国 の友好関係を築き上げていくことができれば、その力はやがて官をも動かしていくだろ う。これまで長らく日中友好に努めた両国の先人に必ずや報いて、より良き関係性を作っ ていくのが私たち「これからの世代」の責務であると今回の訪中を経て強く感じた。最後 に、今回訪中団の一員として参加する貴重な機会を与えてくださった日中友好協会、中国 側の受け入れ先である北京市人民対外友好協会、並びに関連したすべての関係者の皆様へ の感謝を述べ結びとする。

◆「中国」―この言葉を聞いてまず頭に浮かぶことが、今回の訪中の前後で劇的に変化しました。私は訪中前、中国に対してあまり良い印象を抱いていませんでした。ニュースで中国の話題が取り上げられる時は大抵、PM2.5 といった大気汚染問題や偽物(ブランド品やキャラクター等)に関するものです。また、中国人に対しての印象も同様で、順番を待てずに横入りするなどマナーが悪いという印象が強かったです。

しかし、今回の訪中を通じてその印象が大きく変わりました。まず、最も驚いたのが、想像以上に中国の空気がきれいだったことです。マスクを着けていなくても普通に生活をすることができたことに驚きました。また、中国人がきちんと列に並んでいたり、若者が他者

を気遣っていたり、さらには道に落ちているごみを拾っている学生もいるなど、訪中前の印象とは大きく異なっていました。このように、実際に「自分で」「行って」「見て」初めて分かることが多いということをまさに実感しました。

次に、今回の訪中で特に心に残った中国の学生との交流について述べたいと思います。交 流では主に日本語と英語を用いましたが、どちらのレベルも非常に高いことに驚きました。 特に英語のレベルが高く、それについて彼らに聞いたところ、小学校から本格的に勉強し始 めるそうで、日本人は「文法は正しいけれどもスピーキングがあまり得意ではない」と日本 の英語教育の弱点を指摘されました。私は大学で中国語を履修していたため、「これは何で すか?」と中国語で聞いてみたところ、当然のことながら中国語で答えが返ってきましたが、 簡単な会話程度しかできない私はその答えが全く理解できずに非常に恥ずかしい思いをし ました。結局、英語で説明をしてくれましたが、まるでネイティヴスピーカーのように速く 流暢に話していて、私もあのように話せるようになりたいと思いました。彼らの語学力を見 て私が感じたのは、彼らにとって語学を勉強するということは、「きちんと使いこなせるよ うになるまで徹底的に勉強する」ということで、日本の大学のように単位のために勉強した り、資格のためだけに勉強したりということではないということです。コミュニケーション をとるために最低限必要なのは言語であり、相手が自分の国の言葉を話せれば、それほど嬉 しいものはありません。今回のケースでは、日本語で話しかけてくれたり、日本語の歌を歌 ってくれたりしましたが、異国の地で馴染みある言葉を聞くことほど安心できるものはあ りません。ここで私が中国語をもっと話すことができていれば、より距離は縮まったのだろ うと後悔しました。こういったことから、相手と自分の距離が一気に縮まり、コミュニケー ションが円滑に進むようになるのだと今回身をもって実感しました。

今回の訪中で、私は自分の英語力も中国語力もまだまだ足りず今後ますます勉強していかなければならないと切に実感しました。特に語学を使いこなしている中国の学生の生の姿を見て交流することができたということは、私にとって語学を勉強している今だからこそ響くかけがえのない機会でした。今後はより中国語と英語の勉強に精進しどちらの言語も操れるようになった上で、大学生のうちにまた訪中して、現地の学生とコミュニケーションをとってみたいと思います。さらには、大学生のうちだけでなく就職した後も中国語を仕事やプライベートなど何らかの形で生かしていきたいと思います。

◆自分は今回の訪中を終えて思い至ることがたくさんある。それは初めての海外渡航という点での新しい発見といった身近なことや実際に中国の大学生とコミュニケーションを図った上での感想、今後の日中関係について考えたことなどである。そしてその中でも一番深く考えたことというのは、自分が目の当たりにした現状を鑑みての今後の両国の在り方や付き合い方でありこのような考察を中心に振り返っていきたい。

今回の訪中において自分が現在の中国の特徴として一番印象深く感じた点は成長や未来 への投資といったことを重要視している点である。二日目に参観した北京創業公社を象徴

として中国では次の世代を担う若者が注目されて強力なバックアップを受け、社会の中心 になっていく傾向が強いと感じた。実際に北京大学で交流した中国の学生たちもその多く が各々確固たる強い意志を抱き自覚を持って日々の大学生活を送っているように思えた。 そして、このような中国の特徴は今の日本が参考にすべきものであると自分は考える。今 の日本では比較的保守的な年配の世代が社会の中心であり、経済の停滞も相まって進歩と いうものが軽んじられている気がする。よって日本社会の現状を考えると成長を重視する 中国のスタイルには学ぶべきところが多いと思うのだ。しかし、こういった側面の一方で 中国国内では切り捨てられた人びとも多数存在していると感じた。それは自分が目の当た りにした限りでは、道に横たわっているホームレスや物乞いをしてくる老人などであり、 将来を期待され支援を受ける人びととは対照的に社会から見放された孤立無援の存在であ る。自分はこのような差異化の現象は今の中国における市場主義が先鋭化しすぎて、過度 な競争原理が生まれているからなのではないかと思った。そして中華人民共和国という名 の共産主義の国において平等が失われていくという矛盾の現れの様にも思ったが、政治学 的に考えると経済の急速な発展における諸側面という捉え方もできるだろう。以上のよう に成長や進歩という観点から中国と日本を考えて比較したが、経済を中心に考えるとこれ は単に成長途中の国と成熟した国という風に捉えられるかもしれない。では、これらを踏 まえた上でこれから先日本と中国はどのように関わっていけばよいのであろうか。安全保 障などハイポリティックスの分野ではアメリカの存在という大きな課題や障壁があり、深 い議論が必要であると思うが、ローポリティックスの分野においては一定の結論が導き出 せるであろう。それは殊に経済においては、成長途中の中国と成熟した日本がお互いに進 歩や安定といった要素を吸収しあい、その上で二国間がまとまって PDCA サイクルのよう に継続的に改善し発展していけば良いという考えである。

今回の訪中はとても実りの多いものになったと思う。人生で初めて外国に行くという機会であった中で初めて外国の文化に触れ、その上外国の友人を持てたという意味でも非常に大きな収穫であった。また中国という隣国であり尚且つ成長が著しい国に実際に訪れることによって前述のように考える機会が得られたし、自分もこれからの日本及び国際社会を担う者としての自覚を持つように意識していこうと思った。

◆今回の訪中はたくさんの同年代の中国の若者と交流できるという点で以前から非常に楽 しみにしていた。日本にいても中国からの留学生と交流はできるが、今回の交流は環境が 変わり周りも皆中国人という中で行われ、そこで新たに感じることがたくさんあった。

ただ一つ先に述べておきたいことは、訪中前と後で私は寧ろ訪中後の方が、これからの中国との付き合い方、中国人とのかかわり方を考える上での難しさを感じるようになったということだ。

訪中前の1年半、大学で中国語を専攻として学び、簡単な会話では不自由することは少なくなった。今回も、何を言っているのか全然わからないとか、言いたいことを全く伝え

られないということはなかった。つまり学生同士では、単純に言語の面において一応ではあるが、意思疎通ができる段階まで来たということで、それに関しては純粋に嬉しかった。もちろん、非常に理解力が高い人達との交流であったからという要因もあるが、自分の中国語の向上を実感できたことは自信にもなり今後の学習への意欲もさらに強くなった。

交流の際中国側の学生の同時通訳はレベルが高く驚いた。すごいと思うと同時に日中同時通訳の難しさを再度痛感した。和訳する時、中国語特有の表現で日本語にはそれに対応する表現がない場合、日本人にそれを説明するのは難しい。それをいかに分かりやすく、また意訳しすぎないようにするかが通訳の難しさだと思う。それを瞬時に行うのだから、中国の学生たちは本当にすごいと尊敬した。

また、通訳の仕事は単純に言語を変換することではなく、相手の国の言葉の表現方法 や、文化までをも理解して初めてできるものだと改めて思った。

今後もし私にもそのようなことをする機会があっても困らないように、今は日本語の難しい表現を学んだり、もっと中国のことを知るべきだと感じている。特に私は、日中台のこれまでの歴史における関係性について詳しく学びたいと思っている。二国同士の関係性でさえ複雑で理解するのが難しそうに思うが、これからたくさんの文献を見たり、調べたりして学生のうちに今より少しでも理解を深めたい。歴史は過去に実際起こったことで変わることのない事実だから、自分自身がその事実に向き合い、学んだうえで両者に誤解があればそれをお互い解いていければと思う。

今回の訪中で多くの中国の学生と話したりすることで、彼らは将来どんな人になり、私自身は将来どうなりたいのだろうと考える大きなきっかけになった。私の場合、今現在これといって就きたいと思える仕事はないし、これからまだまだ考える時間が必要だ。ただ日中関係に何らかの形でずっと関わり続けたいとは思う。せっかく中国語を勉強しているのだからきっと何かの役には立てるだろう。中国には日本のアニメや俳優、歌手に興味のある学生で日本語を学んでいる人もいるし、親世代以上の年代の人たちの時代よりか、だいぶ中国と日本は近くなってきていて、小さな問題はたくさんあるかもしれないけれど、良好な関係になりつつあると思う。中国の学生が日本の今の文化に興味をもって見ているように中国の、発展していたり良い部分を日本の学生で、中国語を学んでいない人でも知る機会が増えればもっと分かり合える部分が多くなると思う。中国を見てきた身としてまずは周りの友人に発信していけたらと思う。

私が生きている内に、日中関係が今よりももっと良くなっていることを実感できて、両 国の国民同士が互いに持つ印象を少しずつでも良くしていくことが、初めての訪中を終え た今、私が最も実現したいと思う目標である。

◆日中平和友好条約締結 40 周年に伴い友好協会分団の団員として、さらに大学単位で派遣 していただいたため大学の代表として、責任感と身が引き締まる思いで中国への渡航を心 待ちにしていました。また、大学で土木工学を専攻しているため、今回の訪中において「中国の土木構造物や都市計画、環境問題について知見を広げる」という目標を掲げていました。実は渡航前に一つ自分の中で決めていた心づもりがあります。それは「中国について敢えて事前に予習をしないこと」です。少し失礼ではあるかもしれませんが、日本で情報を得る際、自分で取捨選択をするにしても少なからず何かしらのバイアスがかかると思ったため、良かれ悪しかれ先入観を持たないようにし現地で見聞したものに対して直接ありのままにリアクションすることで、ほんの些細で常識的なことにも深く関心が持てるようにしました。その効果は早速ありました。北京首都国際空港に到着し中国での最初の食事をするために食事会場へ向かう際、バスの窓を通して飛び込んでくる光景に目を奪われました。信号が変わるまでの秒数をデジタル数字で表示した信号機、右側通行かつ4車線は当たり前と言わんばかりの道路の広さ、それなのに渋滞が起きている実情。大学で交通工学を学んでいる身として、日本とは異なる交通事情にとても興味を惹かれました。後に日本に帰国してから左側通行は世界でも少数派であることを知り、日本はある種特殊であることに気づかされました。また、日本でも問題視されているPM2.5について、私自身北京の空は"メディアを

通して見ていた写真のような汚染された空"が普段から続いていると思っていたため、朝を 迎えた際、日本とあまり変わらない青空が広がっていたことに驚いたとともに、自分の中の"

常識だと思っていたもの"が間違いだったことに気づきとても恥ずかしくなりました。

北京大学・浙江大学での学生間交流や北京第二外国語学院のボランティアの方との交流 では、さらに衝撃を受けるような経験をしました。まず、とても勉強熱心であること。北京 大学の学生さんとお話をしていた際、その方が英語、フランス語、日本語を勉強されている ことを知り、英語が話せるのはもちろん、フランスに1年間留学しており、さらに日本語は たった 2 年間独学だけで私たちと普通に話せるレベルという事実に驚きを禁じえませんで した。また、北京第二外国語学院のボランティアの方から聞いた「中国では、世界共通語と して使われている英語さえもできなければ、一体大学生の間何をしていたの?と思われて しまう」という言葉は一生忘れられないでしょう。英語に苦手意識を持っている私にとって は聞き捨てできず胸に刺さりました。と同時に近隣の国の学生はこんなにも向学心溢れて いるのに私は何をしているのだろう、と考えさせられ、学びに対する意識が変化した瞬間で もありました。これに加えて一つ交流するなかで気になったことがありました。それは「日 本の文化(特にアニメ・マンガ文化)が中国でも人気があること」です。最近では世界中で クールジャパンが広まっており一見気になることなんてないと思われますが、中国のメデ ィア・インターネット事情に引っかかりました。確か Google、Twitter、Instagram など世 界で使用されている主要なサービスには接続できないはずなのになぜ?微博や微信で国外 の情報を得ているのか?等、日本のポップカルチャー情報の取得方法について疑問に思う 部分もありました。 このことも後に調べてみると、 中国以外にもアジアや欧米の中国語圏、 また最近では日本の企業においても使用されているようで、おそらくそこから得ているの だと考えられました。

以上の経験から今回の訪中を経て様々な学びがありました。個人的に 1 番の目標として

いた、中国の土木構造物や都市計画について自分の目で確かめ肌で感じることが出来、最大の収穫となりました。さらに、現地の学生の考え方を知ることで価値観の幅を広げたり、疑問に思ったことや細やかなことに対しても興味を持ち調べてみることで自分なりに考察したりと、自分の視野が明確に拡大している感覚がありました。

日中平和友好条約締結 40 周年という節目に立ち会うことができ、このような機会を与えてくださった日中友好協会の方々にお世話になったと同時に誠に感謝しております。

◆この度、日中平和友好条約締結 40 周年を記念し、大学生の一員として、中国にて過ごした 7 日間は、記憶に色濃く残る、素晴らしい思い出となりました。訪中前と訪中後を比べ、私の中で一番変わったのは、中国という大国との「心の距離」でした。今回の訪中をする前にも、私は何度か中国を訪れたことがありましたが、私にとって中国という国は、日本の隣に位置しているにもかかわらず、どこか「遠い存在」、「離れた国」というイメージがありました。しかし、今回きちんとした目的意識を持ちながら、現地で学び多き日々を過ごせたことで、これらの印象は、私が勝手に思い描いていたイメージに過ぎないことを学びました。今思うと、あれはまさしく「無自覚の先入観」のようなものだったと感じられます。

この「無自覚の先入観」の存在を知るきっかけとなったのは、北京大学や浙江大学での中国人学生と交流した時でした。初めて中国人の同年代の方々と多岐にわたる話をしたことで、直感的に「私たちは、お互いに話せば話すほど分かり合えるはずだ」と思うようになりました。そして中国は、日本と地理的な面のみならず、内面的にも近い存在であることに気づかされました。逆に、今までこの当たり前とも言えることを認識できていなかったのは、やはり「無自覚の先入観」が思考を邪魔していたからだと思います。

また、特に印象的だったのは、浙江大学で同じグループだった日本語学科の邰くんが、「来年、日本に行くからまたみんなで会おう!」と言ってくれて、この絆とご縁が続くよう尽力したいと思いました。このような民間における友好関係が続くことこそ、この訪中の本当の意義なのではないかと考えています。加えて、この訪中団の良さをもう一つ挙げるとすると、団への参加を通して、様々な目標に向かって全力で突き進んでいる中国人・日本人の若者に多く出会えることではないでしょうか。一週間、多様な価値観や考え方、バックグラウンドを有している同世代と語り合うことで、良い刺激を得られ、「自分ももっと頑張らなくては」という気持ちになり、モチベーション獲得に繋がりました。

冒頭、この訪中団での経験は私にとって「素晴らしい思い出」になったと表現しましたが、「思い出」に留めることなく、これを新たなスタート地点と捉え、中国語をもっと理解できるように勉強に力を入れたり、日本で中国文化に触れてみたり、日本に観光でいらっしゃった中国人観光客を街中で助けたりと、自分と中国との間に、何らかの接点を生み出すための「起爆剤」に変えていきたいと思います。そして、この7日間でギュッと縮まった中国と私の「心の距離」、この感覚を大切に、これから物事を図る際のものさしの一つとして活かしていきたいです。

この度の日中友好大学生訪中団は、西堀団長をはじめとする日本中国友好協会の事務局の方々、北京市人民対外友好協会の方々、車内を盛り上げてくれたバスガイドさんたち、日中の架け橋としてボランティアで通訳をして下さった学生の皆さんなど、非常にたくさんの方々に支えられて実現できたものだと感じております。本当にお世話になりました。ありがとうございました!!谢谢大家!我真的很感激!

◆私が今回訪中団に応募した理由の一つは、中国の街並みをみて、そこにどのような格差があるのか知りたいというものだった。というのも、NHKの「地球タクシー(上海編)」という番組をみた時に、「上海の高層ビルが立ち並ぶすぐ裏に古い民家がある」といった街の中の格差に驚いたからだ。大学でもフィールドワークをメインに学んでいるため、中国の街や、そこで生活する人の流れに興味があった。実際には、観光地を巡ることが多かったので、中国の街をくまなく自分の目で探索できたかと言えば微妙だが、空き時間やバスの車窓からの風景から、中国の街のリアルを少しは感じ取れたかと思う。例えば、ワイタンや杭州のホテルの周りはとても都会的で綺麗だったが、そこから通り二、三本を歩くと、古く小さい地元民向けの食べ物屋が並んでいたり、歩道の上に服を干していたりしていた。整備されているところとされていないところの差が、近距離の間にはっきりとあったように思う。

また、中国の交通事情も興味深かった。例えば、レンタル自転車だ。バスのガイドさんによれば、車社会だった中国では渋滞の問題等が深刻になり、ここ数年は自転車使用に政府は力を入れているそうだ。借りる自転車は好きな場所で乗り捨てが可能であった。自転車が散乱して風紀が乱れないのかなとも思ったが、場所によっては自転車置き場もあり、あまり散乱している感じはしなかった。また、北京ではセグウェイに乗っている人も 5 人くらい見て、多様な乗り物があちこちで走っている印象を受けた。しかしその分割り込み、信号無視などの交通マナーが悪く、事故率などが気になった。

もちろん今回の訪中は街や観光地を巡ることよりも、千人交流会や大学訪問等に意義があった。中国の学生と交流して、彼らが日本の文化に興味をもってくれていることが伝わってきた。例えば、中島みゆきや東野圭吾が好きだと言った学生がいた。日本のアニメといった定番ものだけでなく、もっと幅広く日本文化に興味を持ってくれていたことが嬉しかった。やはり互いの文化に興味を持つことから友好関係は始まるのだと実感した。だから相手の文化に敬意を、自分の文化に自信を持つことが大切だと感じた。

大学生千人交流大会は日中平和友好条約締結 40 周年記念式典でもあった。なぜこのような式典が、大学生という若者千人に向けて行われたのか。その意味をきちんと考えなくてはならないと思う。先人たちが努力し、日中の友好関係を築き上げてきたこと、先人がつくったその関係を当たり前だと思ってはならないのである。隣国だからこそ、関係も悪化しやすければ、絆も持ちやすい日中関係。今回の交流のような face to face の対話、関係を個人が築くことで、双方に尊敬、友好の情が芽生える。そしてそれぞれがお互いの文化の違いに気づき、誤解をなくしていくことが大事なのである。未来を担うのは若者なのだから、私た

ち一人一人が、これまでの日中の歴史に敬意を持ち、朋友の輪を少しずつ広げていく、それ が何より大切で、期待されていることなのだと感じた。

◆今回初めて中国を訪れ、自分の中で最も変化したことは中国の若者に対するイメージで ある。日本によく訪れている中国の若者に対するイメージはあまりよくはなかった。都内 でよくみかける彼らに対するイメージは賑やかで周りを気にしないといったものだった。 しかし今回様々な大学の学生と交流するなかで、彼らが私たち日本の学生となんら変わり ないということを認識させられた。出会うすべての学生が日本語を懸命に操り、私たち日 本の学生に寄り添おうとする姿は、なかなか伝わらない中国語を精一杯使い中国の学生と 関わっていこうとする私たちとなんら変わらなかった。しかしやはり中国人だなと思う部 分もなかったわけではない。公共機関でみかける彼らは様々な部分でせっかちだと感じ た。日本人であったら、「どうぞどうぞ」とゆずってしまうような場面で彼らはゆずらず 我先にと進んでいくのである。例えば飛行機で着陸した際に、まだ飛行機が止まらないう ちに中国の方々は荷物を出そうとしキャビンアテンダントの人が止めても五分後にはまた 立ち上がり荷物を勝手に出していた。飛行機からでるときも、日本人は先にどうぞとする ところを突き進んでいっていた。だがそうしないと進めない国なのだなとも感じた。中国 から帰国するころにはなかなか私も遠慮なくつき進めるようになったなと思った。自分を 優先しないとどこにもいけないのである。日本にくる中国の人々が日本人から見て違和感 があるのはしかたのないことだと思う。これから先日本で中国人を見ても、今までのよう な微妙な視線を向けることは、私はないだろう。

人に対するイメージは変化した部分と納得した部分とあったが、街に関しては交通と衛生面に衝撃をうけた。日本では考えられないほどの渋滞、遠慮なく鳴らされるクラクション、ヘルメットなしで静かに近づくバイク、ペーパーがないことが多いトイレ、ふいたペーパーもそのままゴミ箱等、中国で過ごすなかでなかなか慣れることができなかった。建物が想像していたよりも近代的であることにはいい意味で衝撃をうけたが、交通と衛生においては日本の方が進んでいると感じた。食事を残すことが普通であることにも衝撃だった。「もったいない」の精神がしみついている我々日本人から見ると、正直信じられなかった。今後日本の技術や精神を中国に普及することができたらいいのではと思う。

このように中国人や中国に対するイメージは良く変化した部分が多く、それだけでも今回中国にこういった形で訪れることができたのは私の人生において大きな意味があった。しかし私が一番意味を感じたのは、日中の平和と友好のために中国を訪れることができたことにおいてである。私の祖父は戦争のために中国に行った。そして時を経てその孫である私が友好のために中国を訪れた。世の中の正しい位置を感じることができた七日間であった。

◆私は現在2年生で、1年次から第二外国語として中国語を学習している。日本人も漢字を使っているので他の外国語よりも分かりやすいのではないか、というようにあまり深く考えずに選択した言語である。だが中国語の学習は想像していた以上に興味深く、単語一つとってみても日本と中国の共通点と相違点を感じることができた。また中国人の先生のお話を聞いたり、所属しているサークルの中国人留学生の友人と接したりしていくうちにだんだん中国という国そのものにも興味を持つようになっていった。そんな折、この訪中団のお知らせがあり応募することにした。

しかし審査が通り中国に行くことが決まった時、高揚感と同時にかなりの不安も感じた。 身近にいる中国人は親切だが現地にいる中国人はどうなのだろうか、衛生面や治安は日本 より悪いのではないか、など悪いイメージが沸き起こってきた。私自身海外に行くことが初 めてだったので海外そのものに対する恐れもあった。

そのような中での中国での経験はどれも刺激的だったが特に印象に残っているものがいくつかある。

1つ目は北京で夜間に同じ大学の班員とタピオカドリンクを飲みに行った時のことである。正直、タピオカという言葉を聞いたとき多少の不安があった。なぜなら中国のタピオカにゴムが混入していたというニュースを見たことがあったからである。「ゴムだったらどうしよう」などと考えていたが、実際は全然そんなことはなく日本のものと変わらないくらい美味しかった。自分がニュースに影響を受け過ぎていたことを反省した。またドリンクを頼んでいる間、私たちの後ろに並んでいた現地のお客さんが「やれやれ」といった表情をしていたことが印象的であった。大人数の日本人がしばらくの間店を占領していたわけだから当然の反応である。この時申し訳ないと思うのと同時に、彼らから見たら私たちはマナーの悪い外国人旅行客になっているのではないかと心配に思った。よく中国人観光客はマナーが悪いというが、慣れない土地で戸惑っているだけではないか、旅行ということで少し浮かれてしまっているだけではないのか、といった多角的な視点をもって接したいと感じた。

2つ目は現地の学生との交流である。今回の訪中では名門大学を訪問した。日本語を学んでいる学生は流ちょうな日本語を話し、そうでなくても英語が話せるのが当たり前という様子だった。同年代の優秀な学生を目の当たりにして自分も頑張らなければならないと感じた。また、彼らは優秀なだけでなく私たちにとても優しく接してくれた。そもそも日本に興味がなければ日本語を学んだりこのような企画に参加したりしないだろうから当然かもしれないが、彼らは友好的であった。同世代の学生として自然な交流ができたことを嬉しく思う。そして交流の中で日本での出来事が中国でも話題になっていることが分かった。特に、「甲子園の決勝戦で感動した。」という言葉に驚いた。高校での部活動や野球というスポーツが盛んでない中国において日本の高校野球で盛り上がることを不思議に思うと同時に、日本のことを知ってくれていることを嬉しく感じた。

3つ目は北京創業公社に行ったことである。ここでは若者の起業支援などを行っていた。 様々な発明品も展示されており、未来を見据え中国が新しいものを生み出そうとしている 力を強く感じた。日本では中国=パクリといったイメージが先行しているように感じるが、 そのようなイメージを持ち続けていたらあっという間に中国が日本のはるか先をいってしまうのではないかと思われた。

他にもまだまだたくさん印象的な出来事はあったが全てを書くことはできない。今回の訪中では中国の最先端を見ることができた。マイナス部分を見せられる機会はあまりなかったように感じる。しかし中国国内では格差はあるし環境汚染など課題は多数存在している。日本との領土問題も解決していない。だが悪いところだけに目を向けていても事態は好転しないし、プラスの面も知っておかないと知らないうちに日本が世界に取り残されてしまうように思う。実際に接した現地の中国人は優しかったし、中国で様々な経験をしていくうちに訪中前に抱いていたマイナスイメージは消えていった。この6泊7日はとても楽しく中国に対する興味もより深まった。中国語の学習も含め、これからも中国のことを知っていきたい。

◆中国に抱いていたイメージはいくつかありましたが、それは1週間という滞在の期間を 通して大きく変化しました。訪中前に中国に対して私が抱いていたイメージは、急激な経済 発展により、排気ガスの影響で空気が汚れている、自然が少ない、あまり街がきれいでない、 などあまり良い印象ではありませんでした。また中国人に対する印象は、向上心が強い、店 や街でルールを守らない、気が強いなど、こちらもマイナスなイメージが強いものばかりで した。しかし、これらは私が日本のメディアやインターネットから得た情報であって、実際 に私の目で見たものではありません。そのため、「日本のフィルターを通した中国」ではな く、自分の目で実際に「中国」を見て、どんな国なのか自分で考えたいと思ったのが、今回 の訪中団に応募した理由の一つでした。

実際に過ごしてみると、これまで私が抱いていたイメージは、ほんの一例だったのだと思い知らされました。空気が汚れている印象があった北京では、主に移動手段として自転車と電動バイクが使用されており、ガスが大量に排出されている様子はありませんでした。ガス対策として持参したマスクの出番は一度もありませんでした。また、杭州は自然が大変多く、近代的な建物と自然が上手く調和しているという印象を持ちました。やはり広い中国では、様々な都市があるのだと思いました。

しかし全くイメージと正反対だったというわけではありません。日本で伝えられたままだと思う場面もありました。例えば、店や街でルールを守らないという点です。信号が青でも車が止まらなかったり、歩道をバイクが走っていたり、店で並んでいても列を抜かされてしまうことがありました。初めに体験したときはとても違和感があって驚きましたが、中国特有の文化によるものだととらえると、これも異文化体験なのだと考えるようになり、なぜこのような文化が生まれたのかと興味深く思いました。

文化が異なるという点では、中国では生活の中で食事が非常に大きな役割を果たしていると感じました。これは毎日円卓で食事をする機会を頂いて気づいたことなのですが、丸いテーブルであれば一度に全員の顔を眺めることができますし、同じ料理を回して食べるこ

とで共通の話題ができ、会話が弾むような感じがします。大勢で円卓を取り囲み食事をしている中国人の方々も何度か見かけました。食事の時間を商談に使ったり、中国語には「ご飯を食べましたか」というフレーズが一般的な挨拶としてあったりする、と聞いたことがあります。今回の訪中の食事の時間を通して、中国の方がなぜそれほどに食事の時間を大切にするのか、を理解することができました。また、予想もつかないような部分で、日本と中国の違いを体感することもありました。買い物や食事をする際、店員の方たちの様子を見てみると、制服がなく私服で働いていたり、お客さんが来るまでは店員同士で話していたり携帯を見ていたりととても自由に過ごしていました。日本では考えられない光景なので驚きましたが、仕事はきちんとしていたので悪いことではないと思いました。日本では、仕事中多くのことが制限されていますが、中国の様子を見てこれくらい自由に働いてもいいのではないかと考えました。

1週間過ごしてみて、実際に自分の目で中国を見ることができたのに加え日本と比較し、 日本の状態を顧みる機会にもなったと感じました。この1週間は、これからの私の考え方に 必ず影響する経験になったと思います。このような機会を与えてくださった皆様に感謝し たいです。ありがとうございました。

◆今回、北京・杭州・上海の三都市を七日間で訪中し、中国の都市や歴史や中国人大学生 と多く触れ合う機会を頂いた。初めての訪中で様々な驚きや学びがあったが、日中友好の ために特に伝えたいことは二つある。一つ目は、"百聞は一見にしかず"である。インタ ーネットから一瞬で情報を得る事に慣れていた私には、実際に中国まで足を運び、時間を かけて全身を使って得た情報の量の多さとそれに伴うパワーを実感したのは、実に久しぶ りであった。それだけ、自身がいかにマスメディアや噂などの一面的な情報に依存してい るかを実感した。正直、私は訪中する前まで中国に対していい印象は持っていなかった。 急激な経済発展の裏側にある大気汚染や低賃金労働に苦しむ貧困層。また中国人について も、割り込み、著作権の侵害を伴う模倣の数々、謝らない気質など自分勝手で傲慢なイメ ージを持っていた。訪中前に私の頭の中にあったイメージ映像は、街を覆う粉塵や PM2.5 の中で常時マスクを着けて生活する数年前にテレビで見た映像だった。ところが、訪中し てみて私の中国に対する認識は大幅に変わった。特に都市部で印象的だったことは、「現 代と歴史の共存」と「厳重な警備」だった。香港に次ぐ夜景の美しさを誇る上海は洗礼さ れたデザインの高層ビルが多く、北京にある電気街と呼ばれる中関村は IT 系企業が密集 しており、自身の想像の何倍も発展していた中国の産業に驚いた。中でも、ベンチャー企 業に資金調達や場所・備品を貸し出すことで支援する創業公社は、上昇志向が強く想像力 溢れる若者の起業が多い現在の中国の環境ならではの先進的な企業だと感じた。また、北 京で訪れた清朝時代の政治の中心であった紫禁城や、世界遺産の万里の長城は、日本の観 光地と比較しても圧倒的なゴミの少なさとこれらの歴史を守るための厳重な警備が印象的 だった。中国悠久の歴史とアイデンティティを守るための規制と、未来に渡って発展し続けるための自由な想像力を後押しする大規模な支援が、中国の発展の秘訣だと感じた。

第二に、他者及び他国を理解する上で、相手を決して自分のものさしで測らないこと だ。今回の訪中で北京での三日間をサポートしてくれた中国人ボランティアの将さんの存 在が、私の中国人へのイメージを変えただけでなく、従来持っていた異文化理解の考え方 について今一度考えるきっかけを与えた。将さんは日本文学を専攻している北京第二外国 語大学の大学院生で、年が近いこともありすぐに打ち解け、友人となり多くのことを話し た。その中でも、「日本について学んでいく中で、変わっているなと思った日本の文化は ありますか?」という質問に対する将さんの考え方が、私に異文化理解について考え直す きっかけを与えてくれた。この質問に対して将さんは、「変わっていると思ったことはな い。環境も違えば文化も違うから、違うのは当たり前だから。」と教えてくれた。私はそ れまで、異文化理解とは自国と他国の相違点を明確にし、認識することだと考えていた。 しかし、私も将さんも"違うのは当たり前"という考え方は同じだが、根本的に違うとこ ろがあることに気が付いた。私の異文化理解の考え方には、自国を基準とし他国と比較す ることで差異を認識することである。しかし、将さんの異文化理解への考え方は、違うの は当たり前であるから基準という偏見を持たずに、他文化をありのままに受け入れる姿勢 に直結し、そこに好きや嫌いなどの感情は伴わない。自分たちが常識だと過信するからこ そ、他者を評価する姿勢につながり、それが他の国に対する偏見や差別が生まれるという ことに気が付いた。異文化理解の先にあるものは、他者を非難し蹴落とすことでも、自国 の意見を一方的に押し通すことでもない。互いに理解しあうことで、様々な視点から議論 しあい、世の中をより良くするための第一歩が異文化理解なのだと再確認することができ た。

今回の訪中を通して、情報を客観的に捉え、自身の常識を疑うことの重要性を学んだ。 そして、隣国である中国と日本の友好関係には、若い世代への中国の多面的な認知が不可 欠であると感じた。日中関係がより良いものとなり、互いに尊重しあって世の中に貢献で きるように、まずは私が中国で学んだ多くのことを声を大にして拡散していくことで、未 来の日本と中国の朋友のために邁進してきたい。

◆私の訪中する前の中国の印象は、決して良いものではなかった。恐らく私以外にも中国に行ったことのない方たちは、こう思っている方が多いのではないだろうか。中国について報道される内容の多くは、パクリ問題やPM2.5、さらには中国国内で起きた珍事件を面白おかしく報道するものなど、中国に対してネガティブな印象を植え付けるものが多いように感じる。それゆえ日本人の中国に対するイメージは偏り、ネガティブなワードを連想させてしまうようである。よって今回の訪中は、今までメディアを通してしか見ることのできなかった中国を、自分の目で実際に見て感じることができるという点で、非常に意味のある経験だったと言える。

今回の訪中を終えて深く考えるようになったのは、日中両国の関係の在り方である。中国で過ごした1週間、私はより多くの中国人と接し、対話を通して相手を理解することを常に意識しながら過ごしていった。これは、相手国を知るためにはまずはその国の人を知る必要があると思ったからである。その中で特に印象に残っているのは、中国人の2面性とも言える国民性に関する出来事だ。というのも、期間中に出会った中国の学生やバスガイドの方々と、その他一般の中国人とではまるで別国の人かのように思えたからである。関係を持った中国人はみな親切で、おもてなしの心を十分すぎるほど持って私たちに接してくれた一方、街中で出会った見ず知らずの中国人にはやや冷淡さを感じてしまった。「同じ中国人でも、ここまで違うものか」と最初は戸惑い、疑問を抱いていたが、バスガイドの方が自分たちの人間関係の在り方について一言で説明してくれた。

「ひとたび友人となれば家族同然、情熱的に接するが、関係を持たない人は敵のように見なす」

この一言で当初抱いていた疑問が一気に解消され、違和感を覚えていた中国人のいわゆる「ウチ」と「ソト」での態度の違いが理解できたように感じた。それと同時に、今まで自分は中国人の「ソト」の部分だけを見て中国人のイメージを決めつけていたと気づかされた。

日本はおもてなしの国だと世界から称賛されるが、お世話になった北京大学や北京第二 外国語大学の学生たちの方がむしろ日本人以上におもてなし精神を抱いているのではないかと思うほど、私たちのことをあたたかく歓迎してくれた。夕食後にわざわざホテルまで迎えに来ておすすめのお店や観光地を案内してくれるなど、至れり尽くせりの想像以上の対応に、驚きと嬉しさが込み上げた。私たちは、初めて触れる外国の文化や人の特徴について、無意識のうちに自国と比較した上で良し悪しを決めてしまう傾向があるが、文化や国民性などはその国を深く知るための要素の 1 つであり、そもそも甲乙はつけられない。訪中して、実際に直接関わってみないことには実感できなかったことである。

今年で日中平和友好条約締結 40 年周年を迎えたが、日本と中国は 2 千年以上前から文字 のある関係を続けてきた。特に日本は中国からの恩恵を多く受けながら現在の日本語や日本文化を成立させていることから、中国とは切っても切れない関係だと言えるのは明らかだ。この訪中の経験から今後の日中関係の在り方について私たちができることとすれば、今回出会った多くの中国人学生との縁を大切にしてくことである。国と国との大きなレベルの話以前に、人と人とのつながりや信頼関係を築いていくことが、日中友好の第一歩ではないか。そのためには、メディアの報道による一面的な中国に関する報道を鵜呑みにせず、自ら主体的に中国の現実を知ろうと行動に移す人が 1 人でも多くいれば、それがやがて良い日中関係に結びついていくのではないだろうか。

最後に、1週間という短い期間でしたが、中国を代表する三大都市を訪れたこと、現地大学生との交流を含め初の訪中にしては十分すぎるほど濃密で充実した時間となりました。 出国から帰国までのすべてをサポートしてくださった公益社団法人日中友好協会の方々、 天候や私たちの体調を考慮し、最終日まで調整を繰り返してくださった北京市人民対外友 好協会の方々と、同じ日本人大学生として意を決して中国へ訪れた 100 名の仲間たちに感 ◆この訪中は、「差」について考えさせられる旅だった。今回、中国に行くまでこの国に対してあまり良い印象は持っていなかった。私と同じく、中国に良い印象を持っていない人は、良い印象を持っている人よりも確実に多いと思う。これは日々中国に関する大気汚染、貧困問題、パクりといった報道を目にしていれば当然の結果であろうし、これらどれを取っても日本の方が優れている。加えて、訪日中国人観光客の増加に伴い、彼らの非常識を目にする機会が増えたことも、観光地に住んでいる私にとっては中国に対する悪印象の一因になっている。このような一般的な情報や一部の中国人に対する印象により、経済や国としての発展度合などは置いておいて私の中には「日本は中国よりもなんとなく全体的に優れている」という可笑しな考えがあった。しかし、百聞は一見に如かず、今回の訪中では、中国よりも優位であると思っていた日本が逆に中国に大きく差を付けられていることを目の当たりにした。

最も差を感じたのは、漠然としているが純粋にスケールの差だ。人口、街、建物などのスケールが全て日本のそれより大きい。特に印象的だったのは上海のビル群だ。日本の場合、街の一部にビル群があるような感じだが、上海は街全体がビルで構成されているのかと思ってしまうほど高層ビルが乱立していた。上海滞在初日に訪れた上海城市計画展示場では、上海が中国最大の都市に発展していく過程を知ることができ、この旅の中で最も楽しめた場所となった。また、外灘から望むここ数十年で発展してきた上海の夜景はとても美しく、それでいて見ている者にまだまだ続く発展の伸びしろを見せつけるような力強さを感じた。先程、経済や国としての発展度合は置いておいて日本の方がなんとなく優れている、と記したが、もはや中国人のマナーが悪いやら空気が汚いやらと言って下に見ているのはとてつもなく時代遅れな認識なのだろう。

そもそも、中国人は全く感じが悪くない。これは街の人や北京第二外国語大学の学生や 浙江大学の学生と交流したときに感じたことだ。今回交流した学生の方たちは多くが日本 語を専門に学んでいる学生だった。政治的に大変友好的な関係が築けているとは言えない 国の言葉であるし、日本以外では通じない言葉であるにも関わらず日本語を専門に学ぶと いうチョイスは渋すぎるように感じたが、その理由は「日本文化が好き」「関係がよくな いからこそ日本人に中国を紹介したいから」といったものであった。日本は文化の美しさ や慎ましい国民性から外国人から人気がある。しかし、今回の交流の中でその人気や社 会・経済の成熟度合に胡坐をかいていると、中国のような他の発展途上国から現時点で日 本が優れている分野でさえも置き去りにされてしまうという危機感を感じた。

私たちの世代の日本人は、時代の流れの影響で外に目が向きやすくなっていると思う。 その一方で、今まで日本が築き上げてきた文化や社会がなんだかんだ最も優れているという認識もあるだろう。自国に自信を持つことは良いことだと思うが、その自信は他国の粗探しをして得るべきものではなく、他国に行き、よく知り、その上で再確認の意味で持つ べきものであると思う。この点において、今回の訪中は互いの国の優れている部分を再確認し、埋めるべき差を認識することができた貴重で大変有意義な機会であった。

◆今回の訪中に3つの不安がありました。1つは、語学です。私は、大学の第二外国語で中国語を履修していますが、全然話すことが出来ません。加えてなかなか外国人(非ネイティブスピーカー)と英語でまともに話したこともないので語学に関してとても不安がありました。2つめは、訪中団に参加する同じ大学の方と仲良くできるかです。参加した人たちは学年学部もさまざまで、人見知りをする私にとって心配事の一つでした。3つめは日本との環境の違いです。やはり中国に限らず外国では水道水は飲んではいけないし、中国というとPM2.5の大気汚染があるということで心配していました。

千人交流会では、語学に不安がありましたが、万里の長城や天安門広場、故宮そして北京大学での交流でお世話になった北京第二外国語大学のボランティアの協力があったことで、互いの思うことをよく伝えられたと思いました。この千人交流会で感じたことは、中国の学生は自分の将来やこうありたいという考えがはっきりと描けていることと、実現のための努力を惜しまないことがとても印象に残りました。また中国の操業公社見学に行った際、この企業は、起業したい若者を支援し、小さな芽をつぶすことなくそれを共に育てていくこと『孵化』させることを目標にしている会社であることを知りました。起業したい若者を支援することは、成功するか失敗するか分からず一見賭けのように感じましたが、まず第一に若者が国・経済の中心であること、その若者を支援することを政府が認めていることを知り、経済発展が著しい中国の特徴を知れました。ここの点が保守的な日本と中国の大きな違いであると感じました。

また二番目の不安である同じ大学での交流は、大学ごとに集合する機会も多く、学年・学部を超えて仲良く交流することが出来ました。特に自由時間では、スーパーに買い物に出歩いたり、部屋に集まってゲームをするなどして絆を深めていきました。

三番目の不安であった環境の違いでは、以前の中国のイメージは、やはり大気汚染で空全体が曇っていて、また街もごみであふれているイメージがありました。それだけでなく、夜に外国人は出歩かない方がいいほど治安が悪いと聞きました。しかし、今回の訪中団の時期が中国で一番天候もよく過ごしやすい季節であり、ほとんど青空が広がっていただけでなく、ホテルに到着してから、門限の23時までの自由時間で、買い物がてらに出歩いたときは、街は電灯のおかげで明るく、人もにぎわっていたので思った以上に治安が悪くなかったことに驚きました。

今回の訪中団で印象に残ったことは、国・風習が別でも、考え方は変わらないことです。 交流で、自分の意見・将来像をはっきりと考えていたことはまだまだ自分には十分に足りて いない要素で見習わなければならない点ですが、日本の音楽・ドラマなどの他愛ない会話を していく中で、中国と日本では何も変わらないことを実感することが出来ました。外国だか らと日本とは違うと考えるのではなく、根本は変わらないことを学べたこの経験を大事に ◆私にとって今回の訪問が初めての中国でした。マスメディアで報道されている中国は日本とかなり生活習慣や価値観がかけ離れているように感じていたので不安を抱いていましたが、空港を出た瞬間からその不安はどんどん和らいでいきました。実際に一週間という短い間、中国という地に身を置くことで、今まで目を向けていなかった中国の良さを知ることができました。百聞は一見に如かずという言葉の通り、自身の目で実際に見、体感し、判断することの重要さを感じました。

自然環境が問題視されている中国ですが、街にゴミが落ちているわけでもなく、空気も北京は少し靄がかかっていましたが、私が当初想像していたよりもきれいでした。訪問地が都市部であったことも原因かもしれませんが、治安もよく、物が盗まれるということもありませんでした。文化差にもほとんど苦しまなかったように思います。

北京、杭州、上海を訪問しましたが、どこも雰囲気や街並みが異なっていました。北京は歴史を感じる古い町並みが多く、交通量がこの3つの都市の中で一番多く感じました。日本に比べると車間距離がとても狭く、最初はひやひやしてしまいました。杭州はかなり清潔感と高級感があり、西湖という湖もあり、自然も豊かでとても素敵な場所でした。上海は高い建物が多く、建設中の建物も多くみられ、経済発展を感じました。

今回の訪中では万里の長城、天安門広場、故宮博物館など他にも様々な観光をさせていただきました。どこもとても趣があり、美しく、雄大なものでした。特に天安門広場はあまりにも広く、自分がいまどこにいるのかを判断するのが難しいほどでした。さらに創業公社という若者の起業支援などを行っている会社の見学もさせていただきました。創業公社では起業家への福利厚生が手厚く、居住スペースまで設けられているそうです。創業公社では若者を孵化した鳥と表現されており、鷹になるまでの成長を支えるという考えを持っているそうです。日本にも取り入れるべき考えだと感じました。

今回の訪中を通し学んだことは、何よりも自分の未熟さです。訪中の期間に歳の近い中国人学生と接する機会が多くあり、様々な意見を交換する機会がありましたが、そんな中で彼らは中国語、日本語、英語と様々な言語を駆使して私たちと意思疎通を図っていました。日本のアニメや俳優を好んでいたり、独学で高度な折り紙の技術を身に着けていたりと日本に対する好印象が会話の端々から伝わってきました。日本語学習に関して話を聞いてみると、学習を始めて二年だという方までいました。彼らは平均して一日約8時間勉強しているそうです。言語力のレベルの差や努力の差、学習への熱意に圧倒されました。中国人学生の勉強への姿勢を見習い、今まで以上に勉学に励みたいと感じました。今後は言語学習に力を入れ、将来は海外に進出している企業に勤めたいと強く思いました。温かく迎えてくださり、「日本に絶対遊びに行きます。会いに行きます。」と言ってくれた中国人学生との出会いに感謝し、これから長く関わっていきたいです。今回の日中友好大学生訪中団に参加できたことを心から嬉しく思います。

◆今回の7日間の訪中を通じて、日中友好の継続には相手国を実際に訪れ、その国が持つ文化や経済の特徴を知るだけでなく抱えている社会問題についても実感することが大切だと思いました。日中友好大学生訪中団の参加を通じて、私は中国を初めて訪れました。一週間の訪中では、世界遺産を訪れ、高層ビルが幾つも並ぶ街並みを見るなど中国の過去と現在に触れることで広大な国土と多様な民族が生み出す文化と経済の規模の大きさだけではなく、その裏にある中国社会の問題を知ることが出来ました。また、現地の学生との交流は本やメディアでは手に入らない貴重な体験となりました。ここでは、その一部ではありますが最も印象に残った、北京での体験を中心にお伝えしたいと思います。

万里の長城を訪れた際には、約2万キロメートル以上にも及ぶという城壁の上をほんの一部分ではありますが、歩くことができました。城壁の上を歩くと言っても、階段でできた道のりは険しく、登るような感覚でした。日本列島の長さは約3千キロメートル、その6倍以上の距離を当時の建設者である多くの国民が始皇帝によって集められ、険しい道を乗り越えながら石を積み上げて、バラバラであった城壁を一つに繋げ完成させたことからも、当時の中国人達が生み出す神秘的な文化の歴史を実感することができました。

同日に訪れた中国の起業家たちを支援する政府運営の創業公社では、様々なベンチャー企業が施設内でブースを借りて画期的な商品やサービスの開発に取り組んでいる姿を見ることができました。また、入口付近には企業が開発した商品の中で賞を受けたものが複数展示されておりました。中には携帯型空気洗浄機という、外出時に持ち歩き周囲の空気の汚染度を表示し身の回りの空気を清浄するという機能を持つ装置もありました。P. M2.5 による大気汚染が問題化されている中国ならではのヒット商品であることが伺えました。

このように中国では、数多くの企業が活躍する社会にも見えましたが、現代では大学を卒業しても企業に就職することが難しくなっている社会となっていることが理由でもあると友好協会の方のお話から伺いました。企業に就職できなかった人たちは市内で清掃員などの職に就き、北京などの首都でも貧富の差は拡大しているそうです。実際に北京を訪れた際には、万里の長城をはじめとする世界遺産や市内の中でも清掃員として働く人々が数多くいました。街中では観光客をターゲットにプラスチックのコップを入れ物に寄付を迫る老人の方にも多く出会いました。清掃員などに従事する彼らの月収は約3千元、日本円にすると5万円にも満たない金額となり、バスガイドの方が話していた北京市内で必要最低限の暮らしをする金額となる3千60元には足りるかどうかの暮らしであることが分かりました。

現代社会では、中国などの隣国についても SNS やネットニュースなどを利用することで、

簡単に相手国の情報を手に入れることが出来ます。しかし現代のネットメディアは、信憑性の薄い情報や自身に関心のある情報を集めやすい欠点を抱えているため、本当の中国の姿を映すことは出来ないと思いました。しかし、実際に中国に訪れ現地の学生とも関わり合うことで一部ではありますが、中国社会の実像を見ることが出来ました。メディアを通じた報道以外にも、今回のような訪中による情報の収集は難しいとは思います。しかし、七日間の中で築いた日中両方の学生たちとの縁を大切にし、情報や意見の交換を絶やさずに、広い視野で中国社会の課題や日中関係についても考え続けることは、日中友好維持につながっていくと感じております。

◆訪中前、私は中国に対してあまり良い印象を持っていなかった。しかし、そのような考えは今回中国を訪問して変化した。特に、北京第二外国語大学の生徒と3日間かかわって実感した。なぜ、日本語を勉強しているのか聞くと彼らは日本の発展している技術を学びたいかだと言っていた。そのために日本語を学んでいることに私はすごく感動した。ニュースで見る中国は日本に対して挑戦的で本当に友好関係になれるのかと疑問に思うほどであったから驚いた。彼らと話していると、言葉の壁はあるけれども今後の日中関係が友好的になる希望の光が見えると思った。私自身、もっと彼らと意見を交換し今後の関係について話したいと思った。そのためには、私も中国語を話せるように勉強しもっと中国について知りたいと思った。

また、中国の創業公社を見学したときに中国の著しい発展を理解することができた。若者を 支援するための会社の枠組みがしっかりしており、日本では見たことのない会社だったの で圧倒された。今までは、他国の技術をまねして発展している国だと思っていた。しかし、 その考え方は間違っていることに気付かされた。国が発展するために様々な仕組みがあっ て若い時代から自分が考えていることを実践できることは素晴らしいことだと思った。 中国の街並みにも感動した。北京では高層ビルが立ち並び、大きな会社がたくさんある一方 で、歴史的な建造物もあり、現代と昔が融合された都市だと思った。国が大きく動いている ことを実感することができた。杭州は、デパートやスーパーと買い物できる店が多く、北京 とは異なり高層ビルが比較的少なく感じた。上海は、西洋風の建造物や、現代的な建造物が たくさんあった。特に印象的だったのは、建物がきらびやかなまでにライトアップされてい ることだ。また、どの街にも人々が住んでいる家も見ることができた。日本では、都心でも 一軒家を目にすることがあるが中国では目にしなかったのでマンションに住んでいる人々 が多いのかなと疑問に思った。今回は 3 つの街を訪れたがどの街にも世界観がありすべて が同じ風景でないことに驚いた。日本に住んでいるだけでは発見できないと思った。 今回訪中して、千人交流や北京第二外国語大学、北京大学、浙江大学の学生の人たちとの交 流という貴重な体験をすることができた。旅行だけでは見ることのできない中国を見るこ とができ、今まで考えていなかった考えを持つことができた。特に、中国の学生は、中国語 と英語を話すことができる点に感動し、私たち日本人の学生は見習わなければならないと

感じた。また、日本がいかにお店やホテルをきれいにしているかも実感できた。私は日本に住んでいるから日本のきれいさに慣れてしまい少しの汚れや臭いも気になってしまうのだと思った。しかし、今後中国やほかの外国に行くためには慣れないといけないと思った。今回の経験を今後どのように生かすかしっかり考え、ただ行っただけにならないようにしたい。中国と日本のお互いの確執を早く取り除きたいと思う。

◆訪中前から中国のアイドルが好きなので中国に対して悪いイメージは持っていなかった のですが、中国について漠然としたイメージしか持っておらず、ほとんど何も知りませんで した。

まず、訪中してみて驚いたことは英語があまり通じなかったことです。注文をしたいのにメニューさえ読むことが出来ず、写真を見てジェスチャーで伝えたり、スマートフォンでメニューの写真をとってそれを店員さんに見せて意思疎通をしました。知っている中国語を言ってみても緊張もあってか上手く通じず言葉の壁を強く感じました。また北京大学の学生と交流したときに日本人の俳優や女優が中国でも人気でドラマも見ていると知り驚きました。日本のアイドルなどが好きでそれがきっかけで日本に興味を持ち、日本語の学習を少しづつ始めたと聞き、アイドルなどの文化からその国について興味や愛着が生まれるのは興味深いと思いました。私も中国人アイドルがきっかけで中国について興味を持ち、好きになったので日本人アイドルがきっかけで日本語学習を頑張っている中国人学生の存在を垣間見ることが出来て、同じ価値観を持っていることを知ることが出来て貴重な経験になりました。日本人と同じような価値観を持っているということを知り、隣国の中国とは今後も深く付き合っていく必要があるし、お互いに関心を持ち、交流することで新たな発見もあるということが分かりました。

北京の日本語専攻の学生の方と一緒にタピオカを飲みにいったり、中国のドラマや日本のアイドルについてなどたくさん話しました。また中国を訪れた時には遊ぶ約束をし、お別れの際には可愛い手鏡をくれました。帰国した今でも微信で連絡を取り合っており、友人が出来ました。中国がネット決済メインだということは知っていましたが、宿泊したホテルの近くのフードコートの一部の店ではネットで注文をしてそのまま支払いをするという仕組みになっていて日本より進んでいるなと感じました。現金支払いが多い日本とは全く異なり、ネット支払いでは偽札も防げるし会計も早く出来るのでとても便利な仕組みだなと思いました。中国と日本のタピオカを飲み比べてみて、値段も量も中国の方が安くて多く、またそのような店舗が多いなと思いました。また、信号で車やバイクが赤でも右折してくるので横断するタイミングが分からず、慣れるまでに時間がかかりました。今回訪中した三都市はそれぞれ異なる雰囲気があり、大学の敷地が広くて大学内でレンタル自転車が借りられるということに驚かされました。

今回の訪中を通して中国語をさらに勉強して、注文や中国人の友達と通訳なしで話せる ようになりたいと思いました。中国ドラマや映画またアイドルなどの文化が日本にもっと 入ってくるようになれば、中国に対する興味を持つ日本人も増えてくると思います。今後は 今回の訪中を通して学んだことをいかし、中国のドラマや映画などの良さをまずは知って もらい、それがきっかけで中国に対する意識が変わる人が増えるようにより良い情報を発 信していきたいと思っています。

◆私は今回はじめて中国を訪れた。7日間の訪中は私の中国に対するイメージを大きく変えた。この訪中は私の人生において間違いなく有意義な経験であった。

ほとんどの日本人は、中国に対してどちらかといえばネガティブな印象を抱いている人が多い。テレビや新聞などのメディアで、日中の政治的関係が思わしくないことや、中国人の非常識なマナー違反、PM2.5などの大気汚染や冷凍食品の残留農薬問題などが報道され、とても良いイメージを持つことは難しい状況である。私自身、実際に中国に行く前までは、「中国って空気が悪そうだな」「日本人のこと嫌ってそうだな」と思っていた。

はじめての訪中を終えた正直な感想を述べれば、中国はまだまだ発展途中な国という印象を受けた。今回訪れた、北京・杭州・上海は早朝から夜まで活気にあふれていた。道路にはシェア自転車や自動車が行き交い、軽食やや出店は地元の人や観光客で賑わい、夜にはライトアップされた街が美しく、カップルや家族連れの人たちで繁盛していた。また、スタートアップ企業を支援する会社の見学では、たくさんのスタートアップ企業の開発品や新製品を見させていただき、現代の中国の発展を学んだ。話題になった3Dプリンターも展示されていて非常に興味を持った。これからも益々著しく発展していきそうだと思った。

しかし、そういった先進国的な面は大都市や一部の富裕層に限られているのではないかと考える。前述した科学技術の発展、また、街中の買い物ではWeChat payが主流で、その点では日本は今でも現金社会なので日本よりも先進的だと思った。一方で、北京などの大都市から離れた田舎のまちや多数の一般人は、先進国中国という私たちが抱いている想像とは全くかけ離れた生活を送っているのではないかと思う。富裕層と貧困層の格差問題はやはり大きな問題となっているのだろう。

滞在中にたくさんの歴史的建造物の見学も行った。有名な天安門広場や紫禁城、故宮の見学をして、中国史マニアの私は歴史がよみがえるようで興奮が収まらなかった。

科学技術やIT系の進歩が進む一方で、こういった歴史的建造物・事物の風情も感じることが出来るのは、とても素晴らしい国だと思った。

また、北京大学や第二外国語大学、浙江大学の学生との交流は、私にとって大変刺激的なものだった。彼らは、日本語専攻の学生で流暢な日本語で積極的に話しかけてくれた。交流した学生全員が、日本を訪れたことがあると言っていて、日本人として嬉しい気持ちになった。日本が好きで、日本のことをもっと知りたいと私たちに色々な質問をしてきた。日本の俳優やテレビ番組の話もして、まさか中国の学生と日本の好きな俳優について話せると思ってもいなかったので、驚きつつも、会話が新鮮でとても楽しかった。彼らが熱心に学業に

取り組んでいる姿勢に、私ももっと頑張らなければと思わされた。最後にはWeChat の交換もして、今でもやり取りをしている現地の学生とは大変親しくなることができ、今度日本を訪れるときには私が案内してあげる約束もした。同い年くらいの中国の学生が、日本についてどういう風に思っているのかを実際に聞き、中国人の友達ができたことは私にとって大きな財産となり、自慢になった。

7日間の訪中を振り返って、私は、まずは中国に行ってみて本当に良かったと思う。今回 の訪中は報道などを鵜呑みにするのではなく、自分自身で体験することの重要性を一番思 い知った経験となった。日中双方の国民全員が訪中、訪日することはかなわないので、私た ちがお互いの国に歩み寄り、日中友好の懸け橋になるべきだと感じた。今回出会った日本や 中国の学生とのつながりを大切にし、この経験を今後の人生に生かせるようにしたい。

◆この訪中に行く以前の私にとって中国とは、日本に地理的には一番近いようで心理的に 遠い国という印象であった。これは学校教育やメディアの情報に無意識に左右され、歴史的 な観点から私の中で中国に対しネガティブなイメージが構築されてしまっていたものと考えられる。しかしながら、今回の訪中を終え私の中のその様なイメージは払拭された。それ には以下の三点の理由が関わっている。

一つ目は、北京大学の学生や外国語大学の日本語専攻の学生、浙江大学の学生という若者 同士での交流だ。交流の中では、中国の伝統、結婚観、文学、大学の制度、食べ物など多様 な話をした。どの学生も日本について強く関心を抱いていると同時に、日本に関して私が想 像していた以上に知っていることが多く、感銘を受けた。そしてどの学生も精神誠意、私た ち訪中団を歓迎してくださった。中国の若者との交流は、中国人だからといって他の外国の 方々と何ら変わらないという当たり前のことを私に気付かせてくれた。それと同時に、彼ら と同世代の日本人の中で、彼らと同じように中国について関心を持ち、意欲的に学ぼうとす る人はもっと少ないのではないかという疑問を、私は抱かずにはいられなかった。

二つ目は、今回の訪中で出会った中国の方々の印象だ。中国の方々は、非常に親切でフレンドリーな方々が多かった。バスガイドの方は、どんな質問にでも誠意をもって答えてくださった。ある中国人は、道に迷っていて言葉が通じない私と友人らを帰り道中であったにも関わらず、親切に案内してくださった。空港では、ただ隣に座っていただけの私に話しかけてくださった方もいた。コンビニエンスストアの店員さんは、練習した未熟な中国語を披露すると、頼んでいないのにお勧めのお菓子を教えてくださったり値下げをしてくださったりした。出国検査官でさえ、背が低くカメラに映らず一生懸命背伸びした私を、笑顔で手を振って優しく見送り出してくれた。この様に中国では、東京ではあまり感じることのできないような人の温かみを感じることができた。この様な経験は、私が抱いていた中国人のイメージとはかけ離れていた真の中国人の姿を私に客観的に見させてくれた。

三つ目は 、中国政府がどれほどこの訪中団に尽力してくださったかだ。この七日間は、 中国という国を知り、感じ、考える上で非常に有意義なものであった。中国政府がいかに日 中平和友好条約締結 40 周年という節目を重視し、日本との友好的な関係を維持していくための誠実な姿勢を肌に感じることができた。中国では、この日中平和友好条約締結 40 周年を、千人交流会という形にし、さらに生放送し国全土を挙げてお祝いしていた。対して、日本ではどれくらいの人がその 40 周年という事実を知っているのか甚だ疑問だ。帰国後に、日本のメディアが中国での盛大な千人交流会について述べているか独自で調べた。しかし、中国のメディアほど大々的に取り上げているものは少なく、日本と中国における日中友好のための温度差を感じた。

訪中後の私には、荘厳な中国の建物と温かい中国人の印象だけが強く残った。この訪中の中で、私の心に二人の方の言葉が残っている。一つは、程永華駐日大使の「客観的にみられる人になってください」というお言葉だ。もう一つは、北京のガイドをしてくださった左超さんの「日本と中国の友好を深めるには、もっと人々の往来が必要」というお言葉だ。この二つの言葉は、今後日本と中国が関わっていく上で重要な点となると私は考える。日本と中国は歴史的な理由でネガティブなイメージをお互いに持ちやすいはずだ。だからこそ、百聞は一見に如かずという言葉があるように、日中間で人々が継続的に往来し、自己の目で客観的にお互いの国を見て正しい情報を発信していく必要があるのではないだろうか。私も微力ながら、客観的に見た中国を伝える人々の一人として居続けようと思った。

最後に、このような素晴らしい機会をくださった日中友好協会、北京市人民対外友好協会、 並びに関係者の方々に心から感謝申し上げます。

◆異文化を知り受け入れること。これが大切だと感じました。

私にとって始めての海外は今回の中国でした。日本から出ること、異国に行き異文化に触れること、何もかもが初めてだった北京、杭州、上海での1週間は毎日多くの学びがありました。

私の中の今回の訪中の目的は、中国の文化を知ること、中国・中国人について実際に目で見て知ることでした。

訪中する前の中国に対するイメージはネガティブなものばかりでした。PM2.5 や黄砂で空気は汚い。中国人は自分勝手で、いつも怒っているようだ。偽物の商品ばかりだ。他の国の真似をしたキャラクターが多い。また、日本に来る観光客が多く爆買いすることから中国人は日本が好きだ。これらは本当に自分勝手な偏見だったと訪中した今思います。

北京空港について最初に感じたことは、空港がとにかく大きいことです。綺麗で利用者が多いと感じました。一歩外に出てみるとやはり空気は汚かったです。日本では異臭を感じることはほとんど無いため驚きました。しかし中国でマスクしている人をほとんど見かけません。またガイドさんは空気がどんどん綺麗になっていると仰っていました。私も空港から出た直後は異臭を感じましたが、バスに乗りレストランで降りた時には違和感がありませんでした。思っていたよりも空気は綺麗でした。

中国文化で最も戸惑ったのはトイレです。紙を流さずにゴミ箱に入れます。そのためト

イレの個室は異臭が漂います。また個室に紙が設置されていないことのほうが多いです。 しかしこの文化も1週間もすれば体に染み付くもので、日本に帰ってからはトイレに紙を 流していいのか一瞬の戸惑いがありました。トイレの文化は中国のものを好きになること は出来ないと思うけれど、こういう文化もあるのだと認識することで改めて日本のトイレ の清潔さが誇らしくなりました。

そして中国人は怖い人ばかりではないと学生との交流で知ることが出来ました。直接話して知ったことは、中国人は日本人に対してネガティブな印象を抱いていることです。日本の品質や環境については良いイメージを持っていたけれど、日本人に対しては真面目で硬くて友達になれなそうと考えていました。勝手に中国人は日本人のことが好きだと考えていたのがとても恥ずかしく思いました。また中国人は自分勝手でいつも怒っていそうと考えていましたが、私たちのことを考えてもてなしてくれたりたくさんのことを話してくれたりしました。直接話すことで、お互いに対するイメージを良いものに変えることが出来ました。

この訪中で最も感動したことは歓迎会です。中国の方が日本語と中国語で世界に一つだけの花を歌ってくれた時、みんなで朋友を歌った時は歌で世界を繋ぐことが出来ると感じました。また中国人の方が日本人と会って日本の文化や考え方を知ることで、人に感謝するようになったと仰っていたのが印象的でした。異国の文化を知るだけでなくそれを尊敬して受け入れる。そうすることによって考え方は広がり、人としても深みが出ると感じました。

日本には訪中する前の私と同じように中国に対する偏見を持っている人は多いと思います。その偏見をなくすために多くの人に実際に中国に行って自分たちの目で確かめて欲しいですし、私も今回の経験を多くの人に伝えていきたいと考えています。

◆訪中前の私は、中国や中国人に対してかなりのマイナスイメージを持っていた。なぜなら、 日本で見かける中国人観光客の行動を目にして、"気が強く、わがまま"、"マナーが悪い" などマイナスイメージがついていたのと、中国に関して否定的なメディア報道を多く目に していたからである。

そしてまた、中国人も反日感情が強く、日本に対するマイナスイメージを持ち、日本人を嫌っているのだろうと考えていた。

しかし、そんなイメージや考えは、訪中を通して180度変わった。

ニュースで見聞きする中国人や中国、日本で見かける中国人観光客とは違い、訪中で出会った中国人はコミュニケーションが好きな人が多く、打ち解けあえば、誰よりもの他人の事を一番に考えられる優しい、他人思いの方が多いと感じた。

例えば、現地大学生との交流中に Wi-Fi が繋がらず苦戦する私たちに、自分の回線を使わせてくれた。もちろん中にはマナーが悪い人も多くいたが、それ以上に中国で出会った中国人は私たちが困っているのを見たら快く助けてくれた。

しかし、マナーが悪い人は中国に限らず、どこの国にもたくさんいて、国ごとに文化や慣習も違い、自国のやり方では他国ではマナー違反ということもあり、気づかないうちにその国のマナーを守れていないなんて人もたくさんいると思う。中国人の数が多いからそれが目立ってしまっているのではないか、その国の慣習を理解できていないからではないのかと考えるようになった。

良い人もいれば悪い人もいる、という当たり前のことを、今回の訪中で実感することができた。

そして日本、日本人は隣国隣人として付き合っていくにあたり、メディアの情報やそれによる印象だけで判断しないことが大切であると考える。

中国と日本の間に深い歴史があり、国として様々な問題を抱えている事は事実であるし、個々人で色々な意見を持つ程度であれば問題ないと思うが、国としての関係が悪くても、国民同志が悪いイメージを持ち合う必要はないと私は考える。言葉と文化が違うだけであり、根本的にはみんな同じなのだから、互いを知ろうとし、理解し合い、向き合うべきなのではないだろうか。

この 7 日間は私に大きな影響を与えた。物事をイメージだけで判断することが多かった私にとって、ここまで想像と違ったことは初めてだった。中国人は自分の意見をはっきり持っている人が多く、それが、"気が強い"や"わがまま"というイメージが強かった。しかし、同世代の学生との交流を通じて、それは"気が強い"や"わがまま"なのではなく、自分の信念をしっかり持っていて、物怖じしないで行動に移す姿勢を持っているように感じられ、見習うべき点をたくさん見ることができた。

このように、世界には直接見てみなければ、分からない事がたくさんある。他人から与えられた情報を鵜呑みにせず、気になることは積極的に自分で見ていきたい、そんな考えをもてるようになった7日間であった。

■訪中前に考えていたこと

①「豊か」な中国

ロシアに留学中していたとき、現地で裕福な中国人留学生たちと交友があった。現地の日本人留学生は、自分を含め JASSO 等からの奨学金でやりくりをしているのに対し、彼らは親のお金でよいマンションを借り、最新の iphone を何台も持ち、ある友人はペットを飼い、また彼らの輪の中で経済を回していた。その姿に衝撃を受けた私は、訪中前から「中国人のほうが(日本の中流階級より)豊かである」と信じていた。

また、キルギス共和国の国際協力機関でインターンシップをしていた際、現地の専門家が「(開発援助案件の入札競争において)彼ら(中国企業)は中国政府から莫大な補助金をもらっているため、日本側は彼らに価格で勝つことができない」と言ったことがとても印象に残っていた。

②政治体制を支えるもの

・若い世代の愛国心

中国の現在の政治については、大学でも学ぶことが多かったが、ロシアでできた中国人の 友人たちと話して感じたことは、「若い世代が非常に現在の政府に対し好意的である」とい うことであった。その理由はどこにあるのか、また他の中国人の若者はどのように考えてい るのか、今回の訪中を通じ学びたいと思った。

・先進的なサービスと中国政府

また渡航前、度々わたしは中国の先進的なサービス、テクノロジーについてのニュースを 耳にしていた。都市部のキャッシュレス化に大きく貢献したアリペイや、レンタルサイクル、 低価格で高性能なスマートフォンを販売する企業等である。一方で彼らの出現に対し、私は、 彼らの存在はいつか中国の体制を脅かすのではないかと考えていた。ベンチャー精神が根 付くシリコンバレー等ならいざ知らず、急成長する中国のスタートアップに対し、国内では 税金等の政策が追いつかず、不満が生まれるのではないかと考えたからである。

小まとめとして、渡航前の私は中国に対し、「国際政治(それに紐づく経済)の舞台で日本 が勝たなければいけないにも関わらず、勝てていない相手」だと考えていた。

■訪中後考えたこと

では、今回実際に訪問する機会をいただき何を考えたのか、以下に項目を分け述べたいと思う。

豊かさについて

渡航前考えていた中国の豊かさについては、想像を下回ることはなかった。むしろ、想像 以上であった。巨大な空港、乱雑に並ぶレンタルサイクル、発達した交通網、立ち並ぶ高層 ビルは私がイメージした「中国」そのものであった。

・先進的なサービス・テクノロジーについて

さて、渡航前の自分は中国で台頭するテクノロジーのこれから(体制への影響)について 考えを巡らせていたが、実際はどうだっただろうか。

今、はっきり言えるのが、渡航前の考えは完全に間違っていたということである。

これを実感したのが、創業公社での見学であった。設備の整ったオフィスなど、政府から の手厚い補助、スポンサーとなる景気の良い大企業の存在等、中国国内のベンチャー精神は、 中国政府の圧倒的な資本力のもと生み出されていると分かった。

・印象的だったやりとり

中国の人々については、これまで「声が大きい、(良くも悪くも)うるさい」という印象だったが、その印象を変える出来事があった。

紫禁城のセキュリティチェックで並んでいたときのことである。長蛇の列の上雨だった ため、隣の人の傘とぶつかるようにしながら身を小さくしていた。すると前に並んでいた女 性が、隣にいた老人に「あなたの傘がぶつかって濡れてしまう」と文句を言っており、老人も何事か反論していた。私は(喧嘩は嫌だなあ)と思いながら見ていたわけだが、次の瞬間、女性が「じゃあ私の傘に一緒に入りましょう」と言ったことにとても驚いた。大きな一つの傘に入る、見ず知らずの女性と老人を見て、見習いたいコミュニケーションだと感じた。文句を言うことも、何かを相手に差し出すことも両方躊躇いがちな日本人との違いをはっきり感じた瞬間だった。

■中国との今後

今回の訪問を経て、今後この大きな隣人とどのように付き合っていくか、理解を深めることができた。

まず政治経済の面では、「中国に(日本が資本力で)勝てない」ということを前提に、勝とうとするのではなく、いかに協調・差別化をするかに今後の外交や競争のヒントがあるのではないかと考えた。

また、私自身春から ODA(政府開発援助)に関わる開発コンサルタント企業で働くため、同業の中国企業は「競争相手」である。ここでも、前述の「協調・差別化」をキーワードに、中国企業との連携など、開発援助の新たな可能性を実現したいと強く感じた。

■まとめ

本学で中国現代思想を教える茂木敏夫教授が度々口にするフレーズで、印象的なものがある。

「中国を国家の領域で見てはいけない。中国は領域のない、拡大・縮小する一つの『動き』 である」

当初は抽象的な表現で意味を測りかねていたが、訪中を終えた今、少しだけその意味が分かった気がする。日中関係は刻々と変化し、古いステレオタイプでは今の中国の経済、人々を理解することができない。

今回貴重な機会をいただき実現した訪中で、短い時間ではあったが、中国のダイナミズムを肌で感じることができた。またここでできた友人との出会いを大切に、日中友好を担う人材になりたいと強く感じた。

◆はじめに

私は大学で日中関係の変遷について学ぶ授業を取っていました。その授業でこれまでの 日中間で起きた出来事や人々の好感度の移り変わりなどを学び、中国という国に対して興 味を抱くようになりました。そして、隣国でありながらも全貌が明らかでない中国を訪 れ、中国に対する理解を深めたく思い、今回参加しようと考えました。

今回の訪中や中国学生との交流を通して、初めて気づいたことや学んだことはたくさん

あります。そのため、特に印象に残っている、実際の中国の姿と中国の学生について記します。

考えたこと

まず、実際の中国がどのようなものだったのかについて記します。中国は私の想像とは 遥かに異なり、衝撃を受けました。私の想像していた中国とは、「自転車がとても多くイ ンフラ整備が不十分であるもののキャッシュレスが進む国」といういわば謎に満ちた国で した。また、日本に来る中国人観光客のマナーの悪さなどの報道や周囲の意見を受けて、 中国全体としての印象はあまり良くありませんでした。しかし、今回の訪中を通して中国 に対する印象が変化し、以前よりも好印象を持つようになりました。

発展の度合いは予想以上に進んでおり、日本が追いついていない部分も見受けられました。中国では自転車よりも自動車を利用する人の方が多く、近年自動車購入に対して規制を設けている都市もありました。また、自転車と言っても各人が持っているのではなく、ある自転車を多くの人とシェアする自転車レンタルシステムが発達していました。自転車の量がそれほど多くなかったものの、その分自動車の利用率が高かったために交通量が多かったと言えます。しかし、その交通量に反して信号機や横断歩道などが少なく、まだまだ交通インフラを拡充する必要性を感じました。また、キャッシュレスという点においては、クレジットカード決済よりもスマートフォン決済の方が主流であり、海外のクレジットカードが利用できない店が多いことに驚きました。海外のクレジットカードは手数料が高いために導入されづらいとのことでしたが、中国の発展が進み観光業にも尽力するようになったらこのシステムも変化するように感じました。

次に中国の学生との交流を通して気づいたことをまとめます。中国の学生は皆真面目でとても勉強熱心のように感じました。勉強を優先するためにアルバイトをしている学生も少ないことが分かりました。日本の学生は、社会経験を積むとともにお金を貯める目的でアルバイトに時間を割きがちですが、中国の学生のように勉強を優先する姿勢も必要だと感じました。また、中国の学生は日本に対して興味や好印象を抱いている人が多く、予想以上に日本を身近な国として捉えていることに驚きました。彼らはこれまでの日中関係の歴史よりも「現在の」日本の姿を見てくれているように思いました。

おわりに

今回の訪中を通して、想像や理論でモノを語るのではなく、実際に現地に赴き現地の 人々と交流する大切さを学びました。知識や情報を得たとしてもそれらは現在進行形で利 用できるものではなかったり、実際のものと異なったりします。そのため、知識があるこ とに驕り高ぶることなく常に謙虚な姿勢で学ぶことが必要だと感じました。そして、これ までの日中関係の歴史をもとに、これからもさらに両国の友好関係が発展していくことを 強く願います。

貴重な経験をありがとうございました。

◆私がまず訪中を終えて考えさせられたことは、現地を実際に訪ねて実際に自分の目で確かめ、自分の頭で考えることの大切さだった。私は大学3年次から中国関連のゼミに所属し、翌年からオーストラリアへ認定校留学として1年間留学を行った。オーストラリアではオーストラリア人だけでなく、留学先の大学に進学している中国人や働いていて日本語を勉強している中国人などいろんな人と知り合う機会に恵まれていた。彼らを知り合うたびに私は卒業論文で中国系移民に関して勉強して書くつもりであることを伝えると、「中国へ行ったことはある?行ったことがないなら、実際に見てきなよ」と言ってくれる人が多かった。そして今回訪中団の団員として初めて中国を訪問できたことに感謝している。

実際に行ってみると、自分の想像以上に中国は発展していた。キャッシュレス社会で様々なITベンチャーをはじめとするベンチャー企業が設立されている背景を実際に目の当たりにしたことで、いかに自分の中国に対する認識が本やメディアのステレオタイプで構成され、偏っていたかを知る良い機会になった。特に杭州を中心に、沢山のビルや建物が建設されている様子を見て、今後も発展し続ける中国を想像することができた。

一方で、実際に中国に行ってみたからこそ体感し、日本と比べて考えることができる部分もあった。例えば、中国での国家の存在は日本に比べてかなり大きいということだ。日本と異なり、中国では国家公務員になることは人気な職業であるそうだ。また北京創造公社を訪ねた際も、政府からの資金援助を得ることやいくつかの成長したベンチャー企業は国有企業になったというお話を聞いたときにそのことを感じた。共産党の統治の中で部分的に資本主義を導入しているという制度の違いを様々な形で体感できたのでとても興味深かった。

そして、同世代の大学生と意見を交わしたり、ガイドさんの話を聞いたり質問して話した時間も貴重な経験だった。普段の旅行ではできないことであったうえ、以前に課外活動の一環として国際交流を行っていたが、改めて同世代との国際交流の大切さを再認識できた。実際に、中国とのイメージとして過去の戦争に関連した歴史だけでなく、最新の発展している中国のイメージをもっと多くの日本人に持ってほしいという意見を聞き、自分も発展のイメージを持っていなかった一人であったと反省した。

しかし、今回の訪問で見た私が見ることができた中国はほんの一部に過ぎない。特に北京や上海は東京のような都会で違いを感じない部分もあり、次の機会があるならば是非地方など違う地域にも足を運んでみたいと思った。また、学生間での交流で英語を使っていたが英語であるからこそわかりあうのに時間がかかることもあり、中国語ができればもっと彼らの良さを知ることができるだろうなと思った瞬間もあった。そのような改善点を今後に向けて自分自身でも向き合っていきたい。また、来年からは社会人として働くことになり、海外拠点が中国にもあるため、今度は学生ではなくビジネスパートナーとして違う視点から再び中国を見つめることができる機会を楽しみに、今後も頑張っていきたい。

◆今回の訪中は、私に本当に多くの刺激を与えるものとなった。私は、引っ込み思案で人見 知りで、注目されるとすぐに顔が赤くなってしまう。今回の訪中でも、団員が自分よりも年 上がほとんどという状況の中で、私の引っ込み思案ぶりは目に余るものがあり、初日、二日 目は自分から話しかけることすらできず、自分自身がとても歯痒くて仕方なかった。しかし、 この一週間を通して中国のオープンマインドが私を変えてくれた。訪中前、私は中国人に対 して、日本人と比べれば中国人は礼儀が悪く、遠慮がないというネガティブなイメージを持 っていた。しかし、すぐにそのイメージは覆されることとなる。北京大学を訪れた際には、 学生たちははきはきと発言し、自分の意見をしっかりと言う。楽しい時は素直に笑い、慎み 深いときには慎み深い。日本人のシャイな部分が彼らには全く見られなかった。交流の際に は、学生から逆に日本人には裏表(本音と建て前)があって何を考えているのか分からなく て少し怖いと言われてしまった。確かに日本人はおもてなしの心に長けている反面、自分の 悪いところを隠そうとする傾向がある。この交流の中で、日中双方の性格的な特徴も少しだ け垣間見えた。それに、中国の人は礼儀が悪いわけではない。最初は拙い中国語で話しかけ ても無視されるのではないかという不安があったが、バスの運転手の方は、私が「ありがと う」と声を掛けると、必ず律儀にその都度頭を下げてくれた。その挨拶から始まって、気づ いたら中日を過ぎたころからは訪中団の仲間にも、中国の学生にもどんどん自分から話し かけるようになっていた。最終日にはなんと値引きまでしていた。この短い期間に自分がこ こまで変わったことを知り、自分でも驚いた。また、百聞は一見に如かず、私は本当に自分 が中国人はこうだというステレオタイプにとらわれていたことを思い知らされた。

環境に関しても、以前は、中国は大気汚染がひどくて空気が悪いというイメージしか持っていなかった。しかし、バスガイドの左超さんが、数年前までは本当に大気汚染が酷かったが、ここ最近は車のバックナンバーを基に走行を禁止する曜日を決めて法規制するなど、国家をあげて積極的な対策を行っており、朝からカラッと晴れる日も多くなってきたと自信満々に言っていたのが印象的であった。確かに、想像していたよりも空気は澄んでいて、日本のようにはじめじめしておらず過ごしやすかった。

今回、日中平和友好条約成立 40 周年という記念すべき年に、かけがえのない経験をたくさんさせて頂いたが、その中で私が最も感じたことは、日中の友好関係は私たち一人ひとりが紡いでいくものだということだ。もちろん文化的な相違点もたくさんある。全てが全て分かり合えるかと言われれば必ずしもそうとは言えない。しかし、どの国に住んでいても、どんな背景を持っていても、私たちは同じ人間だ。お互いに分かり合おうと努力することはできる。交流した学生たちは皆、自分の国に誇りを持っていて、好奇心、向上心に溢れるキラキラとした目をしていて、私にはそれがとてもまぶしく圧倒された。中国のことを聞けば、何でも丁寧に答えてくれたし、日本のことをどんなことでもいいから教えてほしいと言われた。勉強熱心な彼らに私も早く追いつきたい。

今回の訪中場所は、万里の長城や故宮などの観光地や、人口が多く経済的にも世界に肩を 並べられるほど発展している都市ばかりだったので、日本でいえば地方の農村のような、生 活感のある街並みや暮らしぶりを目にすることはほとんどなく、中国という国の表層的な部分しか見られていないように思う。なので、今度訪中する時には、中国の人々の日常生活や文化に触れ、中国の奥深さを存分に味わってみたい。また、中国という国をもっと知るために、そして良好な関係をこれからも続けていき彼らと対等に渡り合うためには、母国語である中国語と同じくらい、英語、そして日本語をも流暢に話せる彼らに甘えてコミュニケーションを取るのではなく、彼らのことを根本から知りたいと思うならば彼らの母国語である中国語を通じて中国のことをもっと学ぶべきだと思う。隣国で明るく頑張る同志の姿を胸に思い浮かべながら、まずは中国語を一日でも早く習得したい。いつの日か彼らと再会し、中国語で語り合う日を夢見て。

◆私が中国に訪れるのは今回が初めてだった。中国は日本と地理的にとても近い位置にあり、行きやすいはずの国なのに、行ったことのある人は少ないように感じる。中国に行ったことがある、または行きたいという声もあまり聞かない。このように中国に行きたいと思う人が少ない理由の一つとして、中国に対するマイナスイメージが強いからだと思う。また、世界各国でのメディアによる中国のネガテイブな報道も、そのマイナスイメージに拍車をかけていたように思う。しかしそんな中なぜ私が中国に行きたいと思ったのかというと、今年の春、アメリカ留学した際にある中国人に出会ったことがきっかけだった。私の中で今までの中国に対するイメージに疑いを持ち始めた。その人はとてもフレンドリーでとても日本が好きだったのだ。日本のアニメやドラマ、映画の話、人生設計についても話した。この時、中国は良くないという固定概念は消え、もっと本当の中国について知りたい、もっと中国人と話したいと思うようになった。そこでこの訪中団の活動を知り、現地の学生といろいろな話がしたいと思い応募した。

中国に行ってまず思ったことは、国民性が非常に日本人に似ているという事だ。初対面の人や街行く人は一見するとムスッとしているように見えるが、「ニーハオ」や「謝謝」など話しかければ笑顔で答えてくれる。日本人も赤の他人とは一定の距離を持っているが、相手が近づいてきたら笑顔で受け止める人が多いと思う。私が路地の方に迷い込んでしまった時には、迷っている私たちに気づき、道を教えてくれた。少し路地に入ると治安が悪いようなイメージがあったが、そのようなことは一切なかった。逆にとても親切な人に出会えたのだ。その為、普段私たちが中国人を警戒しまうのは人間性の違いではなく、文化の違いであると気づいた。列に並ばなかったり、大声で喋るのことはマナーが悪いと日本人は思うかもしれないが、そもそも列に並ぶ習慣もなければ、声の音量を気にする人もいないのだと思う。こう考えると自国の文化を押し付けていた私たちの方が勝手だったのかもしれない。

また、今回出会った中国人の大学生やガイドさんはみな未来に明確な希望を持っていた。 そのために各々が各々の未来のために熱心に勉強していることがひしひしと伝わって来た。 携帯のアプリケーションを始めとして、規制が多く自由度が少ない国であるが、少ないから こその活気があるように感じた。 今回の訪中で私たちはまだお互いを知り、理解する事が十分にできていないのだと痛感した。日本が中国を知る事で、中国が日本を知る事で、必ず否定的なイメージは無くなっていくはずだ。今回中国を訪れた私は、今回感じたことや思ったことを周りの人に伝え、少しでも多くの日本人に中国に関心を持ってほしいと考えた。同時に、自分の中国語の未熟さを思い知った。言語の壁はやはり高く、思うように聞きたいことや言いたいことが伝えられなかった。今後より親密な話をすることができるレベルまで語学力を上げたい。また、長期的な交流が非常に重要であると感じた。浅い関係では話しづらいことも、信頼関係を築いて行くことで、深く専門的なことも議論し、情報交換をできる関係になることができる。そのために私たちは中国のことを知り、理解し、受け入れることから始めたい。日中の交流はまだ始まったばかりなのだ。今回訪中で得たものは中国のほんの一部でしかないが、私の中にはとても大きく刻まれた。責任を持ってこの日中友好に向き合い、輪を広げて行きたい。

◆かつてどの地域よりも発達し、巨大な文明を保持していた中国。私たちはいつから中国を 後発国と扱っていたのだろうか。日清戦争で日本が清に勝ってからだろうか。西欧が世界の 中心を担うようになってから何かとアジアは排斥を受けてきた。特に東アジア地域は皆同 様の扱いを受けてきただろう。国際関係を主に学ぶ自分からすると東アジア地域は西欧か らの衝撃を受けた同じ仲間であるにも関わらず東アジア地域内での不要な争いが絶えない ように感じていた。

21 世紀になり世界はグローバル社会を目指し友好的な関係を築こうとしている。一方で数年前には強い反日感情を抱く国も少なくなかった。そしてそれはまだ全てが解消されているわけではないだろう。今回の訪中でも未だ反日的な感情をあらわにしている看板が多少なりとも見受けられた。しかしそれは私たち日本人も同じだったのではないだろうか。対中感情に否定的イメージを持っている人のほうが多いといわれる日本。誰しも日本人は中国人に対して、怖いやマナーが悪いなどマイナスなイメージを持っているのではないだろうか。そのイメージに絶対的な根拠があるかと言われればあるとは言えない。私たち日本人は中国を知らない、そもそも知ろうとはしてこなかった。

現地の大学生と交流する中で強く感じたことの一つに、彼らの中には強い反日感情が無いということだった。もちろん今回あった多くの学生が日本語を専攻していたり、日本について学んでいる学生だったりすることが理由にあげられるかもしれない。彼らは日本に、特にアニメや技術に好印象を抱いていた。過去の世代は反日感情を抱いていたかもしれないと彼らは言う、しかし今の世代は反日感情を抱く人は少ないとも言った。私は先入観と偏見だけで中国人を見てきたことに気付いた。そして根拠もなく中国に対しあまりよくないイメージを持っていたことにも気付いたのだった。現地の学生が日本のマンガや本を読み、日本文化を知る一方で私たち日本人は中国の文化について知っていることはあるだろうか。知っていたとしても歴史の教科書に載るような遥か昔のことだけではないだろうか。私は何も知らなかったのにも関わらず勝手なイメージを形成していた自分をとても恥じた。日

本の学生が中国語を、または中国を学ぶ際の一番の理由は「これから使えそうだから。」「英語の次に使う人口が多いから。」などの有用性で判断していると私は考える。「中国語を学びたいから」と理由を掲げる人はほとんどいないだろう。それほど日本において中国の事、中国の文化について知る機会は少ないのだ。

今回の訪中の成果として得られたことは現状の中国を垣間見れたことだ。広大な土地と人民を保有し近年急成長を見せる中国の発展途中に立ち会えたことを嬉しく思う。数年前までは中国は日本に比べ確実に遅れている国だったことは事実かもしれない。しかし現在は少なくとも都市部は日本よりも進んでいる部分が多いのではないだろうか。キャッシュレス社会、夜の明るいネオンの数、秒刻みで書かれる電車の到達時刻、次々に建てられている空港、現在開発されている様々な新技術など実際に中国を訪れることでこれらの文明に触れることができた。一方で道路の整備や、法規制の整備、農村部の開発などまだまだ未発達の部分も多くあるように感じた。現地の学生も話すように、都市部、農村部での格差は激しいものらしい。このようなことを知ることができたのも今回実際に中国を訪問し現地の学生と交流があったからである。我々は隣国として、まず中国について知る機会を増やさなければならないと痛感した。

日本が中国に影響を与え、教えていかなければならないことも多くある。だが、中国から 日本が学ばなければならないこともたくさんあることが今回の訪中でわかった。良好な関係を築き、お互いが協力して高め合うことができるようにお互いのことを知る機会という ものを増やしていきたい。偏見無く、自分の目で見て考えたことを根拠にこれから中国と向 き合っていきたいと考えている。同じ東アジア地域の一員として、これからの友好関係を共 に構築していきたい。

◆私が今回の訪中団で最も印象に残ったのは、浙江大学での日本語専攻の学生との交流である。その学生は浙江省のそれほど有名ではない大学で日本語を専攻しているという。私のこれまでの人生において中国と関わる経験は割と多い方で、日本語学習者に触れる機会も多かった。国家重点大学のような難関大学で日本語を学ぶ学生でもなく、ほとんど経済的インセンティブのみで日本に関心を持っている技能実習生でもなく、中間層でどのように日本語や日本文化が受容されているか交流を通して直接触れることができて良かった。

中国の高等教育政策は直近でこそ大学の質の向上を企図したものであるが、つい最近まで ひたすら大学の大衆化、進学率向上を目指し、政府は新しい大学や学科が増えることを容認 してきた。大学進学率が向上していく中、大学産業はおいしいビジネスとされ次々と大学は 増えていく中で、これが日本語教育にどのような影響を与えてきたのかは様々な議論があ る。私が最近会った日本研究をしている中国の若手研究者が言っていたのは、もともと理系 の学科のみ持っていた大学が文科系の学科を設置して総合大学になろうとした時によく外 国語学部を設置するという手法を取るらしい。その中でも日本語学科は設置しやすいのか、 日本語学科の新設数はかなりの勢いで伸びているという。

しかしこれは日本語が人気の言語であることを意味するわけではない。日本の高校生と同様に目の前の大学進学ばかり考えがちな中国の高校生が将来のキャリア意識を強く持って日本語を選ぶことは少ないだろうし、アニメやマンガも本人の専門を決めてしまうほどのものとは限らない。先述の浙江省で話した学生はたまたま日本語を高校の頃から学校で学んでいたが、北京で会った日本語を学ぶ学生の多くは「第一志望の言語の学科ではなかったが。点数が足りずに日本語にした」というものだった。彼らが日本語を学ぶのは彼ら自身の関心や選択というよりも、中国の大学受験システムや増大していった日本語学科数という外部的なものが契機であることが多いのだろう。簡単に言えば偶然なのである。

しかしこれは日本にとってはチャンスである。もともと興味を持っている人にさらに強い 関心を持ってもらうことよりも、全く関心のない人に少しでも関心を持ってもらうことの 方が難しいということは大抵のことについて言える。しかし今の中国の構造では思いがけ ず日本語を学び、日本に触れる人が生じることになる。それは幅広い中国人学生に日本に関 心を持ってもらう契機となりだろう。

私はこれから香港中文大学の博士課程に進学し、願わくは日本を含め東アジアについて多くのことを語れる大学教員になりたいと思っている。今回中国の日本語を学ぶ多くの中国人学生に会い改めて感じたのは、中等教育ではなく高等教育によってより集中的に日本語を触れる環境を作ることが日本への関心を持ってもらうには重要であるということである。そういう各国の日本研究、日本語教育が特に高等教育機関においてどう行われているか改めて私は見つめていきたいし、これまで関わってきた日本における中国研究の発展にも合わせて貢献できればと思う。

◆日中友好平和条約締結 40 周年という記念すべき年に、自身にとって初めての中国訪問ができたことを非常に嬉しく思います.私は大学において約 2 年間中国語を学んでいましたが、中国に関しては高校の世界史や政治経済などの知識のみしかありませんでした.自身の専門は音楽神経科学と触覚ですが、バーチャルリアリティ技術などに関わる触覚の技術は、中国でも非常に盛んな研究分野です.そのため、中国の大学院などに留学することも視野に入れて、今回の日中友好大学生訪中団に参加することを決めました.

日中友好大学生訪中団では、中国の学生と交流を深めることが出来ただけでなく、普段は話すことのない文系の学生や、別の大学の学生とも多くの交流をすることが出来ました。また学生同士の交流だけではなく、万里の長城や上海の外灘など様々な場所に行くこともでき、非常に有意義な時間を過ごすことが出来ました。中国の大学院に留学することを念頭に置いて参加をしていた私が、今回の訪中において感じたことは2つあります。

1つ目は、中国ではスタートアップ支援のシステムが確立されているということです.私はまだ研究者を志したばかりの人間であるため、お金の流れについて詳しいわけではありませんが、どのような研究もお金がないと進めることは出来ません.特にベンチャー企業は、多額の支援や企業同士の繋がりがないと成長することができないため、『創業公社』のように国からの補助を受けることが可能な施設があることは、非常に羨ましく思いました.

2つ目は、中国の学生の勤勉さです.私は中国に対して、空気が汚い・接客態度が悪いなどの一般的な日本人が抱くような印象を抱いていました.そのため、中国の学生についてもプライドが高い・怖い・せっかちな人が多いのだろうと決めつけていました.実際にはそのようなことはなく、私たちと全く変わりませんでした.私が驚いた点は、先述した通り中国の学生の勤勉さです.中国の学生は良い意味でプライドが高く、競争心があります.「人口が多いから勉強しないと置いていかれるし、良い大学には入ることが出来ないから勉強する.」という言葉は、私の中で非常に印象深い言葉でした.実際にどれくらい勉強したのか伺ったところ、塾や学校の勉強、宿題のために毎日4時間しか寝ることが出来ないようなことも、彼女たちにとっては普通であると聞きました.高校時代から勉強を毎日することに違和感を感じていませんでしたが、私と彼女たちの勉強量は圧倒的に異なっており、自身が甘い世界に生きていたことに気づかされました.彼女たちの日本語は非常に上手く、論文の探し方なども詳しく教えてくださり、学ぶことが非常に多かったです.私も彼女たちと同じような環境で、彼女たちのように勤勉な研究者と研究をしたいと強く思いました.

様々な学びを得ることが出来た訪中でしたが、私たち若者はこの訪中をきっかけに今後、 日中友好のために活動していくことが求められています. 私は研究者として、留学などを通 して共同研究などを実施し、日中の友好関係に貢献できていければと考えています.

◆今回の訪中を終えてこれまで漠然と持っていた中国に対しての先入観から少し解放された気がする。私の持っていた中国像の大方はほとんどの人と同じようにマスメディアを通じて発信されてきた「中国」によって形作られてきた。バラエティー番組や芸能誌などでは中国に対して好感を持てるような所謂親中的な内容を目にすることはあるが、少なくとも私が比較的よく目にするニュースにおいてはその反対の反中的な内容が多い気がする。特に国際関係の中にある中国に対してはより一層批判的な見方をする内容が多い印象がある。だから少なくとも私はメディアが発信する「中国」には大きな偏りがあると感じている。その偏りの根幹には日本を抜いて成長を続ける入獄経済への畏怖の念、アメリカを目指して強化を続ける軍部に対しての緊張感や共産党一強政治への不信感など想像するに枚挙に遑がない。だがしかし、良くも悪くも中国に関する内容を日常的に発信している事実は隣国としてこれからも関係を続けていく必要があるという共通見解を持っていることを示している。そのような事情もあって私の中国への印象は良いもの、親中的なものではなかった。だからといって、反中的なものでもない。オーストラリアで留学を受け入れてくれた中国人家族はとても親切にしてくれて今でも連絡をとっている。ニュージーランドで

できた中国人の友達は今でも仲良くしている。日本に来る中国人観光客だって日本人には 受け入れがたいモラルを持っていることは事実だが、日本、日本人に敬意を持って接して くれる人もいる。経験的に培った中国人像があるからある程度中国に対して親しみを持て ていたが、心のどこかでそれを完全に肯定できない自分がいた。その裏には文化的にはま だ遅れているという先入観があった。

今回の訪中を終えた今ではそれを肯定できる。訪れた北京、杭州、上海のいずれの都市も都市としてまとまっている印象を受けた。宿泊施設や飲食に関しても衛生的な面でそこまで悪い印象を受けなかった。交流した北京大学、北京外国語大学、浙江大学大学の学生もとても歓迎的で親しみやすい印象を受けた。それ以外に公道や繁華街を歩いていても特に先入観で持っていたような印象は受けなかった。私の持っていた先入観はやはり先入観に過ぎなかったことを痛感させられた。

日本より人生における受験の重要性が強いこともあってか学生たちは皆日本の学生に比べて勤勉な印象を受けた。北京創業公社では年もそんなに変わらないような人たちが自らの企業を大きくしようと鎬を削っていた。北京では多国籍企業より中国国籍の企業が圧倒的に多かった。国を挙げて中国は確かに成長しているという実感とともに日本に対しての危機感を覚えた。自らの将来を考え、今より未来に焦点を当てる学生の姿を日本の学生は私も含めて参考にすべきだと思う。また、国として国の企業後押しする姿を実情にそぐわないかもしれないが、日本は見習うべきだと考える。

国際関係の中の日中関係は多岐に及ぶ。当然これからも中国は隣国であり続ける。今後 どのような形でその複雑な関係に携わるかまだわからないが、関心を持って中国を見たい と思う。

◆わたしは、日本文化の源をみてみたいという気持ちで、訪中団の団員を志望しましたが、 向かった先でみたものは、現代としての中国でした。建築、芸術、商業、政治、経済、生活。 なにをみても、そこには現代社会の影がうごめいているのです。

様々なものから、日本文化の源をみてとることもできます。しかし、それは始点から現代に至るまでの解釈の道を通過した「源」であらざるをえず、わたしには、その始点の姿を思い描くことはできなかったのです。そこに、中国の長い歴史を感じることすらできないほどに、解釈が重ねられていたのです。

しかし、期待を裏切られたという感想で終わりというわけではなく、一週間の滞在での経験は、わたしにとって意義深いものであったと思います。もっともわたしを驚かせたのは、 客人、すなわち我々訪中団に対する、中国の方々の誠実であたたかい歓迎でした。

それは、北京大学の学生の方々に、キャンパス内を案内してもらっていた昼時のことでした。正直、私は少し退屈していました。学生のなかには、日本語専攻の人が何人かいたのですが、そのうちの一人の女学生が、すぐとなりを歩いていて、暇をもてあました私は、日本語でたわいもないことを、多少の乱暴に、投げかけてみました。しかし、彼女は突然の声か

けに、たじろぐしかなかったようで、会話は途切れてしまったのです。私は、悪いことをしたなと思い、謝罪を述べようとしましたが、上手にフォローできなかった自分が恥ずかしく思えたせいか、謝罪のやり方は、茶化したかたちになってしまいました。ともあれ、その場は、このように、なんとなくやり過ごしましたが、しかし、この一連の出来事は、その後の行程のなかで忘却のかなたに追いやられてしまったのです。

翌日の行程を終えて、ホテルで友人と酒を交わしながら談笑していたあるとき、彼女からのメッセージが携帯に届きました。彼女のことすらおぼろげにしか覚えていなかった私は、最初、スパムでも受けとってしまったのかと、ひどい勘違いをしたのですが、読み進めると、その内容は、とても感動的なものだったのです。なんと彼女は、会話をうまくできなかったことを猛省し、私に謝らなければならないと丸一日悩んでいたというのです。そして、そのことを慣れない日本語を駆使して私に一日越しに伝えてくれたのです。

私は彼女の誠実さに心打たれると同時に、猛省しました。日本にも「おもてなし」という言葉がありますが、彼女のそのメッセージは、真の「おもてなし」であるように思えました。 その意味で、私は彼女の心に、日本文化の源流をみたといえるのかもしれません。

日中友好の道には、一筋縄ではいかない事情が多々あります。人の心だけで日中友好の夢が果たせるものではないことくらい、誰にでもわかることです。しかし、一市民にできることなどたかが知れており、むしろ、多くの人が簡単にはじめられる行動こそ、彼女のような「おもてなし」だということもまた事実であるように思います。

◆私にとって今回の訪中は、現代中国についてよく語られる「発展」と「対立」という二つのキーワードについて考える機会であった。まず取り上げたいのは、「発展」についてである。日本においても、改革開放以後の中国の経済的発展についてはメディア等を通じてよく知られている。だがそのほとんどは、GDPの数値や高層ビル街、スマートフォンをはじめとする電子機器の生産工場といった「目に見えてわかる発展」を取り上げただけにすぎない。しかし訪中を通じて、私はむしろ人々の生活に根ざした部分について「発展」を実感した。北京の街中には環境対策から電気駆動のバスが当たり前のように走っており、また自動販売機では微信アプリによる電子マネー支払いが可能であった。こうした光景は、少なくとも日本においては一般的とはいえないだろう。

これまで私は「発展」という言葉を考えるとき、欧米や日本といったいわゆる「先進国」と呼ばれる国々と、「発展途上国」と呼ばれる国々とを比較することによって語ることが可能になると考えていた。しかしながら北京で見たこれらの光景は、「発展」を一つの物差しの上で語ることができないという気付きを私にもたらした。「発展」とはあくまでその国の人々や社会の方向性に合わせて変化していくものであり、唯一無二の正しい「発展」のあり方など存在しないと考えるようになった。

第二に、両国間の「対立」について考えてみたい。戦争の歴史や近年の経済・政治的な対立は、日中の人々に互いの国に対する不信感を与えているといってよいだろう。実際に近年

の調査では、お互いの国に対して好感を抱いていない人が 8~9 割にのぼるという結果も出されている。こうした一種の緊張関係を踏まえたときに、私はこれまで対立を呼び起こす可能性のある話題について触れるべきではないと考えていた。

しかしながら、その考えに対して疑問を持つ出来事があった。それは、北京から杭州へと向かう機上で同じ列に座っていた中国人男性との交流においてであった。彼は杭州出身のエンジニアであり、妹が先月日本を旅行したとのことで私たちに興味を持ってくれたようであった。なかでもとりわけ驚いたのは、彼が第二次世界大戦に関する私の意見を尋ねてきたことであった。この質問に対して、私は戸惑いを覚えた。訪中団とは関係がなく、たまたま飛行機の席が隣だったというだけの初対面の男性から、どのような意見が出てくるか不安だったからである。しかし少し迷いながらも自分の考えを述べると、その不安は解消された。お互いに、自国の一部の人々による対立を煽るような歴史的主張に疑問を感じていることを知り、むしろ意気投合することができたのだ。

もちろん、必ずしもこうした冷静な意見交換ができるとは限らない。実際私の身の周りで中国に対する意見を聞くと、2012 年に領土問題を発端としておきたデモなど、象徴的な価値観を中国国民全体が共有しているかのように捉える人が数多くいることも事実である。しかしながら、はなからデリケートな話題は避けなければならないと決め込んでしまうのではなく、友好関係を築く上では相手の価値観をきちんと理解することも大切だと感じるようになった出来事であった。

このような7日間の訪中は学びが多かった反面、良い意味で消化不良でもあった。「百聞は一見に如かず」とはよく言われるが、正直なところ私は「一見」すらできていないと感じている。今回「発展」「対立」というキーワードを通して、短期間ではあったが中国の多様性を垣間見ることができた。だが当然のことながら、北京・杭州・上海といった大都市の中心部と、少数民族の多い西部の農村地域では広がっている光景も人々の価値観も全く違うだろう。こうしたさらなる「ズレ」の存在を実感することができたのが、今後につながる最大の学びであり、中国という国にこれからも関心を持ち続ける大きな理由になると感じている。

◆「大きい国だ。」

日本からの飛行機から降りたって最初にそう思った。中国大陸の土を踏むのははじめて だった。とにかく空港も、道路も、建物も、あるいは土地の使い方もスケールが大きい。

中国大陸に足を踏み入れる前から、中国という国は大きい国だとは朧げながら思っていた。しかし、自分の目で見て、身体で感じてようやく心に抱いていたイメージが実感を伴ったものとして現れてきた。

訪中団を歓迎してのことなのかあるいは普段からなのか、料理もとにかくたくさん出てくる。初日の夜から、大きなお皿にのった料理の洗礼を受けたが、そのせいか日に日に体が重くなっていった。訪中団に参加して得たのは体重だけかと思われたくもないので、訪中団

を経て考えたことをいくつか書き付けていきたい。

冒頭でも述べたが、この国はとても大きい。人口は世界第一位、名目 GDP は世界に第二位、面積は第四位、経済成長率も高く、都市ランキングや大学ランキングでも中国は上位に位置している。単純に指標を見るだけでも、とてつもなく大きい。広大な二つの大河や峻険な山々、あるいはどこまでも続くかのような砂漠や平野とともに人々は古くから、文化を作り、歴史を語り、生きてきた。

シルクロード博物館では、古くから人々の生活がいかに歴史にあるいは広大な世界に関わってきたかを改めて確認し、西湖では山水画の情景を重ねながら、白楽天や蘇東坡の詩に耳を傾けた。というのは半分くらい冗談ではあるが、積み重なった文化を持ち、悠久の歴史に思いを寄せることができることができるほどの時間的な厚みもこの国にはある。

空間的にも、時間的にもあるいは料理の器も人の数も全てがとてつもなく大きな国が日本のすぐ隣にある。飛行機で行けば、北京へは四時間、上海へは三時間程度である。ほぼ国内旅行のような感覚で、中国へと行くことができる。

しかしながら、中国と日本はどことなく近くて遠い国である。1937 年に日中戦争が始まってから、正式な形で和解し、ともに協力していくことを誓ったのはわずかに四十年ほど前のことである。

日本と中国は、数千に渡って、政治・経済・文化など様々な側面で交流してきた。戦前の知識人であれば、漢文の素養でもって、密な交流ができたという。同じ古典に親しみ、文字に親しみ、習俗に親しみがあったからこそ可能だったことである。けれども、近年では歴史認識や領土、あるいは日本に観光に来る中国人の「マナー」などの問題で、日本(人)の中国(人)に対するイメージはあまりいいものではなくなっている。中国へ観光に行く日本人もどんどん減っていっていると聞いた。どんどん大きくなって行く中国に対する警戒感や恐れももるのだろうか。あるいは「先進国」の先輩としての矜持を保ちたいのだろか。いずれにせよ、日本人が「また中国(人)」か」と口にするとき、揶揄と哀れみの気分が漂う。

そのように思っていても、空間的にも時間的にも広大なスケールを持っている「眠れる獅子」が目を覚ましつつあるときに、その獅子の前であいも変わらず好奇の目で見ているだけでもいられないだろう。というよりも、もう俺は覚醒しているぞと眼に映るすべてのものは訴えかけてきた。仲良くするのが何よりである。そのための基盤は先人たちが用意してくれているのだから。

先人たちだけではない。どんなに中国がスケールの大きい国だとしても、その国で生きる人々は我々と変わらない。彼/女らの等身大のあり方にもこの旅で触れることができた。将来の夢を堂々と目を輝かせて語る人もいれば、将来やりたいことが見つからないと悩んでいる人もいる。変わりゆく社会の中での生存戦略なのか、それほど愛していないけれども公務員だから結婚したと照れ隠しをする民間のサラリーマンもいる。嬉しそうに二十キロも痩せたんだぞと自慢するガイドさんもいる。日々高みを目指して、そびえ立つ壁をよじ登る人たちもいる。日本のアニメが大好きで、辛口の批評も交えて語る大学二年生もいる。今回の訪中で、改めてこのような小さな交流の積み重ねが友好の礎であると感じた。

自分はもう大学院生だが、院生にもなってこのような経験ができるとは思わなかった。同行した朋友たちは未成年(!)も多く、一杯酒はホテルで(一杯ともいえないが)こっそり(これまたこっそり持ち帰った北京ダックと)友人ら(もちろん成人している)と酌み交わしていた。その思い出もまたかけがえのないものである。

今回の訪中団を招待してくださった中国大使館、そして日本側の窓口となっていただいた日中友好協会の皆様、また旅のコーディネートを行なってくださった様々な関係者の 方々に感謝を申し上げ、筆を置きたいと思う。

◆訪中期間中で面白いと思った点

訪中で面白いと思った点は、2点ある。1つ目は、創業公社への訪問である。ベンチャー企業に低金利で融資したり、企業に場所を安く貸したり、社員の寝床も提供していた。こうしたものがあると、企業する壁は低くなるだろうと思った。印象的であるのは、日本の大学生が「なぜ、こんなに創業公社は発展できたのか?」と質問した際、創業公社の方が「国家の援助です」と返答したことである。国家の性格が日本とは大きく異なるのを感じた。日本であれば、国家の援助を企業が受けていることをおおっぴらにするのは躊躇われることが多い。また、そのベンチャー企業たちが創作し、何かの賞を受けている商品の展示を見学させていただいたが、見た事のあるようなものが多くレベルはそんなに高くないように思えた。しかし、国家による保護の中で十分成長する可能性はあり、成長後に世界の自由市場に入っていくようになるのかもしれないとも考えた。

2点目は、北京にブランド品だけを集めたショッピングモールが存在したことである。日本で言えば、イオンのような大型ショッピングモールのような建物に Dior、ルイヴィトンなど高めのブランドが集約されているようなものである。私の感覚では Dior、ルイヴィトンなどの高いブランドは三越などのデパート、アウレットパークなどにしか置かれていないというイメージである。高めのブランドを、私たちがイオンで買い物するように購入することができるまで購買力が上がっているのだろう。

隣国隣人としてどのように中国と付き合っていくべきか

私たち慶応大学が訪中団に参加できたのは、私たちが所属する研究会の教授と、現在大使館でお勤めされている方が大学時代の同期であったという縁によるものであった。こうした古い縁が年月を経て、一つの大きな成果として現れたように思う。こうした縁が、こんかいの訪中でも生まれることを願う。しかし、こうした縁頼みでは中国との関係を安定的に良好にはできない。中国と日本の関係で、大きな問題を持つのは、やはり歴史問題ではないかと思う。戦後70年以上が経つにもかかわらず、この問題は未だ解決していない。戦時を経験した世代の大半は亡くなられたちがいないが、世代を超えて受け継がれているのだろう。いつかは、こうした部分に踏み込まなければ、安定的な関係は望めないであろう。靖国神社

の参拝などによって、中国側の意見として「日本の戦争に対する反省がない」というものは 多いだろうが、そうだからといってどのような反省を日本側が果たすべきなのか。解決策は そう簡単ではないだろうが、二国で歴史を紐解いていく必要があるだろう。また、日本の経 済に関しても問題はある。中国の第二次産業の発達が大きな原因となって、日本の第二次産 業は廃れてしまった。隣国であり、中国という大きな市場への輸出を止めるのは、日本にと って大きな損益だろう。日本は同じ土俵ではなく、高度サービスを中心とした第三次産業へ と産業構造を変化させなければならない。

◆本プロジェクトに参加するまで、私は中国について歴史の授業や日々のニュースを通じてとても身近な外国の一つと感じており、その地の風景をイメージすることも容易だと考えていました。

しかしながら実際に中国に渡り、北京・杭州・上海の三都市を巡る行程は驚きの連続でした。

その一つに「電動自転車」が挙げられます。事前の研修などでもしばしば話題に登場していましたが、正直なところ、その時はさほど注意を払ってはいませんでした。

道交法の規制の目をくぐる形で活用されているらしく、いわゆる「政策と対策」の文脈に 沿った形で普及したと伺いました。

原付のような外観で、バスの窓から初めて実物を見た時も、まさか「自転車」だとは思いませんでした。

原付との違いを大きく感じたのは、北京の夜の市街地を歩いていた際です。

自転車であるために排気管を備えておらず、体感としてはほぼ無音であったために、背後から電動自転車に追い抜かされる時、その存在に全く気が付きませんでした。

都市間の移動中も至るところでこの電動自転車を見かけ、また利用者の年齢や服装の幅が とても広いことから、「都市部の住民の嗜好品」ではなく、「日常の移動手段」として広 く普及していることがよくわかりました。

帰国後この電動自転車について簡単に調べて見たところ、

- ・価格はおよそ2000元から入手可能
- ・時速は 70Km/h ほどまで出せる

とのことで、比較的誰もが採用できる選択肢であることがわかりました。

充電については、公共スポットは見当たりませんでしたが、バッテリーが取り外し可能な ものを選んで家庭内で済ませる人が多いそうです。

見かけたバイクの台数からして、こうした行為が「趣味・娯楽」ではなく「習慣」として 中国に広く根付いていると感じました。

これは日本の中で膨らませていた想像の死角にあったため、大きな衝撃を受けました。

内陸部などにおいて、電力供給の安定性についてはまだまだ課題があるとされているものの、「自宅で充電する移動手段を持つこと」が一般化されていることは、近年の EV トレンドを考える上でも大きなヒントになりました。

例えば今年7月ごろに報じられた「EV 大手テスラが米国外初の工場を上海に置く」という ニュースについて、当時は米中間の貿易摩擦対策や出資規制の緩和によるところばかりに 目が行っていましたが、中国の生活習慣という視点から眺めることで新たな洞察が可能に なったと感じます。

また、メーカー単位で販売した車の平均燃費に対し規制をかける CAFE の水準引き上げや、市場規模と NEV 規制で各社の EV 車投入を誘う政府側の戦略についても、大変興味深いトピックだと考えています。

電動自転車をきっかけにこうしたことを考えながら迎えた旅程の終盤、上海のビル群を前に「アジア経済の中心部はここだ」と肌で感じました。

もちろん数値やデータからも都市の規模を掴むことは出来ますが、電動自転車に乗っている人の顔付きや都市の空気感など、実際に足を踏み入れてこそ得られるインパクトを体感でき、大変意義深い経験となりました。

◆「民をもって官を促す」とは、日中友好を熱望された周恩来総理の言葉です。私は中日友好の基盤はその言葉通り民間にあり、その未来は若者にあると考えています。若者は将来を担う世代であり、認識を変えることによって日中友好の未来は明るくなることを確信しています。本年は日中友好平和条約締結より40周年という記念すべき年です。このような意義深き年に日本の大学生が中国の上海・北京・杭州を訪れ、中国の学生と交流することは日中の関係をさらに発展させるために非常に意味を持つことであると考えていました。私は中国語に加え、中国圏の文化や歴史について学んでいた事もあり、今回の訪中に対する想いは強く、友誼の金の橋をさらに輝かせ、平和友好の一端を担っていきたいと考えていました。

尖閣と東シナ海をめぐる危機管理問題など、日々メディアを通して知るニュースなどから「日中関係は良好ではない」というイメージを持ち、中国に対する印象は悪いという人々が多いことは事実です。また、私自身も中国の人はマナーを守らず、コピー商品が多く出回り、お手洗いは汚いという悪いイメージもありました。しかし、実際に北京大学と浙江大学で中国の学生で交流し、様々な歴史的建造物を巡りながら現地の人と触れ合うことによって以前持っていたイメージは払拭されました。交流の際には、中国の学生か笑顔で沢山の質問を投げかけてくれ、交流した皆が「日本に行きたい」という熱い想いも共有してくれました。アニメなどの日本文化の影響で中国からみた日本の印象はとてもよく、むしろ日本の方が中国に対し嫌悪感を抱いていたのではないかと考えるようになりました。交流を通して、最終的には「一対一の人間」であることを感じ、膝詰めの対話の重要性を痛感しました。このような交流や対話こそが互いの印象を大きく変えることができる最大の方法なのだと確信しました。さらに若者が中心となって交流し、意識を変えることによって友誼の道は約束されるのではないかと考えます。

とても衝撃を受けたことは、上海市内の飲食店の看板の上に「钓鱼岛是中国的!」(魚釣島は中国のもの)と書かれていたことです。尖閣諸島問題のニュースを通してではなく、目で見て相手の意見を聞いたことは衝撃的であり、領土問題について自身も歴史を踏まえながら学び深めて考えていきたいです。

この訪中を通して交流だけではなく、歴史的建造物を巡りながら歴史の長い中国を肌で感じられたことももう一つの魅力でありました。万里の長城は想像以上に険しく、当時このような人工壁を作る技術や労力を考えると計り知れないなと思いました。北京ではPM2.5を心配していたのですが、実際に息苦しさは感じられず、民衆の運動の中心となった天安門に行き、毛沢東の油絵を見ることができとても感動しました。西湖で知られる古都杭州では、自然を楽しみながら文化財を見学し、古き良き中国を感じることができました。最後の上海では、外灘から見る夜景を見て大きな経済発展を遂げた中国を肌で感じることが出来ました。食に関しても3都市にそれぞれ特色があり、中華料理を一括りには出来ないことを感じ、現地の料理を食べることも一つの学びでもあり楽しみでもありました。

この訪中を通して、日中関係の発展は若者世代にあり、その可能性は無限であることを感じました。私は、これから日中友好に尽力を注ぎ、まずは目の前の友人を大切に対話から 平和友好の友誼の道を切り開いていきたいと思います。

◆中国は秩序と混沌が混在しているような国に感じた。空港での厳格な入国審査、各観光地 での厳重警備、地下鉄等での見張り兵の存在。かたや、いざ北京や上海の街に出ると緩やか な時間が流れる人々の姿を見ることができる。何人かで卓を囲みながら遊戯を楽しみ、屋台では店の外で様々な人が食事や会話を楽しんでいる日常がある。また、歩道の水溜りに小便を足す子供の姿を多く見つけ、道路ではスピードを出した車の運転にヒヤヒヤさせられるなど、日本では経験できないことを体感した。

私が知っている中国は悲しい歴史の国だった。映画「ラストエンペラー」で見た清王朝皇帝 の溥儀の姿は異様に巨大な王宮に反して、その後ろ姿には寂しさと悲しみを抱えた孤独な 王であった。世界史で習う第二次世界大戦前後の中国は多くの血が流れ、混乱を極めた。近 年の尖閣諸島の問題では双方の国で嫌悪感の印象が残ってしまった。おそらく今回中国訪 問をせずにこのまま過ごしていたならば、中国のイメージは暗いままであっただろう。 7日 間で中国の全てが理解できたとは到底言えないが、今回の訪中で確実に一つだけ言えるこ とがある。それは中国の近い年の若者たちは、私たちと同じような事で悩み、笑い、そして お互いの将来について語り合えることに希望を感じていることである。政治的対立、歴史認 識問題の見解の食い違いでお互いの国の政治家が対立していると、それが国同士のイメー ジに安易に直結しやすい。それに相手への無知が加わると尚更影響されてしまう。実際に私 は中国の負の側面しか見ていなかった。自分の知らないところで行われている政治や外交 の対立が国全体の印象になってしまっていた。北京大学等での中国人学生との交流だけで なく、ホテルマン、お土産屋さんの中国人と接して、このような自分の無知を恥じ、たった 一つの側面しか見ていなかった自分を悔いた。彼らはそれぞれの生活があり、日々の生活に ささやかでも楽しみを持ち、そして仕事や学業を懸命にこなしていた。私たちの普段と変わ らないそのリアルな姿は、テレビやネットで伝えられる中国よりも何倍も生々しく、そして 活力があった。杭州の大学での交流会大会において中国人の学生に、日本で流行っているこ と、日本人が好きなものについて多く質問された。どうしてそのように私たちが好きなもの や流行っていることばかり質問するのかと尋ねると、将来日本に来た時に日本人と同じ話 題で盛り上がりたいからだと言った。私はそのたどたどしい日本語を聞きながら、彼らが自 ら異なる社会に飛び込んで、相手を理解しようとする行動力に大きな衝撃を覚えた。

社会には色々な側面がある。その国の文化や伝統と呼ばれているものは、単純に分かりやすいだけの形だけの存在かもしれない。私たちが知らないことは、実際にその社会に飛び込まないと分からないものかもしれない。何より他人から借りてきた情報で得られるものはごく一部であり、実際の社会は多様である。それを実践しようとする中国人の若者がたくさんいること、そして私が中国の多様な側面を少しだけ見つけられるようになったことが、今回の訪中での大きな収穫である。

◆私は、今回の日中友好大学生訪中団に参加できたことに、改めて感謝しています。今回の 訪中が自分の人生に大きな影響を与えたことは間違いありません。

正直、訪中前は中国に対して、良いイメージがなく、期待よりも不安のほうが大きかったです。言葉の壁、文化の違い、食の違い、治安・空気の悪さなど、不安要素がたくさんありま

した。それだけでなく、人見知りである私にとっては、これから7日間を共に過ごしていく 各大学の人たちとも上手くやっていけるのだろうか、と不安が倍増しました。そんな不安を 抱えたまま、初日を迎えました。初日は、成田近くのホテルでの研修会でした。私は自分の 大学の人たちを含め、全員が初対面でした。かなり緊張していましたが、同大学の同級生と 話すことができ、心がとても軽くなりました。これをきっかけに、訪中に向けて、不安から 期待へと変わっていきました。そして、中国へと出発。中国との時差は1時間だけであり、 気候も日本とほとんど変わらないため、体調面についてはあまり心配していませんでした。 そして、ついに中国に到着。北京空港に到着し、最初の感想は、人が多く、目まぐるしいと いう印象でした。私は大分県出身で、山口大学に通っているため、人の多さに普段から慣れ てないということもあったのか、想像以上の人の多さに、かなり動揺してしまいました。そ して、外に出ると、空が少し暗く、黒っぽい色をしていたことに、驚きを感じました。それ と同時に、街のにおいや街の風景、街の人々、様々な場面で日本との違いを感じ、最初の数 時間は、こんなにも近くにある、中国と日本でもこんなにも違うのかと、圧倒されました。 中国での初めての食事。中国の本場での中華料理は辛いだろうと予想していました。実際、 私は辛い料理がそんなに得意ではないので、食事の面でも心配でした。しかし、実際の料理 は辛くなく、日本人の口にも合う味付けでした。何よりも、円卓で食べるという習慣がない ため、とても新鮮でした。円卓だと、大人数でも全員の顔が見え、みんなで話をしながら食 事をするには最適でした。また、中華料理は品数がとても多く、どんどん出てくるので、毎 回ワクワクしながら食事をできたことも、とても魅力的でした。この風習は日本にも取り入 れてほしいなと感じました。そして、万里の長城に行きました。写真では何度も見たことが ありましたが、実際行くと、想像以上の高さでした。また、登ると、一段一段がかなり高く、 すぐにバテてしまうほどでした。昔、中国人が攻撃から守るために建設したという目的を直 で感じることができました。そして、中国から杭州へ移動しました。大都市の北京とは打っ て変わって、杭州は少し穏やかで、とても居心地が良かったです。杭州では特に、中国の学 生との出会いが印象的でした。驚きを感じたのは、中国の学生は日本のことを思ったよりも 知っていて、自分が中国のことをあまり知らなかったことがとても情けなく感じました。こ れをきっかけに、もっともっと中国について詳しく学び、日中友好へ努めなければならない と感じました。そして、上海へと移動しました。同じ中国内であるにも関わらず、3都市で 全く違う雰囲気でした。上海の街並みは、西洋に近く、まるでヨーロッパに来ているかのよ うに錯覚させてくれました。夜になると、絶景の夜景で、包んでくれる最高の場所でした。 このような7日間の訪中であり、どの瞬間も素晴らしい思い出です。一番の教訓は"百聞は 一見に如かず"です。訪中を終え、強く感じました。何事も行動あるのみであることを痛感 させられ、これからの私の人生に刺激を与えてくれました。

◆私は「自分とは違う価値観に触れることによって、そのような価値観に出会ったときに 受け入れることができるよう広い視野を持てるようになる」という大学在学中の目標の達 成のためにこの度訪中団に参加した。日本から近く、日々の生活の中でも馴染みのある中 国という国に対して、最近ニュースでもよく取り上げられる「爆買い」などの印象が強 く、私にとっては理解しがたい価値観を持っている人が多い国であると考えていた。また 技術の進歩が著しい国であるということは知っていたが、具体的にどのような発展が行わ れているのか全く知らなかった。訪中団の活動を通して最新技術の展示を見学した時、理 想の中だけだと思っていたものが現実に形になっている姿を目の当たりにすることがで き、実際に目にしたことで技術が急激に発展していく中で将来自分にできること、しなけ ればならないことはなんであるのかについて考えるきっかけを持つことができた。そして 私が一番訪中中に印象に残ったプログラムは北京大学と浙江大学での地元の大学生との交 流と北京第二外国語大学のボランティアの人達との出会いである。まず中国の大学生との 交流を通して感じたのは、自分の将来についてしっかり考え、それを他の人の前で堂々と 発表できるということである。バスで北京第二外国語大学の方が自己紹介の時に将来につ いてどのように考えているか、そして今それを達成するためにどのような努力をしている のかということを明確にし、私たちに伝えてくださっている姿をみて自分の将来について 真剣に向き合いその目標達成のための具体的な活動を今この瞬間から取り組む必要がある のだということを教えていただいた。北京大学と浙江大学と学生との交流で感じたことは 日本の文化や言語についてよく知っており、もっと知りたいという気持ちが強いというこ とである。私たち日本人と同じレベルで日本のドラマや文学作品の話をすることができた し、歌手の ZARD が好きで歌詞にいつも勇気づけられているという会話もした。私は大学 から中国語を学び始め、単語や文法を覚えるのに精一杯であるのに、中国の日本語学んで いる学生は日本語のもつ温かさや敬語や方言などの細かい表現を大切にしようとし学ぼう としてくれたのは日本人としてすごくうれしいことであったし、私も同じように中国語を 学ぼうとしているものとして中国語の魅力にもっと気づけるように学びを深めていきたい と考えた。同じぐらいの年の中国人と交流できたことで、彼らが日本に来た時日本人が当 たり前と思っていることをどのようにとらえるのかどうかとても興味を持った。現地の学 生が日本や日本人の考え方のいいところをたくさん教えてくれた時、私は日本人の当たり 前を前提にして中国や中国人の考え方を客観的に捉えていなかったことに気づかされた。 この訪中団での活動を通して、両国がお互いに自国の当たり前を取り払って交流すること が大切であると感じた。確かに受け入れがたい考え方や全く違う生活スタイルであるかも しれないが、それは互いに同じであることを自覚できていなかったことを知った。私の大 学生活での目標である「広い視野を持てるように」なるためには当たり前を放棄しありの まま相手と関わる姿勢が必要であるということを訪中団の活動を通して学ぶことが出来た と考える。

◆今回の訪中は七日間という短い期間でしたが、私はとても大きな経験をすることができました。私にとっては初海外、初中国の訪問でした。訪れる前の私は中国にとてもいいイ

メージばかりを抱いてはおらず、中国国民は冷たい、空気は汚いといったむしろマイナスなイメージを考えていることが多かったです。しかし、今回の訪中でこれらのイメージはほとんどなくなりました。北京大学や浙江大学の学生さんと交流をしましたが、どの学生さんも日本の学生にとても親切に応じ歓迎してくださいました。そして中国の学生さんはとても熱心に勉強をし、好奇心もとても旺盛だということがわかりました。私たちが発する言葉を一つずつ丁寧に聞き取り解釈し、自分たちの意見を発言してくださいました。日本語、中国語がわからなくても英語でコミュニケーションをとり、身振り手振りも加えなんとか互いの思いを伝えようとする行為はとても楽しく、また言語の壁を乗り越える瞬間を味わえました。

私は山口大学の学生として今回の訪中団に参加しました。私たちの大学は日本の伝統的な踊りである「ソーラン節」を北京市人民対外友好協会や浙江大学の学生さん達に披露する貴重な体験をさせていただきました。自国の文化を他国の人々に伝えていきたいと思った私の今回の参加目的にぴったりの場でした。しっかり日本の文化を誇りながら踊ることを心掛けました。中国の方々や日本の方々にもとても反響があり、応援もしてもらえてとても嬉しく感じました。同時に中国の方々が文化を披露してくださり、私は中国の文化に圧倒されました。民族の踊りはとても美しく、華麗でした。日本にはない独特なメロディーやリズム、踊り子の衣装。中国伝統楽器での演奏にもとても魅了されました。もっと中国の文化を知りたい、体験してみたいという気持ちが大きくなりました。

世界遺産である万里の長城では、その広大さに圧倒されました。テレビでしか見たことがなく、憧れの地でもあります。想像以上に傾斜があり実際に上ってみて、昔の人々の暮らしの苦労さが少しわかった気がします。北京大学の訪問では様々な学生さんと交流することができました。日本のアニメが大好きな学生さんが多く見られたので少し意外でした。全て中国語というわけではないですが、その魅力さについて語ったり、好きな俳優などを聞いたりして日本の学生と変わりない会話を楽しむことができました。なかには日本に留学した際にぜひ会おうと言ってくれた学生さんもいて、日本に帰っても交流ができることに喜びを感じました。こういった関係を大切にしていきたいなと思います。

日本にいるだけでは分からない中国の姿を今回多く学ぶことができたと感じています。 中国のイメージを大胆に変えた友好訪問。この一週間という短い時間であり、濃い時間を 私は決して忘れません。日本と中国、相互の理解と発展を願い続けます。

◆2018年8月26日~9月2日の北京・杭州・上海への訪問は、短い期間ではありましたが 私にとって等身大の中国にふれられた1週間でした。

訪中する以前の私は、中国に対してよい印象よりも悪い印象を多く持っていました。というのも、中国と日本の間には、尖閣諸島の問題などをはじめとするさまざまな外交問題、マナーや大気汚染などの環境問題などといった角質が多くあり、それらは多様なメディアで報道されています。こういった、中国のネガティブな情報を日々目にしていたため、どうし

ても中国に対してよい印象は持てませんでした。

しかし、最近では隣国としてまた、ビジネスパートナーしてますます切り離すことができない関係になっているのが現実です。私は、メディアで取り上げられる中国が現実のものなのか、実際に中国を訪れ、中国の方々と交流することによって確かめたいと思い参加を希望しました。

今回の訪中を終えて、中国は確かに、トイレなどにおける衛生面での遅れや、PM2.5 などといった大気汚染の問題、また模倣商品といった日本でも大きく取り上げられている問題が数多く存在することがわかりました。それと同時に、ネオン輝く最先端のビルやタワーが、立ち並ぶ様からは経済大国としての中国を感じずにはいられませんでした。

そんな中、今回の訪中で、中国人に対するイメージが1番大きく変わりました。以前の私は、中国人の神社への落書きや、爆買いにおけるマナーの悪さなどといった情報から、中国人はマナーの悪く、非常識な人々が多いという印象がありました。しかし、実際には親切で、友好的かつ、とても常識的な中国人が数多く存在することがわかりました。特に、中国人の親切さを深く感じたこととして、私が道に迷っていた時のエピソードがあります。私は、夜の自由時間に買い物に行く途中、目的地への道のりがわからず1人の女性に声を掛けました。その女性は、私のたどたどしい英語を懸命に理解してくださった上に、目的地まで連れて行ってくださいました。こうした行為は、最近の日本でも減ってしまった行為だと思います。正直私は、中国の方がここまで親切にしてくださるとは思いませんでした。そのため、この記憶は鮮明に残っています。ほかにも、北京大学や浙江大学の方々との交流を通して、彼女たちの勉強への姿勢や、コミュニケーション能力の高さにとても刺激を受け、自分の彼女たちのようになりたいと思いました。

現在、中国と日本には外交問題をはじめとした諸問題が多く存在しており、本当の意味での友好が結ばれるのにはまだまだ時間がかかることと思います。私は、日中の友好のためにも、メディアに惑わされず実際の姿を知り、また現地の人と交流を図ることによって、本当の人間性を理解することが大切だと痛感しました。また、これからの日本は、目覚ましく経済発展を続ける中国との結びつきは強くしていくことでしょう。確かにそれらは日本の脅威になりうるかもしれません、しかし、両国を理解し、友好の心掛けがあれば、きっとうまく付き合っていくことができると考えています。

最後になりましたが、多くの素晴らしい両国の友人にめぐり合わせてくださった機会を 作ってくださった日中友好協会に感謝し、この経験を今後の糧にしていきたいです。

◆8月27日から9月2日の7日間、中国を訪問した。私は海外に行くことが初めてであり、かなりの期待と不安を抱えて中国に向かった。また、私は一年生ということもあり中国語の学習歴が半年間しかなかったため、自分の言語能力にも不安を抱えていた。そんな中、今回の中国訪問を経てまず真っ先に感じたことは、文化の差異と共通項である。私は四時間のフライトの後、北京空港にて現地の人の割り込み行為を目にした。事前にテレビ

やパソコン等で「中国では割り込み行為をよく目にする」という情報を得ていたが、実際 に目にするとは思っていなかったので驚いた。また、空港の通路や路上に座り込む人を目 にしたり、バイクやバス、車の交通マナーの悪さなどが目立ったように思えた。このよう な細かいところからもしばしば文化の差異を感じたが、最も文化の違いを感じた点は、食 事時である。中国在中の七日間で様々な中華料理を食べたが、中華料理は残すことが当た り前であり、食べきっていない料理は平気で下げられた。中国訪問の初日は「もったいな い」という気持ちでいっぱいだったが、三日目あたりから残すことが当然のように思うよ うになった。日本では食べ物を大切にすることが当たり前であり、食べ物に感謝して食べ るという文化がある。出国前は異文化に触れても影響されることはないと思っていたが、 訪中時に日本人としてではなく中国の文化に従い現地の人と同じように生活していたのだ ということに帰国後に気づくことができた。一方で、異文化の中で生活したからこそ、共 通の文化も多く存在していることに気づくことができた。バスに乗った際にバスガイドさ んの携帯電話の着信音がメヌエットであったことや美術館で見た絵画などから、クラシッ ク音楽や絵画等の芸術作品は世界共通であることが分かった。私は一週間という短い期間 ではあるが異文化の中で生活することによって、自文化・異文化双方の良さや悪さに気づ くことができたように思う。さらに、今回の中国訪問で一番印象に残っているプログラム は北京大学・浙江大学の訪問である。私は渡航前に言語の壁を不安に思っていたが、北京 大学・浙江大学の学生さんは日本語も英語もこちらが恥ずかしくなるほど堪能であり、非 常に刺激を与えられた。言語習得は異文化理解の第一歩であり、自国内であっても海外で あってもコミュニケーションをとることが大切であると再認識させられた。また、北京大 学・浙江大学の学生さんは日本のバラエティー番組やアニメ、ドラマ等の文化に日常的に 触れていることを知り、今回の中国訪問までに中国の文化に触れることはほとんどなかっ た私は非常に驚かされた。私も積極的なコミュニケーションを試みたものの、中国の文化 をほとんど知らなかったため、北京大学・浙江大学の学生さんの日本に関する知識量や探 求心に圧倒されるばかりであった。同じ大学生であるにもかかわらず、彼らの言語能力や 日本に対する関心に感動させられ、私自身も帰国後に中国語および中国の文化について調 べる機会が増えた。

今回の中国訪問を経て、異文化を積極的に理解することの重要性に気づくことができた。 今後、もう一度中国に行く機会があったならそれまでに言語や文化を受け身に待つのでは なく、自分から積極的に取り入れていく姿勢を大切にしたいと思う。

◆私は 2 度目の中国訪問で中国本土を訪れたことは初めてでした。訪中する前に中国の印象というと日本に観光客として旅行している人を見ているとマナーが悪いという点、自分の意志を高圧的に伝えるというなどのマスメディアの情報だけのマイナスのイメージしか持っていませんでした。また私は大学で情報について学んでいる観点から中国の「QR コード」の世界についてセキュリティー面はどうなのかという疑問などを持っていました。しか

し訪中させていただくと中国の印象は 180 度異なるものでした。訪中初日の北京首都空港 では入国審査前の指紋認証では近年のテロ防止などに厳重に対応しているという様子があ り日本よりもセキュリティーが厳しいことが良く分かり中国の安全対策に驚きを感じまし た。また北京大学との交流で私は北京大学の学生から「日本人から見た中国人の印象」につ いて聞かれた時にマスメディアの報道を過信してしまっていることを反省しました。近年 の日本と中国の両国の関係は良いとは言えない状態ということは知っていてもその影響で 中国人に悪い印象を持っている自分に対しマスメディアが発信する情報の重要性と信憑性 について日本は考える必要があるということに問題意識を感じました。その他にも中国は ネット環境も制限されているにもかかわらず日本のテレビ番組などを視聴できそのことで 中国の学生とも話題が盛り上がり中国と日本のテレビ番組の文化やアニメの「かわいい・か っこいい文化」は一緒であるということに気づかされました。一方杭州大学での大学生交流 では教育の在り方や教育格差について一緒に考えることができました。中国は日本よりも 経済的な格差が大きくその影響で学力にも格差が大きく生じてしまうという共通の問題を 抱えているということや、日本の ICT 教育やプログラミング教育についてではこれからを 担う子供達にとって将来どんな日本を作り上げていくのか、情報教育を活発化することに よって中国と共に交流し、そして学習する機会を増やすことはできないかという問題を一 緒に話し合うことができました。このような交流をすることは初めてでしたが 1 つの問題 に対して中国の学生は自分の意見を持ち、日本の学生と違った観点から考えていたことに 対して新鮮さを感じることができました。今回杭州では日本語ができる学生の皆さんと日 本語での交流となりましたが難しい日本語にも関わらず、積極的にスムーズに会話をして いただいたことに感謝しています。

6 日間の訪中でしたが今回で中国の同じ年代の学生さんと交流したことによってただ交流しただけでなくかけがえのない「国境を越えた友人」をたくさん作ることができたことに感謝しています。また、中国本土を 1 回訪問しただけでこんなに 180 度違った中国という国の優しさや学生の情熱を感じることができました。今回で私は残り学生生活で中国の文化をより知り、大学などの中国と日本の交流等に積極的に参加し新たな中国について知りたいと感じました。そのためには中国語を勉強し再び今回できた友人などとの交流をいつまでも続けていくことがまずは自己の課題であるということに自覚をもち生活していきたいと思います。7 日間貴重な体験をさせて頂くことができ大変うれしく思っております。ありがとうございました。また、今後ともよろしくお願いします。

◆今回の訪中は、私にとって非常に意味のあるものであり、私の人生に大きな影響を与えたと感じている。私がこの訪中を通して痛感したのは、自分の言語に対する意識がいかに甘かったかということと、いままでの自分の視野がいかに狭かったかということだ。このことに気づかせてくれたのは、現地の大学生と、一週間を共にした日本の8校の他大学の学生である。

私は英語が苦手だ。以前の私は、苦手という意識はあったものの、そのことに対して危機感は持っていなかった。そのため、受験勉強に必要最低限の英語しか勉強してこなかった。よく耳にする「英語は単語を3つ並べることができれば会話ができる」ということを根拠もなく過信していた。しかし、実際に自分とは異なる言語を使う人と話すとき、つまり、北京大学の学生と会話をするとき、この考えは大間違いだったと気づかされた。確かに、英単語3つで会話はできた。しかし、スムーズな会話はできなかった。私が北京大学の学生とコミュニケーションをとるのに苦戦している隣で、東京大学の学生が北京大学の学生と英語を用いて楽しそうに会話していた。非常に情けない気持ちでいっぱいになったと同時に、羨ましかった。

また、これは英語だけでなく中国語も同様であった。私は第二外国語の授業で中国語の 勉強をしている。そのため、中国語で簡単な会話くらいならできると思っていた。しか し、今回の訪中で私が中国語を使った回数は片手の指で数えても指が余るくらい少なかっ た。授業で習ったことを全く活かせなかった。一方で、中国の学生を見ると、日本語専攻 ではない学生でも日本語を使って話そうとしてくれるという場面を多く見かけた。少しの 英語、少しの中国語を知っているだけでは意味がない。その言語を用いてのコミュニケー ションがグローバル社会で最低限求められるラインだ。私は、初めての海外渡航で現実を 見ることができた。

今回の訪中前、私は東京の大学生とも中国の大学生とも積極的に関わって、たくさん友達を作ろうと意気込んでいた。しかし、訪中を終えて日本に帰国した今考えてみると、この訪中で仲が深まったのは、同じ山口大学の学生とだけである。この原因は、東京の学生に対して、私が田舎者であるという劣等感を抱いてしまったせいである。また、関東の地理がほとんどわからず、会話についていけなくなると諦めてしまったせいでもある。このような私とは逆に、他大学の学生同士はどんどん仲を深めていった。その様子を見て、私はさらに自分の殻に閉じこもってしまった。田舎者なら田舎者にしかできない話を東京の学生達にすればよかったではないか。関東のことを知らないのなら、関東の学生に聞く絶好の機会だったのではないか。今思うと反省だらけである。他大学の学生も中国の学生もこれまでに様々な経験をしてきたようだ。その経験が彼らの自信につながっているのであろう。また、様々な経験をしてきたから、広い視野を持ち、多方面に会話を広げることができるのであろう。

今回の訪中を経て、私は、自分の視野の狭さを恥じ、もっとグローバル社会で必要とされる人物になりたいと強く思うようになった。この訪中は、間違いなく私を成長させてくれた。

◆今回、日中友好大学生訪中団として活動させていただき、本当に貴重な経験を積むことができました。私は正直、中国に対してあまりいいイメージを持っていませんでした。もちろん、科学技術が進んでいることや文化の面での優れている点も認識していましたが、大気汚

染などの衛生面のことや、メディアが流している政治情勢などの情報によって、いいイメージよりもよくないイメージを強く持っていました。しかし、そんな私の思い込みも、今回の 訪中で変えることができました。そこで、今回の訪中を振り返りたいと思います。

この日中友好大学生訪中団の活動は、成田での事前研修会から始まりました。訪中団の団長である西堀正司さんのお話や、各大学の代表のあいさつを聞いて、いよいよ訪中するのだ、団員としてしっかり中国について学び、様々な経験をしてくるのだ、と身の引き締まる思いでした。また、日中友好協会副会長の橋本逸男さんのお話も拝聴しました。普段はなかなかお話しできない方の貴重なお話を聞けて、これから向かう中国に対して自分の知識や考えを深めることができました。

中国についてからの活動としては、まず万里の長城へ行きました。中国の古代からの文化に触れ、世界遺産という有名な観光地とあり私たちを含む様々な国の人々が観光に訪れており、多くの人が中国の歴史や文化に興味を持っているのだということが窺えました。この日、私が一番印象に残っていることは夜の歓迎夕食会です。そこでは中国や北京市を代表する方々が豪勢な食事や出し物を準備して歓迎してくださりました。中国の方が日本語でスピーチされており、その流暢な日本語やスピーチの内容、堂々とした話しぶりに感動しました。また、中国の民族であるウイグル族の伝統舞踊や二胡の演奏を拝見、拝聴し、中国の文化をとても素晴らしいものだと感じることができました。私たち訪中団も、歓迎のお礼にソーラン節や合唱を披露し、良い文化交流の機会になったと思います。

活動の中で、北京大学や浙江大学を訪問したり、日本語が堪能な中国人大学生・大学院生 にガイドをしてもらったりと中国の大学生と交流する機会が多々ありました。中国の学生 の皆さんは自分の大学や国についての知識が豊富でしっかりと自分の考えを持っておられ、 感心するとともに見習わなければならないと感じました。しかし、ディスカッションを重ね たり活動を通して会話をしたりすることで、中国の学生も私たち日本人学生と同じなのだ ということも感じました。ガイドをしてくださった学生の中には山口大学に留学していた ことがあるという方もおられ、話も弾み、打ち解けることができたと思います。ほかの中国 人学生とも時には、日本のアニメや漫画、ゲーム、テレビ番組などの話で盛り上がることも あり、やはり住んでいる国が違うだけの同じ世代の学生なのだと思いました。冷静に考える と当たり前の事実ですが、私は実際に交流して初めてこの感想を持ちました。このことから、 メディアの情報を鵜呑みにして振り回されたり印象操作されたりすることの怖さを学びま した。知らないことはだれだって怖いし、確かなことがわからないからマイナスなイメージ を持ってしまうのだと思うのです。活動中何度か耳にした「日中の平和、友好は民間から」 という言葉が強く印象に残っていますが、本当にその通り、いや、それしかない、それに尽 きる、と痛感しました。日中友好を国レベルで見るとまだまだ改善の余地があると思います。 私たちにできることは大きなことではないかもしれませんが、知らない事には積極的に、知 ろうという姿勢で関わっていくこと、メディアや周りからの情報に振り回されないこと、今 暮らしている日本という国を外国の方にきちんと伝えられるように理解を深めることなど はできると思います。訪中団での経験を忘れず、千人大会の終わりにも出た言葉ですが、私

たち「青年」は「未来」の「希望」なのだ、「希望」を担っているのだという自覚をもって これからを過ごしていきたいと思います。このような貴重で素晴らしい機会をくださり、本 当にありがとうございました。この日中友好大学生訪中団に関わってくださったすべての 方々に感謝致します。

◆私は今回、日中友好大学生訪中団として中国に訪問した。私にとって、初めての海外ということもあり、楽しみな気持ちも大きかったが不安も同じくらい大きかった。それは、私の中で中国に対するイメージがあまり良くなかったことが原因だろう。私は、できるだけ偏見を持たないように、多面的に物事を見るように努めていた。しかしそれでも、中国について耳にする話はネガティブなものばかりだった。中国の人は皆気が強くて、こちらの話を聞いてくれない。そんなステレオタイプなイメージを持っていたが、今回実際に中国の学生と交流すると、イメージと現実との違いに驚いた。

というのも、交流した中国の学生たちは皆話しやすくて優しい人ばかりだったからである。北京大学での交流では、こちらの質問に丁寧に答えてくれるだけでなく、他にわからないことはないか聞いてくれたり、日本ではどうなのか、逆に質問してくれたりした。また、こちらが回答を考える間も、口を挟まずに待ってくれていて、日本の人より礼儀正しいと感じたほどだ。さらに、北京大学で交流した学生は、日本のテレビ番組やアニメをよく知っていた。俳優やキャラクターの話など、日本の学生と話すのと変わらないような話題で盛り上がることができ、これもまた、強く印象に残った。浙江大学で話した学生も、将来の仕事についての考えや学校での勉強について、嬉しそうに紹介してくれた。物腰柔らかに話すその様子は、私が今まで持っていた中国人のイメージとかけ離れたものだった。

また、それと同じくらい驚いたのは、中国の経済発展の目覚ましさである。私は大学で経済学を学んでいるため、近年の中国の発展について、知識として理解はしていた。しかし実際に北京や上海の街並みを目にすると、日本の大都市と変わらないその光景に驚いた。大通りにはごみ一つ落ちておらず、デザイン性の高い高層ビルが立ち並び、夜にはビルの高層部に取り付けられた広告のネオンが輝くという風景は、私が想像していたよりもはるかに発展した中国経済の一端を象徴しているかのようだった。特に印象強いのは、北京で訪問した創業公社だ。創業公社は、スタートアップ企業に対してオフィスの貸し出しや、住居の提供、その他生活サービスの提供を行うことで技術力や競争力の獲得を支援するという組織だ。紹介された商品や技術のレベルの高さもさることながら、国を挙げてスタートアップ企業を支援するというシステムの規模の大きさに驚いた。日本では、これほど大規模に起業家やベンチャー企業を育成する仕組みはできていないだろう。次代の大企業を育成することに力を入れている中国は、これからさらに発展するだろうことが肌で感じられた。

今回訪中団に参加して改めて感じたのは、物事を理解するためには、情報をインプットするだけでなく、本物に触れることが必要だということである。中国の大学生と対面して交流したことで、それまでの中国人のイメージと、実際の中国の方は全く違うということを知る

ことができた。今までの私が、中国人についての悪い情報に引きずられ、必要以上に警戒していたということを、身をもって知ることができたのはとても大きな収穫だと考える。また、中国の経済についても、創業公社見学や都市散策によって、より現実感を持って捉えることができた。これらの体験は、普通の中国旅行では得られなかったものだろう。大学生という早い段階で、異文化に対する考え方や知識のつけ方を実地的に学ぶことができて大変嬉しく思う。

最後に、このような貴重な体験をさせてくださった日本中国友好協会の方々、及びこの訪中で関わったすべての方々に感謝申し上げます。

◆この度の日中友好大学生訪中団にて、生まれて初めて中国に渡り、日本にいるだけではできない経験をたくさん得ることができた。その経験は、訪中するまでの私と、訪中してからの私とで、中国に対する考え方に大きな変化を与えてくれた。

まず、訪中以前における中国に対する私の印象を述べたい。最初に私の中国への印象を決めたのは、テレビから時折得られる、主に政治的な側面での中国と日本との関係性の情報だった。領土問題や、歴史問題で度々、互いの異なる意見を主張し合い、反日教育や反日デモを行う、ということから、日本とは水と油のような関係の国だ、というあまり好意的でない印象を持っていた。大学1年生の時に、第2外国語として中国語を選択し、一年間、中国人の先生から、初歩的な中国語を学んだ。その講義の中で、中国の人々の実際の暮らし、として、中国の大きなイベントや、中国で人気の歌など、生活に根付いた小話を聞かせてもらう機会が多々あった。春節や、いわゆる「独身の日」で国民が一つのことに盛り上がる様子や、中国独特の雰囲気を醸し出す音楽などに触れることで、それまでの、堅苦しく、冷たい国、という否定的な印象から、私が思っていた以上に、人情味の溢れるのかもしれない、という思いを抱いた。また、大学2年生となり、中国の戦後経済を一通り学び、中国がどのように経済発展してきたのか、人々の暮らしはその中でどう変化してきたのかを知ることができた。それを受けて、少し考えれば当たり前のことではあるが、中国の人々が辿ってきた歴史は、形は違えども、日本が今日に至るまでに積み重ねてきたものと大差はないのだと考えを改めた。実際に訪れるまでの中国の印象は、このようなものであった。

次に、訪中の間に私が感じたこと、考えたことを3つ挙げたい。1つ目は、日本で中国について得られる情報は、事実のほんの一部を切り取ったにすぎないのだ、ということだ。例えば、移動中に街並みを眺めていると、日本とは違う建築物の構造や、事前に聞いていた以上の車社会であることが窺えた。それらは、実際にこの目で見るからこそ知ることができたことであり、日本で見ることだけがすべてではないのだと感じた。2つ目は、急激に発展した中国では、その速度に追い付いているものと、追いついていないものがあるのだ、ということだ。街を歩いていると、どの店にも「微信」と書かれたステッカーが貼られ、レジでお金を払うときも、現金を渡そうとすると、店の方が一瞬、戸惑ったような反応を見せることから、電子決済が一般化されていることを実感できた。便利な技術はどんどん一般化し、浸

透させていく、という実態を肌で感じることができ、とても興味深かった。一方で、車が増えすぎており、それを取り締まる規制と、それに対する人々の対抗策とがいたちごっこの状態である、という話をガイドの方から聞き、一般化が速すぎて、国が管理がしきれていないという現状もあるのだと知り、急速な発展の弊害として、そういうこともあるのか、ととても感心した。3つ目は、中国の大学生は、とても前向きだ、ということだ。北京や杭州で現地の大学生と話す中で、こういう仕事がしたい、こういうことがしたい、そのために、今、懸命に勉強しているのだ、と話す人と数多く出会った。将来について語るその様子は、とても希望に溢れていて、絶対にそうなるのだ、という自信に満ちていた。自分の将来について、まだ確固たる目標が定められていない私から見ると、その様子はとても眩しく、とても憧れるものだった。そして、明確な目標を持って今を過ごす大切さを、彼らの姿勢から深く学んだ。

最後に、中国で私が得たものを述べたい。百聞は一見に如かず、というが、断片的な情報を合わせて想像するよりも、実際に訪れ、その場で直に見聞きする方が、粗削りながらも鮮明な印象を抱くことができた。また、同世代の大学生と交流し、見習うべき姿勢や、別の視点から見た自分たちを改めて認識することができ、これからの日々を過ごす中で、大切なことを学ぶことができた。中国を訪れ、見て、聞いて、感じたことは、確実に私を大きく成長させてくれた。また機会があれば、私を変えてくれた中国に足を運べることを、強く願う。